

# 『源平盛衰記』全釈（二三—卷四—3）

早川厚一  
曾我良成  
近藤泉  
村井宏栄  
橋本正俊  
志立正知

1 藏人左少弁<sup>2</sup> 兼光<sup>3</sup>仰<sup>4</sup>ヲ奉<sup>5</sup>テ、先例<sup>6</sup>ヲ大外記<sup>7</sup>、師尚<sup>8</sup>ニ被<sup>9</sup>尋ケル上、院ノ殿上ニテ公卿僉議アリ。保安ノ<sup>10</sup>例トテ、神興<sup>11</sup>ヲ祇園社<sup>12</sup>ヘ可<sup>13</sup>奉<sup>14</sup>レ渡<sup>15</sup>之由、諸卿各<sup>16</sup>被<sup>17</sup>申ケレバ、未刻<sup>18</sup>ニ及<sup>19</sup>テ、彼社ノ別当<sup>20</sup> 権大僧都<sup>21</sup> 澄憲<sup>22</sup>ヲ召<sup>23</sup>テ、神興<sup>24</sup>ヲ可<sup>25</sup>奉<sup>26</sup>「迎入」由仰含ケリ。澄憲<sup>27</sup> 畏<sup>28</sup>テ奏<sup>29</sup>申。「我山ハ<sup>30</sup>是<sup>31</sup>日本無双之靈地、<sup>32</sup>鎮護国家之道場也。我<sup>33</sup>神ハ又<sup>34</sup>和光垂跡之根元、効驗<sup>35</sup>揭焉之明神也。<sup>36</sup>日吉ノ神威<sup>37</sup>異<sup>38</sup>于他、山門ノ効驗<sup>39</sup>勝<sup>40</sup>于世。惠亮<sup>41</sup>脳<sup>42</sup>ヲ推<sup>43</sup>テ清和位<sup>44</sup>ニ即<sup>45</sup>給、尊意<sup>46</sup>劍<sup>47</sup>ヲ振<sup>48</sup>テ將門終<sup>49</sup>ニ亡<sup>50</sup>ニキ。<sup>51</sup>神ハ又<sup>52</sup>アクマデ<sup>53</sup>一乘ノ法味ヲナメテ、<sup>54</sup>感応風雲<sup>55</sup>ヨリモ速<sup>56</sup>ニ、<sup>57</sup>独<sup>58</sup>百神<sup>59</sup>ノ化導<sup>60</sup>ニ<sup>61</sup>秀<sup>62</sup>、賞罰<sup>63</sup>日月ヨリモ明ナリ。

【校異】 1 〈近〉「くらうとさせうべん」、〈蓬〉「藏人左少弁」、〈静〉「藏人左少弁」。2 〈蓬・静〉「兼光」の右に「資長子」を傍記。3 〈近〉「うけたまはて」、〈蓬〉「うけ給て」、〈静〉「うけたまはりて」。4 〈近〉「もろなをに」、〈蓬・静〉「師尚に」。5 〈蓬・静〉「例にて」。6 〈近〉「をよんて」、〈蓬〉「及て」、〈静〉「をよひて」。7 〈近〉「ごん大そうつ」、〈蓬・静〉「権大僧都」。8 〈近〉「てうけを」。9 〈近〉「かしこまつて」、〈蓬〉「畏て」。10 〈近〉「につほんぶさうの」、〈蓬〉「日本無双の」、〈静〉「日本無双の」。11 〈近〉「ちんごこつかの」、〈蓬〉「鎮護国家の」、〈静〉「鎮護国家の」。12 〈近〉「しんは」、〈蓬〉「神は」。13 〈静〉「和光垂迹の」。14 〈近〉「かつゑんの」、〈蓬〉「揭焉の」、〈静〉「揭焉の」。15 〈近〉「ひよしの」、〈蓬〉「日吉の」。16 〈近〉「たにことに」、〈蓬〉「異于他」、〈静〉「異于他」。17 〈近〉「世にすくる」、〈蓬〉「勝于世」、〈静〉「勝于世」。18 〈近〉「くたいて」、〈蓬・静〉「くたきて」。19 〈静〉「亡き」。20 〈近〉「しんは」、〈蓬〉「神は」。21 〈近〉「一乗ノ」なし。22 〈近〉「かんおう」、〈蓬・静〉

「感応」<sup>カンオウ</sup>。23 〈近〉「げだう」。「二」なし。24 〈近〉「ひいづ」〈蓬・静〉

「秀て」<sup>ヒョウテ</sup>。25 〈蓬〉「日月より」〈モ〉なし。

【注解】○藏人左少弁兼光仰ヲ奉テ、先例ヲ大外記師尚二被尋ケル上  
安元三年（一一七七）四月十三日に、武士の放った矢が強訴に及んだ十禅師の神輿に当たり、神人や宮仕も矢に中って死んだため、大衆は神輿を閑院内裏近くに放置したまま帰山した。その対応に当たり、朝廷は藏人左少弁兼光に命じて、先例を大外記の師尚に調べさせた。兼光については、本全釈の注解「藏人右少弁兼光」（八—五三—五四頁）参照。〈延・長〉は名を記さず、「藏人左少弁」のみ。〈四・闕・南・屋・覚・中〉は〈盛〉に同。兼光の任左少弁は、『弁官補任』によれば、承安二年（一一七二）二月二十三日、任権右中弁は、治承三年（一一七九）十月九日。大外記師尚は、〈四・南〉同、〈闕〉「大外記（巻一上—三六オ）、〈延〉「出羽守師尚」（巻一九九ウ）、〈長〉「大外記出羽守もろなを」（1—一〇五頁）、〈屋〉「大外記師久」（八一頁）〈中〉「大げきもろひさ」（上—六三頁）。〈延〉は、大外記に触れないが、ここは触れるべきだろう。〈長〉本文の略述か誤脱と考えられる。〈覚〉は、「藏人左少弁兼光に仰て殿上にて俄に公卿僉議あり」（上—五九頁）と、師尚に触れないが、あるべきだろう。師尚は、安元三年時点では、大外記だが、「正五位下中原師尚〈大炊頭主計権助備後権介〉」（『外記補任』続群書四下—九七一頁）で、〈延・長〉の記す「出羽守」は確認できない。この後も師尚に出羽守任官の記録は見られないが、父の師元が、仁安元年（一一六六）一月十二日に、大外記から出羽守に遷任（〈延全注釈〉巻一—五七三頁参照）。○院ノ殿上ニテ公卿僉議アリ（〈盛〉は、院の殿上で公卿僉議があったとするが、〈四・闕・延・長・覚・中〉は、「殿上」でのこととする。『玉葉』十四日条によれば公卿

の議定は「昨日於内裏、被問入々事」、「今日又被問入々」とあるように、「昨日」（於内裏）と「今日」（於院）の二回行われている。「今日」の議定が院御所のどこで行われたかについての説明はない。院の中の内裏に措定された部分で行われれば、陣定や（内裏）殿上定となり、上皇の管轄する空間で行われれば〈盛〉の記すように院の殿上定などとなるが、実態は不明。〈盛〉本文にあるような「神輿ヲ祇園社」へという結論が出たのは「昨日」のこと（「可被奉渡」祇園」）であり、移送が完了している（「仍被奉移祇園」）。「今日」院で審議されたのは敗軍が洛中に乱入することへの対応策であった。審議された場の錯乱なのか、院宣を強調するためにあえて院御前としたかは不明。○保安ノ例トテ、神輿ヲ祇園社ヘ可奉渡之由、諸卿各被申ケレバ（〈盛〉のように、保安（四年）の例のみを挙げて、今回は保安の例に従ったとするのは、他に〈闕・南〉一方、〈四・延・長・屋・覚・中〉は、保安四年（一一二三）の例と保延四年（一一三八）の例とを挙げ、今回は保延四年の例に従ったとする。保安四年の事件とは、七月十八日に起きた。『百練抄』「天台衆徒為先神輿、欲乱入京中。公家遣武士。相禦于垣川辺之間、棄神輿退散。又山僧等籠祇園内。仍遣越前守忠盛、左衛門尉為義追却之間、互合戦。神殿内多損命者」。後日造「改神殿奉移御躰」、「二代要記」七月十八日、衆徒昇日吉七社神輿入洛。官兵奉防之間、奉寄河原畢。忠盛朝臣於越前国擲取神人之故也。又大衆籠祇園之間、遣忠盛・為義等被追罰。无裁許。河原神輿奉送赤山」（『続神道大系二—一〇九頁』。『二代要記』によれば、事の発端は、忠盛が越

前国で、神人を絡め取ったことによる。その後山門の大衆等は日吉七社の神輿『延暦寺護国縁起』によれば、「先三社、後四社。已上七社入洛。其後七社入洛之儀未聞其例云々」〔統群書二七下―四三八頁〕とある）を振り強訴に及んだが、武士の反撃に遭い、大衆は神輿を河原に置いたまま、祇園に籠もったとする。この時、河原に放り出された神輿は、『四』では、「菩提山社」（巻二―五六左）とするが、『長・屋・覚』では、「赤山の社」（『長』1―10五頁）に送ったとし、『一代要記』に一致する。『四』の「菩提山」は、「赤山」の「赤」を、「菩提」の省字と見誤ったことによるか（『四評釈』三一九三頁）。「赤山」は京都市左京区修学院にある天台宗の赤山禪院のこと。「赤山明神を祀り、赤山明神社・赤山大明神ともいう。創建は仁和四年（八八八）で、『慈覚大師伝』に「仁和四年建立大師本願禪院、是南大納言山莊也、在延暦寺西坂下、大衆合力以錢二百貫買得也」とあり、大納言南淵年名の山莊であった」（『平凡社地名・京都市』一二四頁）。このように、衆徒が祇園社に籠もったものの、神輿が祇園社へ渡し入れられたことは確認できない。なお、この保安の例は、この後「神輿ヲ下シ奉事」の前例として取り上げられる（一一二五八―二五九頁）。一方、保延四年の事件は、四月二十九日に起きた。『四・中』は、「七月」のこととし、『長・覚』は「四月」のこととする。『四・中』は、保安の事例との混乱があるか。『百練抄』「天台大衆為先神輿參陣。訴申賀茂社領下司日吉社五月五日馬上事」。蒙裁許<sub>レ</sub>歸山、『一代要記』四月廿九日、台嶺衆徒捧三社へ八王子・客・十禪寺、并祇園・北野・京極寺等神輿參陣頭。加賀<sub>マ</sub>莊下司可勤馬上之由訴申之。蒙裁許<sub>レ</sub>衆徒奉還神輿畢。座主東陽房忠尋」（統神道大系二―一二四

頁）。山門衆徒と賀茂神社下司との争いで、神輿を担ぎ出し訴えたが、裁許があったため還幸したという。『四・延・長・屋・覚・中』では、今回は、「可為保延例」（『延』巻二―九九ウ）とて、神輿を祇園社へ渡したとするが、保延四年の折には、『百練抄』や『一代要記』によれば、裁許があったため祇園社等へ渡されることなく、帰山している。なお、この保延の例も、この後「神輿ヲ下シ奉事」の前例として取り上げられる（二五九頁）。以上見たように、ここに引かれる保安・保延いずれの場合も、破棄された神輿を祇園社へと渡した前例とはなり得ていない。○未刻ニ及テ、彼社ノ別当権大僧都澄憲ヲ召テ、神輿ヲ可奉迎入由仰含ケリ「未刻」、『四・延・長』同、『闕・南・屋・覚・中』「秉燭」（『覚』上―五九頁）。事実関係は不明。この時の祇園別当は、信西の子澄憲であった。『玉葉』直被<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>仰澄憲了（祇園別当也）（治承元年四月十八日条）。祇園社はもと興福寺の末寺であったが、天延二年（九七四）には天台別院として、延暦寺の支配を受けるようになり、延久四年（一〇七二）の後三条天皇による初行幸の頃に、比叡山の末寺組織として成立した。その後、山門大衆の群訴の場であった祇園社は、座主の直接統轄下に置かれることで、神輿動座、強訴に対応しようとしたかとされる（福眞睦城四九―五七頁）。なお、この時澄憲は、日吉の神輿を祇園社に移すことについて権限外であるとして一旦は拒否をしている。『愚昧記』「昨日神輿等仰祇園別当澄憲令移祇園云々、澄憲固辞云、於祇園興者依為進止可奉移、至日吉神輿不能奉移云々。而慥可奉渡之由有院宣。仍奉渡了云々」（治承元年四月十四日条）。○澄憲畏テ奏申澄憲の以下の弁舌は、『四・延・長』にも見られるが、『闕・南・屋・覚・中』には見

られない。この弁舌自体は史実ではないだろうが、澄憲にこのように語らせるのは、彼が安居院流の祖として説法の名人として認められていたことによるだろう。彼の説法の才は巻三で描かれていた（本全釈一〇—四〇頁「山門ノ権少僧都澄憲」参照）。また澄憲が関わった唱導資料にはしばしば山王信仰が窺えるのであり（曾根原理）、『言泉集』『転法輪鈔』には、山王三聖、十禪師などを讃える文言が散見する他、『澄憲作文集』には「第廿三 山王」が挙げられる。また山王神道書『耀天記』の「二 大宮御事」では、「導師澄憲法印説法之時」として、最澄による山王三聖の勧請が説かれることが知られている（『神道大系 日吉』四六頁）。また、後まで安居院は山王信仰との繋がりが深く（清水眞澄五二頁）、『山王絵詞』巻十四—一二には安居院に山王が祀られていたことが窺える（「正応三年十二月十六日、安居院の法印、惣門の脇より火出て、程なく本堂へかかりけり。おりふし上下悉く留主にて、当番の承仕法師一人の外なかりければ、とかくして本尊をば出したてまつるといへども、累代の山王の御体を焼たてまつらん事を歎て」『統天台宗全書 神道一』四七二—四七三頁）。さらに同書は安居院の覚守が編纂に関わったともされている（下坂守四二頁）。安居院流が日吉社の伝承を担っていたことは、濱中修にも指摘がある。このような山王信仰と澄憲・安居院との関わりもこの弁説の背景としてあるだろう。○我山ハ是日本無双之靈地、鎮護国家之道場也 以下、「我山ハ……我神ハ……」「日吉ノ神威……、山門ノ効験……」「惠亮脳ヲ推テ……、尊意剣ヲ振テ……」と対句仕立て文章が構成される。この後、大衆の語の引用として「我山万山ニ勝タリ」とあることから明らかに、「我山」は、いずれも「叡山」と置き換えられる

語（水原一、一〇頁）。〈延〉「帝（桓武天皇）余リニ当山ヲ執シ思食テ、御詞ノツマニモ、「我山」トゾ仰有ケル。サレバ近來モ山門ヲ「我山」ト申ハ、彼御詞ノ末トカヤ」（巻一—八六ウ）。〈盛〉「祐慶ハ少モヘラズ、鎧ノ胸板キラメカシ、扇披遣テ申ケルハ、『我山ハ是日本無双之靈地、鎮護国家之道場也』（一—三〇二—三〇三頁）。比叡山を誇らかに紹介する際の常套句として見られる。なお、当該記事を記すのは、〈四・盛〉だが、〈四〉は、「我山ハ」の代わりに、「此（神輿）神輿（は）申是日（は）本無双（の）靈地鎮護国家之道場（なり）」（巻一—五七右）とする。「我山ハ」が良い。○我神ハ又和光垂跡之根元、効験掲焉之明神也「我神」は、前の「我山」と対で日吉山王をいう。〈四〉は、前項の記事に続け、「和光垂跡（の）根源（なり）」（巻一—五七右）と続ける。「効験掲焉之明神也」は欠く。〈延〉は、「天下無双ノ垂跡、鎮護円宗ノ靈神也」（巻一—九九ウ—一〇〇オ）とし、〈長〉は、「此神と申は、天下無双のすいじやくゑんしゅちんこの靈神也」（一—一〇五頁）とする。なお、〈四・延・長〉は、澄憲の弁舌の冒頭で「白昼ニ塵灰ノ中ニ蹴立進セテ、当社へ奉入事、生々世々可口惜（き）。王法ハ是仏法ノ加護ヲ以テ国土ヲ持チ給フニ非ヤ」（〈延〉巻一—一〇〇オ）と、神輿を白昼に迎え入れることの非を説き、仏法による王法の加護を主張した上で、山王の靈験譚を続け、さらに末尾を「カ、ル目出タク止ム事無キ御神ヲ白昼ニ雜人ニ交ヘ奉テ奉ラン動（う）」（一〇—一ウ）と結ぶ構成となっている。○日吉ノ神威異于他、山門ノ効験勝于世…次節の「尤恐思召ベキ事也」まで、〈盛〉の独自異文。日吉の神威、山門の効験が他に勝ることを、以下惠亮や尊意の事例等で示す。○惠亮脳ヲ推テ清和位ニ即給〈盛〉「天子ノ御位ハ人力ノ及所ニ非ズ、天照太神ノ御計ト申ナガラ、惠亮ノ効験山

門ノ面目ニテ、御嫡子ヲ越テ次第御位ニ即給ヘリ。其ヨリシテ山門ノ訴狀ニハ、今ノ代迄モ惠亮辟腦尊意振劍トハ書トカヤ」(4―15〇三頁)や、第二種七卷本『宝物集』「延暦寺の衆徒の奏狀には、「ともすれば惠亮腦をくだき、尊意劍をふる」とぞ書侍る」(新大系八二頁)に見るように、山門奏狀で好んで用いられた(牧野淳司五二頁)ように、叡山仏法の靈力の卓抜なることを宣揚する役割を担って流伝したのである(今成元昭二七五頁)。「盛」でこの後に引かれる奏狀などにも、卷二十四・山門都返奏狀「或医王山王、擁護一天、所謂惠亮摧腦、尊意振劍」(三―四五三頁)、卷三十・木曾山門牒狀「彼惠亮摧腦、尊意振劍、捨身奉祈聖朝安穩之旨」(四―三七五頁)とある。当該句は、惟喬・惟仁位争い話に発するが、早い事例である『江談抄』では、祈禱したのは真済と真雅であり、勝敗についても記していない。その後、佐伯有清等により、惠亮も惟仁の祈禱僧の一人であることが判明した(一四三―一四五頁)。以上の論を受けた今成元昭①は、「真済の怨霊調伏談を相応や浄蔵の名において所有していた天台宗教団が、真言宗内部で真雅側の作った真済に対する勝利談を、惠亮の名において換骨奪胎して、生前から死後にかけての徹底的な真済調伏談を組み立て、以て山門の法験誇りに利用した」(二八六頁)と想定する。○尊意劍ヲ振テ將門終ニ亡ニキ 尊意振劍話は、將門調伏の際と、道真鎮慰の折とするものと二つある。今成元昭②は、『扶桑略記』所引の「浄蔵伝」に見られるような浄蔵による將門調伏譚が元の形で、尊意による將門調伏譚は、それを換骨奪胎したものとする(二九六頁)。尊意による將門調伏譚は、天治二年(一二二五)書写の『僧妙達蘇生注記』に見え、『玉葉』治承四年(一一八〇)二月四日

条にも、中原頼業から聞いたこととして同様の話を記しているが、必ずしも広く知られてはいなかったであろうことを指摘する(二九四―二九五頁)。さらに佐々木重太は、『阿婆縛抄』所引「功德院実内阿闍梨記」の記述などから、尊意による將門調伏譚が延暦寺において享受されていたことを指摘する(七二頁)。一方で、尊意の道真鎮慰譚は、『北野天神縁起』以上には廻りえないとされる(今成元昭②三〇〇頁)。一般的にはこれが広まり、「寛」は卷八「名虎」で、「山門には、いさゝかの事にも、『惠亮腦をくだきしかば、二帝位につき給ひ、尊伊智劍を振しかば、菅承納受し給ふ』とも伝へたれ」(下―七八頁)とし、道長鎮慰で用いている。なお、田中徳定①②は、『道賢上人冥土記』や『阿婆縛抄』「不動明王念誦次第」・『覺禪抄』「太元法上」を指摘し、「尊意振劍」とは、「尊意が不動法を行なったことを象徴的にいった成句だった」とする(①三〇頁。②二二頁)。「盛」「法性坊大僧都尊意蒙勅命、延暦寺ノ講堂ニシテ承平二年二月ニ將門調伏ノ為ニ不動安鎮ノ法ヲ修ス」(卷二十三「駅路鈴」、三一三九七頁)。○神ハ又アクマデ一乗ノ法味ヲナメテ… 山王の神は、飽きる程まで天台の教えに堪能なさつての意。当該句は、次節に引く住吉と日吉の二神協力譚の一節と関わる(住吉明神託宣云……「項参照」。例えば「延」には、二神協力譚に続いて、次のようにある。「延」凡ソ吾朝ノ大將トシテ夷賊ヲ征伐スル事既ニ七ケ度ナリ。山王ハ鎮ヘニ一乗ノ法味ニ飽満シ給ヘルガ故ニ、勢力吾ニ勝レ給ヘリトゾ示シ給ケル」(卷一九一ウ)。傍線部が、「盛」の当該句と関わる。傍線部の一節は、他にも二神協力譚と共にほぼ同文で、『太平記』(玄玖本四一九〇頁)に見られる他、光長寺蔵『山門奏狀』(第二紙裏。小西徹龍八九頁)や、『日吉山王



記』第十八「御託宣事」（『統天台宗全書 神道1』二八〇頁）にも見られる。〈盛〉の当該句は、改変されたものであろうか。『山王絵詞』「実円頓の法味をあぢハひて、威光を天下ニ耀、威徳を海内ニふるひ給へり」（『統天台宗全書 神道1』四二四頁）もこれに類似する。○

独百神ノ化導ニ秀 山王は他の神々を教え導く秀でた存在であると説

く。『山王絵詞』「然則我山王大宮権現、この一乘法花の機縁を照し給ひ、大悲深重の願力ニ、諸仏菩薩もともなひくみし奉て、今諸神諸社とハあらハれ給所也。故山王ハ此百神の本也」（『統天台宗全書 神道1』四二四頁）。

【引用研究文献】

- \* 今成元昭①「惠亮破脳・尊意振剣」の成句をめぐって―その一―（立正大学文学部論集七七号、一九八三・12。今成元昭仏教文学論纂第四巻『平家物語研究』法蔵館二〇一五・9再録。引用は後者による）
- \* 今成元昭②「惠亮破脳・尊意振剣」の成句をめぐって―その二―（立正大学人文科学研究所年報二二号、一九八四・3。今成元昭仏教文学論纂第四巻『平家物語研究』法蔵館二〇一五・9再録。引用は後者による）
- \* 小西徹龍「光長寺蔵「山門奏状」について」（古文書研究三九号、一九九四・10）
- \* 佐伯有清「伴善男」（吉川弘文館新装版一九八六・9）
- \* 佐々木雷太「尊意振剣」の背景について―将門調伏譚から柘榴天神説話への展開―（伝承文学研究五四号、二〇〇四・12）
- \* 下坂守「山王靈験記」の成立と改変」（京都国立博物館学叢一一号、一九八九・3。『描かれた日本の中世―絵図分析論』法蔵館二〇〇三・11再録。引用は後者による）
- \* 清水真澄「安居院の力―十四世紀の実像を考える―」（伝承文学研究六五号、二〇一六・8）
- \* 曾根原理「安居院澄憲の山王信仰」（東北大学附属図書館研究年報三〇号、一九九七・12）
- \* 田中徳定①「尊意振剣」小考」（並木の里三〇号、一九八八・6）
- \* 田中徳定②「尊意振剣」小考補訂―尊意の将門調伏譚をめぐって―（並木の里三二号、一九八九・5）
- \* 濱中修「日吉社家の伝承と安居院―『耀天記』『大宮縁起抄事』考―」（日本文学三六巻八号、一九八七・8）
- \* 福眞睦城「祇園別当の成立と変遷―比叡山との関係から―」（ヒストリア二五二号、一九九六・6）
- \* 牧野淳司「延慶本『平家物語』と山門の訴訟」（『唱導文学研究』第五集、三弥井書店二〇〇七・3）
- \* 水原一「わが山」考」（『解釈三巻一一号、一九五七・12）

1 住吉明神<sup>2</sup> 託宣<sup>3</sup>云、「天慶<sup>4</sup> 年中<sup>5</sup> 二凶賊<sup>6</sup>ヲ誅スル陣ニハ、我大將軍ニシテ、山王副將軍タリキ。康平年中ノ官軍ニハ、山王大將軍トシテ、我副將軍タリキ」ト。依<sup>7</sup>之代々ノ聖主、一山ノ驗德ヲ憑<sup>8</sup>、世々ノ臣公、七社ノ冥鑒ヲ仰<sup>9</sup>。神ノ神タルハ人ノ、礼ニ依テ也。人ノ人タルハ神ノ加護<sup>10</sup>ニ任<sup>11</sup>タリ。而ヲ今度朝儀遅々ノ間、神輿<sup>12</sup>入洛ニ及。尤恐<sup>13</sup>思召<sup>14</sup>ベキ事也。伝聞<sup>15</sup>、延喜帝ノ御宇ニ、飢饉疫癘起テ、天下ニ餓死スル者多シ。帝民<sup>16</sup>ノ亡ルヲ歎思食<sup>17</sup>テ、我山ニ<sup>18</sup>仰付テ、可<sup>19</sup>祈止<sup>20</sup>之由<sup>21</sup>勅定アリ。三塔会合シテ僉議<sup>22</sup> 区<sup>23</sup>也。『雨ヲ<sup>24</sup>祈雨ヲ降シ、日ヲ<sup>25</sup>祈テ日ヲ<sup>26</sup>耀ス事、非<sup>27</sup>無<sup>28</sup>先例<sup>29</sup>。而ニ普天ノ飢饉四海ノ疫癘、イカゞ有ベキ』ト云大衆アリ。或ハニ云、『辞申セバ<sup>30</sup>勅命ヲ背ニ似タリ。』<sup>31</sup>領掌スレバ先蹤ナシトイヘ共、皇王ヲ守護シ夷狄ヲ<sup>32</sup>降伏シ、天災ヲ除地天ヲ<sup>33</sup>転ズル事、我山<sup>34</sup> 万山ニ<sup>35</sup>勝タリ。況<sup>36</sup>閭浮提人、病之<sup>37</sup>良藥、若人有病、得聞是經、病即<sup>38</sup>消滅<sup>39</sup>、不老不死ト説リ。一乘法花ヲ<sup>40</sup>転説シテ、七社権現ニ<sup>41</sup>祈<sup>42</sup>誓セバ、何<sup>43</sup>ドカ勝利ナカラン<sup>44</sup>ヤ』ト云大衆アリ。或ハニ云、『七難ヲ<sup>45</sup>滅シテ七福ヲ生ジ、不詳ヲ<sup>46</sup>退<sup>47</sup>天災ヲ<sup>48</sup>払ハンガ為ニ、仏護國ノ法ヲ説給ヘリ。然者仁王經ヲ<sup>49</sup>転説講尺、此時ニ<sup>50</sup>当レリ』ト云ケレバ、『此義尤然<sup>51</sup>ベシ』トテ、三千衆徒<sup>52</sup> 一七箇日、山上三塔ノ諸堂ニシテ、一万部ノ<sup>53</sup>仁王般若ヲ<sup>54</sup>転説シテ、供養ヲ山王ノ宝前ニ<sup>55</sup>テ遂ケリ。飢饉ニ責ラレ<sup>56</sup> 疫癘ニ侵レテ、親<sup>57</sup>二後ル子、恩德ノ高キ涙ヲ流シ、子ヲ先立ル親、<sup>58</sup>哀慙ノ深キ袖ヲ絞ル。兄弟夫婦互ニ<sup>59</sup>別亡ケレバ、京中モ田舎モ皆<sup>60</sup>触穢ニテ、社參ノ者ナシ。

【校異】 1 〈近〉「住よしのみやうじん」、〈蓬〉「住吉明神」。 2 〈近〉「たくせんにいはく」、〈蓬〉「託宣にいはく」、〈静〉「託宣云」。 3 〈近〉「てんきやう」、〈蓬〉「天慶」、〈静〉「天慶」。 4 〈近〉「ねんぢうに」。 5 〈近〉「われ」、〈蓬〉「我」、〈静〉「我」。 6 〈近〉「さんわう」、〈蓬〉「山王」。 7 〈蓬〉「仰て」。 8 〈近〉「しんのじんたるは」、〈蓬〉「神の神たるは」。 9 〈蓬・静〉「礼奠に」。 10 〈近〉「しんの」、〈蓬〉「神の」。 11 〈近〉「あひたのあひた」。 12 〈近〉「しうらくに」、〈蓬〉「入洛に」。 13 〈近〉「ゑんぎていの」、〈蓬〉「延喜帝の」、〈静〉「延喜帝の」。 14 〈蓬〉「仰せて」、〈静〉「仰て」。 15 〈近〉「ちかくぢやう」、16 〈蓬・静〉「区々也」。 17 〈近〉「いのり」、〈蓬・静〉「祈て」。 18 〈近〉「てらす」、〈蓬・静〉「耀す」。 19 〈近〉「あるひはいはく」、〈蓬〉「或人いはく」、〈静〉「或かいはいく」。 20 〈蓬・静〉「領狀すれは」。 21 〈蓬〉「降伏なり」、〈静〉「降伏也」。 22 〈近〉「まんだんに」、〈蓬〉「万山に」。 23 〈静〉「勝たり」。 24 〈近〉「りやうやく」、〈蓬・静〉「良藥」。 25 〈近〉「せつめつ」。 26 〈静〉「先どくして」。 27 〈近〉「いのり申さは」、〈蓬・静〉「祈誓せは」。 28 〈近〉「ヤ」なし。 29 〈近〉「あるひは」、〈蓬〉「或」、〈静〉「或」。 30 〈近〉「ほろほして」、〈蓬・静〉「滅して」。 31 〈近〉「不詳を」、〈静〉「不祥を」。 32 〈近〉「ようけを」。 33 〈近〉「三千しゆと」、〈蓬〉「三千の衆徒」、〈静〉「三千衆徒」。 34 〈蓬〉「七ヶ日」、〈静〉「七ヶ日」。 35 〈近〉「にんわうきやうを」とし、「きやう」の右に「はんにやイ」を異本注記。 36 〈蓬・静〉「テ」なし。 37 〈蓬〉「疫病に」、〈静〉「疫病に」。 38 〈蓬・静〉「哀憐の」。 39 〈近〉「しよくゑにや」、〈蓬〉「触穢にて」、〈静〉「触穢にて」。

【注解】 ○住吉明神託宣云、「天慶年中二凶賊ヲ誅スル陣ニハ、我大將軍ニシテ、山王副將軍タリキ。康平年中ノ官軍ニハ、山王大將軍トシテ、我副將軍タリキ」ト。康平年中の乱とは、前九年の役の折の安倍貞任追討を指す。なお、当

該記事は、前節の注解に記したように、〈延〉の巻一「卅一 後二条関白殿滅給事」の「日吉山王縁起」の一部分に一致する。〈延〉「彼御託宣ニ云、『天慶年中ニ誅凶徒ニハ、吾レ大将トシテ山王ハ副將軍ナリキ。康平ノ官軍ニハ、山王大将、吾副將軍リキ。凡ソ吾朝ノ大将トシテ夷賊ヲ征伐スル事、既ニ七ヶ度ナリ。山王ハ鎮ヘニ一乗ノ法味ニ飽満シ給ヘルガ故ニ、勢力吾ニ勝レ給ヘリ』トゾ示シ給ケル」（九一ウ）。傍線部が当該記事、二重傍線部は前節の注解で扱った記事。他に、前節に記したように、『太平記』巻三十四「其後住吉大明神ノ四海ノ凶徒ヲ鎮メ給ヒシ御託宣ニ云ク、『天慶ニ誅凶徒之昔ハ我ヲ為テ大將軍ト、山王ヲ為テ副將軍ト。承平ニ鎮ニ逆党之時ハ山王ヲ為テ大將軍ト、我ヲ為テ副將軍ト。山王ハ鎮ニ一乗法味ヲ恒交ニ三昧念仏之故ニ勢力勝我云云』（元玖本五—九〇頁。「承平ニ、吉川本「康平」、『山門奏状』「住吉大明」天慶年中 誅凶賊之陣 我為大將軍」

〔將軍康平之官軍 山王為大將軍 我為副〕（將軍カ）山王者 鎮飽一乗之法味 勢力勝我へ出江□□」（小西徹龍第12紙表、12紙裏）、『日吉山王記』第十八「御託宣事」「住吉大明神託宣云、天慶年中誅凶賊之陳ニハ、我為大將軍、山王為副將軍。康平官軍ニハ、山王為大將軍、我為副將軍。山王鎮ニ飽一乗之法味。勢力勝我」（『続天台宗全書 神道1』二八〇頁）にも同文記事が見られる。これ以外にも、『日吉山王利生記』「さればにや住吉大明神の御託宣には、純友を誅せられし時は、われは、大將軍、日吉は副將軍、將門をうち給し時は、日吉は、大將軍、我は副將軍也。是則とこしなへに一乗の法樂をすゝむるによりて、威光のまさる故也とぞ示給ける」（続群書 二下—六九四—六九五頁）、『耀天記』「サ

レバ住吉ノ大明神ヲ副將軍トシテ、康平ノ官軍ノ中ニハ、山王ヲ大將軍トタノミテ、我ハ副將軍ニテ有キ。山王ハアケクレ一乗ノ法樂ニアキテ、勢力我ニ勝レ給ヘリト託宣シ給ヘル也」（続群書 二下—六二二頁）がある。以上挙げた中で、〈盛〉に近いのは、〈延〉の他、『山門奏状』『日吉山王記』であろう。なお、これら以外にも、神功皇后の新羅征討の時に、住吉が、大將軍、日吉が副將軍、將門追討の時には日吉が、大將軍、住吉が副將軍であったとする『古事談』第四、『続古事談』第五、『野守鏡』下、さらにもう少し古いところでは顯昭の『袖中抄』、『古今集註』などもある。阪口光太郎は、〈延〉などの日吉・住吉協力説は、顯昭説に始まり、説話集に採られていった話に基づくものと考え。さらに、〈延〉は、卷十一「住吉大明神事付神宮皇后宮事」に、神功皇后の新羅発向の折、諏訪と住吉が協力して助力したとする説を載せるが、共に矛盾することがなく採録しているとする（一〇一—一〇三頁）。○神ノ神タルハ人ノ礼ニ依テ也。人ノ人タルハ神ノ加護ニ任タリ 類似句が、『宴曲集』「神の神たるは人の敬（ふ）に依りてなり。人の人たるは神の恵によるとかや」（旧大系『中世近世歌謡集』六五頁）に見える。○延喜帝ノ御宇ニ、飢饉疫癘起テ、天下ニ餓死スル者多シ… 類似記事は、〈四・延・長〉にも見られるが、〈四・延・長〉は、導入句として、当該記事の前に「王法ハ是仏法ノ加護ヲ以テ国土ヲ持チ給フニ非ヤ」（〈延〉卷一—一〇〇オ）と記す。〈四・延・長〉では、王法仏法相依相即の理を示すものとして当該説話を引くのである。なお、延喜帝の御宇の時とするのは、他に〈四〉。〈延〉は、「昔仁明天皇ノ御宇、弘仁九年」（卷一—一〇〇オ）、〈長〉「昔、嵯峨天皇御時、弘仁九年」（一—一〇五頁）とする。弘仁九年（八一八）は、



嵯峨天皇の御宇で、仁明天皇の在位は、天長十年（八三三）（嘉承三年（八五〇）。弘仁九年に仁王経が読誦された例としては、『日本紀略』四月二十七日条が注目される。「於前殿講仁王経」。縁皇災也（国史大系）。また、『伝述一心戒文』巻上所収の「承先師命大乘寺文」（大正新修大藏經七四）によれば、四月二十六日五更から、最澄は金明經・仁王護国般若經（仁王經）・妙法蓮華經（法華經）をもって祈雨させた（山寺の一衆を率い、手分けして転經させた）。三日目に細雨が降ったが、たいした雨は降らなかった。四日目の夜、光定も夜通し三尊に祈雨を念じた。また、護命僧都も四十の大徳を率いて仁王經を講じた。四日間雨が降らなかったが、五日目の早朝に大甘雨が降った。しかし、『平家物語』諸本がいずれも最澄の名に全く触れない点是不審である（『四評釈』三一九六頁）。また四月二十七日条は、祈雨・飢饉に際してのものであり、疫癘に際してのものではない。一方、〈四・盛〉の延喜帝（醍醐天皇）の時とすれば、『扶桑略記』の延喜十五年四月十二日条「三箇日、於十一社、令誦仁王經」。祈諸国京師疫<sup>二</sup>や、九月二十五日条「定諸社諸寺仁王經誦經事」。三箇日為<sup>レ</sup>祈京中諸国瘡瘡赤痢<sup>一</sup>也」などが見られ、延喜十九年から二十年にかけては、早魃があり、咳病の流行なども見られ、延喜二十三年には「水潦疾疫」を理由に改元が行なわれているが、叡山に祈り止めるよう勅定が下されたとの記事は見られず特定しがたい。いずれも史実を本にして形成された説話とは考えにくいだろう。○我山三仰付テ、可祈止之由勅定アリ 〈盛〉では、初めから叡山に祈り止めるよう勅定が下されたことになるが、〈四・延・長〉では、初め諸寺諸山に命じて祈らせたが驗がないため、帝は歎かれ、叡山の衆徒に祈るように命じたとす

る。諸寺諸山の中に、当初延暦寺は入っていないことになる。

○雨ヲ祈雨ヲ降シ、日ヲ祈テ日ヲ耀ス事、非無先例 祈雨の法、止雨の法の先例はあるとの主張は、〈四・延・長〉同。真言では、『覚禪鈔』に請雨の法の「修法の先跡」として、弘法大師以下の先例が記される（一一三～一七頁）。『阿婆縛抄』は、「請雨」を記した第四十三の冒頭を欠くため（大日本仏教全書七一五三二頁）、詳細は不明だが、天台でも請雨の法が盛んに行われたことは言うまでもない。○而二普天ノ飢饉四海ノ疫癘、イカゞ有ベキ 飢饉・疫癘を鎮めるための修法の先例はない、という〈盛〉の主張であるが、実際には延喜以前から、飢饉や疫癘に際して寺社に修法を依頼した例は多い。『日本紀略』勅頒者。疫癘方熾。死亡稍多。宜令諸大寺及畿内七道諸国奉誦大般若經（大同三年正月十三日条）、「令諸国七日内共誦仁王經。為疫病也」（同三月一日条）、「勅。去歲年穀不稔。疫癘間発。夫般若之力。不可思議。宜令十五大寺。五畿七道諸国。及大宰府。奉誦大般若經一七ヶ日。禁断殺生」（承和五年四月甲午条）など。これに対し、〈四・延・長〉は、「飢饉疫癘、立ち所<sup>二</sup>祈留ル例、未承及<sup>一</sup>」（〈延〉巻一一一〇〇オ）と傍線部を記し、修法がすみやかに効果を発した前例はないとする。○況閻浮提人、病之良薬、若人有病、得聞是經、病即消滅、不老不死ト説リ 〈盛〉の独自異文。〈校注盛〉（1—138頁）が指摘するように、『法華經』藥王菩薩本事品の次の一節による。「宿王華、汝當以<sup>二</sup>神通之力<sup>一</sup>、守護是經。所以者何、此經則為閻浮提人病之良薬。若人有<sup>レ</sup>病、得<sup>レ</sup>聞是經、病即消滅不老不死」（岩波文庫下二〇八頁）。『法華經直談鈔』「此經則為閻浮提人病之良薬等者良薬也。此經受持読誦<sup>スル</sup>人除<sup>ハ</sup>病患<sup>ヲ</sup>壽命可<sup>ニ</sup>長遠<sup>ナル</sup>故<sup>ニ</sup>現世<sup>ニ</sup>祈禱<sup>モ</sup>專<sup>ラ</sup>読誦<sup>ス</sup>也」（臨

川書店一九七九・5、三一三七〇（三七二頁）。なお、法華経を勧める理由として、〈四〉は、「何<sup>かな</sup>る飢饉疫癘<sup>なりとも</sup>何<sup>いか</sup>以て天台の力を可<sup>し</sup>レ<sup>三</sup>打<sup>下</sup>私<sup>は</sup>伊王山王<sup>二</sup>而<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>読<sup>法花経</sup>可<sup>レ</sup>祈<sup>を</sup>」（巻一一五七左（五八右）とし、〈延・長〉「仏ぼうの威げん、をろそかならねば、飢饉、疫癘なりとも、などか我山のいわう山王の御ちからにて、しりぞけ給はざるべきなれば、『法花経』を講じ奉りて、祈ねんあるべし」（〈長〉1一〇六頁。〈延〉は傍線部を欠く。脱落か）とする。○何ドカ勝利ナカラナヤ「勝利」は、ご利益の意。『八幡宮寺巡拝記』「心中ニ立願シテ申サク、金字ノ大般若ヲ書奉テ、八幡ニシテ供養ヲトゲ奉ラン。願ハ大菩薩早其勝利ヲアラハシ給ヘト祈念セラレケリ」（古典文庫『中世神仏説話』五五頁）。○七難ヲ滅シテ七福ヲ生ジ…〈盛〉の独自異文。〈校注盛〉（1一三八頁）が指摘するように、『仁王般若経』受持品第七の一節による。『仁王般若経疏』「一切国王為是難故講説般若波羅蜜、七難即滅七福即生。万姓安樂帝王歡喜」（大正新修大蔵経卷三十三（三五四））。国王が仁王経を読めば、七難は立ち所に滅んで七福が生じ、人々は安樂となり、帝王は歡喜する意。ここでは、七難（日月失度難・星宿失度難・災火難・雨水難・惡風難・亢陽難・惡賊難）の内、「雨水難」と「亢陽難」（日照り）が該当する。なお、仁王経を勧める理由として、〈四〉は、「法花経は一切経惣号<sup>なり</sup>為<sup>に</sup>弘<sup>は</sup>惡魔<sup>を</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>過<sup>仁王経</sup>」（巻一一五八右）とし、〈延・長〉は、「護国利民ノ方法、凶害消除ノ祈祷ニハ、仁王経ニ不可過」（〈延〉巻一一〇〇ウ）とする。『阿婆縛抄』「七難之時、読説此経<sup>トスリ</sup>」（三二二〇二頁）。『転法輪鈔』「院十座仁王講表白」「是以天帝十善之宮保<sup>コトヨル</sup>猶依此經力<sup>ニ</sup>人王万乗之国安<sup>コトク</sup>須<sup>カ</sup>假此法<sup>ヲ</sup>威<sup>ヲ</sup>故百王皆崇<sup>アカ</sup>此教<sup>ヲ</sup>祈<sup>イ</sup>護國護民之道<sup>ヲ</sup>累

代悉<sup>ヲ</sup>婦<sup>シテ</sup>此典<sup>ヒラフ</sup>開<sup>ヒラフ</sup>權智美知之甚奧<sup>ヲ</sup>一人依之保<sup>シモ</sup>万年之玉牒<sup>ヲ</sup>四海依之誇<sup>ハ</sup>七福之安樂<sup>ニ</sup>」（『安居院唱導集』上（二三五頁）。仁王経転読について、〈四評釈〉は『阿婆縛抄』七三「仁王経」に「山門ニハ近來不被<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>之」とあることを指摘するが（九三頁）、〈延全注釈〉はこの記述は十一世紀後半から十二世紀前半の聖昭または契中によるものとし、『阿婆縛抄』の成立した頃（文永二年（一二七五））には再び修法が行われていたとする（巻一一五七五頁）。さらにそれよりも前、「澄憲は戦乱祈攘を旨とする仁王講を盛んに修しており、『転法輪鈔』にはその際の表白文が多く所収され」（小林美和七四頁）というように、『転法輪鈔』には、「十座仁王講 仁平三四 久寿二（二一五頁）とある他、年次未詳の「院十座仁王講表白」（二二五頁）や「同講表白〈治承四年逆乱之間被修之〉」（二三五（二六頁）ともあり、これから少なくとも、仁平三年（一一五三）から治承四年（一一八〇）には、澄憲により仁王講が行われていたことがうかがえる。澄憲の弁舌中に見られる架空と思われる靈驗譚で、仁王経の功德が説かれるのはこのような背景があるか。○不詳ヲ退天藥ヲ弘ハガ為ニ「不詳」は、〈蓬・静〉の「不祥」が良い。「天藥」は災いの意。○山上三塔ノ諸堂ニシテ〈四〉「大講堂文殊楼<sup>ヒ</sup>中堂<sup>ヒ</sup>」（巻一一五八右）、〈延・長〉「根本中堂大講堂文殊楼ニシテ」（〈延〉巻一一〇〇ウ）。〈盛〉には、青蓮院門跡側からの書き換えがあると考えられる松田宣史は、その書き換えの背景には鎌倉時代を通じての梶井門跡と青蓮院門跡との確執があると考ええる。〈盛〉が、当該本文で、〈四・延・長〉が記す文殊楼を欠くのは、梶井門跡の重要な領地である文殊楼をわざと避けたいとめとする（八六（八七頁）。但し、〈盛〉は、卷十八「円満院大輔登山」

に「文殊楼」(2—四九六頁)を記す点注意される。○二万部ノ仁王般若ヲ転読シテ〈四〉は七日間の間に仁王経を講読したとするのみだが、〈延・長〉は「七ヶ日ノ間、十四万七千余座ノ仁王経ヲ奉<sup>ル</sup>講読<sup>シ</sup>」(〈延〉巻一—一〇〇ウ)とする。○供養ヲ山王ノ宝前ニテ遂

ケリ 供養が行われた場所を、〈盛〉は「山王ノ宝前」とするのみだが、〈四〉は、大宮・二宮・十禪師とし、〈延・長〉は、十禪師とする。

〈四〉「供養可<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>伊王の山王御前<sup>ニ</sup>」議定<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>大宮<sup>二</sup>宮十禪師の御前<sup>ニ</sup>」(巻一—五八左)、〈延〉「供養ハ地主十禪師ノ社壇ニテ被<sup>レ</sup>遂ニケリ」(巻一—一〇〇ウ)、〈長〉「供やうは、いかゞあるべきとせんぎす。『御経すでに、ほんちいわうぜん逝の御前にて、講じ奉りつ。供養は、すいじやく山王の御ほう前にてとげらるべきか』と、ある大衆申ければ、まことにしかるべしとて、地主十ぜんじの社だんにて、供養あり」

# 引用研究文献

\*小西徹龍「光長寺藏「山門奏状」について」(古文書研究三九号、一九九四・10)

\*小林美和「延慶本平家物語の編纂意図と形成圏」(国語と国文学一九七六・1。『平家物語生成編』三弥井書店一九八六・5再録。引用は後者による)

\*阪口光太郎「延慶本『平家物語』に見える二神協働譚について」(『延慶本平家物語考証・一』新典社一九九一・5)

\*松田宣史「『源平盛衰記』と青蓮院門跡」『源平盛衰記』の成立圏・統論」(『室町芸文論攷』三弥井書店一九九一・12。『比叡山仏教説話研究—序説—』三弥井書店二〇〇三・11再録。引用は後者による)

折節四月上旬ニテ、導師説法ノ終ニ、<sup>をり</sup>『卯月ハ神ノ月ナレドモ、再<sup>さへ</sup>拜<sup>はい</sup>ト云人モナク、八日ハ葉師ノ日ナレドモ、南無ト<sup>こゝろ</sup>唱<sup>とな</sup>ル声モセズ。緋<sup>あけ</sup>ノ玉垣地ニ<sup>1</sup>倒、青葉ノ榊モ不<sup>さ</sup>差<sup>さ</sup>ケリ』ト<sup>2</sup>シタリケレバ、三千ノ衆徒一同ニ墨染ノ袖ヲゾ絞ケル。神明御納受有ケレバ、<sup>3</sup>即夜ニ帝ノ御夢想ニ、<sup>4</sup>比叡山ヨリ天童一人<sup>5</sup>下テ、<sup>6</sup>左手ニ瑠璃ノ壺ヲ持、<sup>7</sup>右ノ手ニ榊ノ枝ヲ持テ、榊ヲ壺ノ水ニ指入テ、京中辺土ノ病者ニ灑ケレバ、家々ヨリ<sup>8</sup>青鬼赤鬼イクラト云数ヲ知<sup>し</sup>ズ出<sup>いで</sup>テサルト觀覽アリ。<sup>9</sup>打驚御座テ、『朕ガ歎、衆徒ノ祈、<sup>10</sup>仏神ニ<sup>11</sup>感應シテ、<sup>12</sup>無何ノ代ニ成ヌルニコソ』ト御感<sup>13</sup>有テ、説法ノ草案ヲ<sup>14</sup>被<sup>レ</sup>召、御衣ノ袖ヲゾ絞ラセ給ケル。イツシカ民ノ<sup>15</sup>煙モニギハヒ、<sup>16</sup>烟絶セヌ御代ニ<sup>17</sup>改<sup>あらた</sup>タリケレバ、古歌ヲ思食<sup>い</sup>出テ、

(1—一〇六頁)。これらに十禪師が登場するのは、中世に流行した十禪師信仰を反映しているのだろう。澄憲も『言泉集』『地藏利益事(寄十禪師)』に「十禪師ト云者誰人ゾ、無仏世界度衆生ノ地藏菩薩也」(『安居院唱導集 上』八八頁)とする。ただし、三聖(大宮・二宮・聖真子)や十禪師は頻出するが、〈四〉「大宮・二宮・十禪師」〈延・長〉「地主十禪師」といった並べ方は他に例がなく、〈盛〉は「山王ノ宝前」という無難な表現にしたか。○飢饉ニ責<sup>レ</sup>ラレ疫癘ニ侵<sup>レ</sup>テ、親ニ後ル子、恩徳ノ高キ涙ヲ流シ：〈延・長〉に近似本文あり。但し、「兄弟夫婦互ニ別亡ケレバ、京中モ田舎モ皆触穢ニテ」を欠く。〈延〉「比ハ卯月半ノ事ニヤ、飢饉温病ニ被責テ、親死ル者ハ子歎キニ沈ミ、子ニ後レタルハ親穢レケルニ依テ、瑞籬ニ臨ム人モ無シ」(〈延〉巻一—一〇〇ウ)。

「<sup>二五</sup>高キヤニ上<sup>のほり</sup>テミレバ<sup>19</sup>煙タツ<sup>20</sup>民ノカマドハニギハヒニケリ

ト。カ、ル目出キ我山也、係目出キ<sup>21</sup>垂跡也。下洛<sup>22</sup>実ニ<sup>23</sup>不<sup>レ</sup>輒。衆徒ノ憤<sup>い</sup>冥慮<sup>24</sup>ニ<sup>25</sup>通ズル時、神輿<sup>かならず</sup>必<sup>26</sup>入洛アリ。急<sup>い</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>27</sup>裁許哉。

【校異】1〈近〉「たふれ」、蓬「倒」、静「倒」。2〈蓬〉「云たりければ」、静「云たりければ」。3〈近〉「すなはちそのよ」、蓬「即夜に」、

静「即夜<sup>ヤクヤ</sup>ニ」。4〈近〉「ひえの山より」、蓬「比叡山<sup>ヒエイ</sup>より」、静「比叡山<sup>ヒエイ</sup>より」。5〈近〉「くだつて」、蓬「下<sup>クダ</sup>て」。6〈近〉「ひたりの手に」、

蓬「左手<sup>ヒタリノテ</sup>に」。7〈近〉「もちて」、蓬・静「もつて」。8〈近〉「せいきしやくき」、蓬「青鬼赤鬼<sup>アキウワニアカキワニ</sup>」。9〈近〉「うちおとろきおはしまして」、

蓬「うちおとろき御座<sup>マシク</sup>て」、静「うちをとろき御座<sup>マシク</sup>て」。10〈近〉「ぶつじんに」。11〈近〉「かんおうして」、蓬・静「感<sup>カン</sup>心<sup>シン</sup>して」。12〈近〉「ぶ

るの」、蓬・静「無何<sup>ムカ</sup>の」。13〈近〉「あつて」、蓬・静「ありて」。14〈近〉「めされ」、蓬・静「めされて」。15〈近〉「けふりも」、蓬・静

「かまとも」。16〈近〉「けふり」、蓬・静「烟<sup>ケ</sup>」。17〈蓬〉「改<sup>アラメ</sup>たりければ」。18〈底・近・蓬・静〉以下「ニギハヒニケリ」まで一字下げ。19〈近・

静〉「けふり」、蓬「烟」。20〈近・静〉「民ノ」より改行。21〈蓬・静〉「垂<sup>スズ</sup>迹也」。22〈近〉「たやすからし」、蓬・静「輒<sup>カサス</sup>からず」。23〈近〉「つ

うする」、蓬「通<sup>ト</sup>する」。24〈近〉「じうらく」、蓬「入洛<sup>シュラク</sup>」。25〈近〉「さいきよあるへきや」、静「裁許<sup>サイキヨ</sup>あるへき哉」。

【注解】○導師説法ノ終ニ「四」「説法ノ終<sup>ニ</sup>」（巻一—五八左）、〈延・

長〉「導師説法ノ終方ニ」（〈延〉巻一—一〇〇ウ）。大衆ばかりか醍醐

帝をも感動させた一句が、この説法には籠められていた。「説法の終

方」は、説法の三段（表白・正釈・施主段）のうちの「施主段」に関

わり、哀れる様になすべき部分であった。施主段こそ説法における

聞かせどころであつて、説経師の才学をふるうべき所作であつた（阿

部泰郎八〇九頁、大島薫三二頁、牧野淳司二二三頁）。○卯月ハ神

ノ月ナレドモ、再拜ト云人モナク、八日ハ薬師ノ日ナレドモ、南無ト

唱ル声モセズ 四月は日吉神社の祭礼の月ではあるが、再拜する人も

なく、八日は薬師の縁日であるが、南無と唱える声もしないの意。日

吉山王祭は、四月の申の日を中心に行われる。『耀天記』「日吉祭礼事」

「二乗沙門仁忠記云、延暦十年歲次辛未四月中壬申日、応<sup>二</sup>山王靈託<sup>一</sup>、

抛<sup>二</sup>先師敬神<sup>一</sup>、始<sup>二</sup>行日吉祭礼<sup>一</sup>」（『神道大系 日吉』七二頁）。〈延〉「卯

月ハ垂跡ノ縁月ナレドモ、幣帛ヲ捧ル人モ無シ。八日ハ薬師ノ縁日ナ



連繯も跡形もないの意。〈長〉当該句なし。○神明御納受有ケレバ、即夜二帝ノ御夢想ニ、比叡山ヨリ天童二人下テ：延喜年間に叡山で行なわれた仁王般若経の転読と導師の説法が納受されたことを、帝の夢想という形で証す。このような形で効験を表現する説話が『言泉集』に見出されることを牧野淳司は指摘する。「唐土天竺例証」として引かれる一つは、飢餓と疾役に悩んだ王が、家臣の、仏法の力、取り分け金光明最勝王経によるのが良いとの提言に従ったところ、帝の夢に童子が現れ、悪鬼を追いつし疫病が退散したとする。○左手ニ瑠璃ノ壺ヲ持、右ノ手ニ柵ノ枝ヲ持テ、柵ヲ壺ノ水ニ指入テ、京中辺土ノ病者ニ灑ケレバ〈盛〉独自の趣向。〈四〉は、洛中に充ち満ちた青鬼を追いつし夢を帝が見たとするのに対し、〈延・長〉では、帝は、比叡山より天童一人が下りてきて、青鬼と赤鬼達を白払で打ち払ったところ、鬼神達は南へ飛び去ったとの夢を見たとする。なお、山本ひろ子は、「瑠璃壺と柵の枝を携えた二人の天童とは、薬師の眷属の日光・月光童子にはかならない」（一九七頁）とする。○家々ヨリ青鬼赤鬼イクラト云数ヲ知ズ出テサルト觀覽アリ 比叡山から天童二人が下りてきて、柵に瑠璃の壺の水を付けて病者に注いだところ、家々から青鬼や赤鬼が出て去って行く夢を帝が見たとする。山王の宝前における供養が聞き届けられたことを示すのだが、罪の穢れを負った鬼が打たれ放逐される修正会結願の行事等を想起させる。○無何ノ代ニ成ヌルニコソ 校異12に見るように、「無何」は〈近〉「ぶるの」〈蓬・静〉「無何の」。「無何」は、「無可有の郷。樂土」（校注盛）1—139頁。「無何」とはもと「無何有」、つまり何もない、の意であり、「無何有之郷」の略。「無何有之郷」は本来、『莊子』に出てくる何もない

場所のことで、同書の逍遙遊篇・応帝王篇その他に無為・無作為の理想郷として書かれている。「今、子有大樹、患其無用。何不樹之於無何有之郷、広莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下。」（『莊子』逍遙遊篇。新釈漢文大系『老子・莊子（上）』一五〇頁）。「天根……適遭無名人而問焉。曰、『請問爲天下』無名人曰、『去。女鄙人也。何問之不豫也。予方將与造物者爲人。厭則又乘夫莽眇之鳥、以出六極之外、而遊無何有之郷、以処瓊瑤之野。汝又何帛以治天下感予之心爲』。又復問。無名人曰、『汝、遊心於淡、合氣於漠、順物自然、而無容私焉、而天下治矣』」（『莊子』応帝王篇。新釈漢文大系『老子・莊子（上）』二八一頁）「無何」も、例えば、白居易の「讀莊子」に、「去国辞家謫異方、中心自怪少憂傷。爲尋莊子知歸處、認得無何是本郷」（新釈漢文大系・白氏文集三・二八頁）、同じく白居易の「渭村退居、寄礼部崔侍郎・翰林錢舍人詩一百韻」に「不動爲吾志、無何是我郷。」（同三一頁）、蘇軾の「次韻王定国南遷回見寄」に「広陵・陽羨何足較、只有無何真我里」（統国訳漢文大成『蘇東坡全詩集』第三卷七〇四頁）とある。『奥義抄』「ころをしふかうのさとおきたらばはこやのやまを見まぐちかけむ ふかうは莊子文云無何有之郷也。はこやは貌姑射山也。或物云、共に仙人の住所也」（日本歌学大系1—197頁）。○高キヤニ上テミレバ煙タツ民ノカマドハニギハヒニケリ『新古今和歌集』巻七、賀歌一七〇七「みつきもの許されて国富めるを御覧じて仁徳天皇御歌 たかき屋にのぼりて見れば煙たつ民の竈はにぎはひにけり」（新大系一〇九頁）。『和漢朗詠集』では読人しらずとされる。原歌は、『日本紀竟宴和歌』の藤原時平の歌「たかどのにのぼりてみ



ればあめのしたよもにけぶりていまぞとみぬる」とされる（久保田淳七〇七頁）。藤原俊成の『古来風鉢抄』などでは、この歌を仁徳天皇の御製とするように、平安時代の末期頃には、この歌は、仁徳天皇の御製とみなされていた（赤瀬信吾八二頁）。〈延〉は「御門古き歌ヲ常ニ詠ゼサセ給ケルトカヤ」（巻一—一〇一ウ）としてこの歌をあげるが、〈四・長〉は「みかど、かくぞ詠じさせ給ひける」（〈長〉一〇七頁）として歌をあげ、古歌であることも示さない。いずれにせよ、国土の平穩を祈る帝王を象徴する歌として用いられている。〈盛〉が仁明天皇から醍醐天皇に改めたのは、史実に基づくというよりも、延喜帝の御代を仁徳帝の治世に聖代として重ね、それを生み出したのが、山門

## 【引用研究文献】

- \* 赤瀬信吾「神祇信仰と新古今時代」（平成十六年度 皇學館大学神道研究所公開学術シンポジウム。他のパネリスト、阿部泰郎・平田英夫、コイディネーター、深津睦夫。皇學館大学神道研究所紀要二二号、二〇〇六・三）
- \* 阿部泰郎「唱導における説経と説経師—澄憲『釈門秘論』をめぐる—」（伝承文学研究四五号、一九九六・四）
- \* 大島薫「安居院澄憲の〈説法〉—承安四年宮中最勝講における勸賞をめぐる—」（仏教文学二四号、二〇〇〇・三）
- \* 久保田淳『新古今和歌集全評釈』第四卷（講談社一九七七・二）
- \* 小峯和明「早大図書館蔵教林文庫翻刻（六）—山王関係資料三種—」（調査研究報告一二号、一九九一・三）
- \* 牧野淳司「延慶本『平家物語』「山王効験事」の構造—仏事法会の詞との関わりから—」（名古屋大学国語国文学七九号、二〇〇六・12）
- \* 山本ひろ子「信仰／儀礼／物語」（『日本文学史を読む Ⅲ 中世』有精堂一九九二・三）

## 山王垂跡

<sup>1</sup> 凡山王権現ト申ハ、磯城島<sup>2</sup> 金判宮即位元年、大和国<sup>3</sup> 城上郡大三輪神ト天降給シガ、大津宮即位元年ニ、俗形老翁ノ体ニテ、<sup>4</sup> 大比叡大明神ト顕給ヘリ。<sup>5</sup> 大乘院ノ座主<sup>6</sup> 慶命、<sup>7</sup> 山王ノ本地ヲ被祈申ケルニ、<sup>8</sup> 御託宣ニ云、『此ニシテ<sup>9</sup> 無量歳仏果ヲ期シ、<sup>10</sup> 是ニシテ<sup>11</sup> 無量歳群生ヲ利ス』ト仰ケレバ、座主、<sup>12</sup> 提婆品ノ『我見<sup>13</sup> 釈迦如来、於無量劫、難行苦行、<sup>14</sup> 積功累徳、<sup>15</sup> 求菩薩道、未曾止息、観三千大

の修法に對する「仏神ニ感応」であることを強調し、山門の權威を印象づけようとしたのかもしれない。○下洛実ニ不輟。衆徒ノ憤冥慮ニ通ズル時、神輿必入洛アリ。急可有裁許哉。〈盛〉の独自本文。澄憲の弁舌は、〈四・延・長〉では、日吉靈験を説き、靈威ある神輿を白昼に動座させる事への疑義であつた（前掲「我神ハ又和光垂跡之根元、効験掲焉之明神也」項参照）。これに對し〈盛〉の弁舌では、冒頭の白昼動座に對する疑義を欠き、またこの一節を加えることで、日吉の靈験譚を根拠として、大衆の要求を急ぎ裁許すべきとの主張へと展開されている。

千世界、乃至無有、<sup>16</sup>如芥子許、非是菩薩、捨身命處」ト云文ニ思合テ、大宮権現ハ、ヤ<sup>17</sup>釈尊ノ示現也ケリ。サレバ、『我滅度後於末法中、  
現大明神広度衆生』トモ仰ラレ、『汝勿<sup>19</sup>涕泣於閻浮提、<sup>20</sup>或復還生現大明神』トモ慰給ケルハ、<sup>21</sup>日本叡岳ノ麓ニ、<sup>22</sup>日吉ノ大明神ト<sup>23</sup>垂  
跡シ給ケキ事ヲ説給ケルニコソト、感涙ヲ流サレケル。地主権現ト申ハ、<sup>24</sup>約留尊仏ノ時、天竺ノ南海ニ、『一切衆生、悉有仏性』ト唱ル波  
立テ、<sup>25</sup>東北方ヘ引ケルニ、彼波ニ乘テ留ラン所ニ落付ント思食ケルニ、遙ニ百千里ノ<sup>26</sup>波路ヲ凌テ、<sup>27</sup>小比叡ノ<sup>28</sup>杉下ニ留ラセ<sup>29</sup>給ケリ。  
其後<sup>30</sup>天照大神<sup>31</sup>天ノ岩戸ヲ開、天ノ<sup>32</sup>御鋒ヲ以テ海中ヲ捜セ給シニ、<sup>33</sup>鋒ニ当人アリ。『誰人ゾ』ト尋給ケレバ、『我是<sup>34</sup>日本国ノ地主也』ト  
ゾ答給ケル。昔天地開闢ノ初<sup>35</sup>ノ国常立尊ノ天降給ヘル也。此神<sup>36</sup>日吉ニ顯給ケルニハ、<sup>37</sup>三津川ノ水五色ノ<sup>38</sup>浪ヲ流シケリ。サレバ我朝ハ、  
大比叡<sup>39</sup>小比叡トテ大宮<sup>40</sup>二宮ノ御国也。<sup>41</sup>迹ヲ叡山ノ麓ニ垂テ、威ヲ一朝ノ間ニ<sup>42</sup>振、<sup>43</sup>田宗守護之靈神、<sup>44</sup>王城鎮護之靈社也。<sup>45</sup>依レ之代々ノ帰  
敬<sup>46</sup>是<sup>47</sup>深、世々ノ崇信不<sup>48</sup>淺。四海之甲乙<sup>49</sup>掌ヲ合、諸国之男女歩ヲ運ベリ。  
係目出キ神輿ヲ<sup>50</sup>塵灰ニ蹴立テ、<sup>51</sup>白昼ニ<sup>52</sup>難人共ニ<sup>53</sup>交<sup>54</sup>ヘ奉リ入奉ラン事、其恐<sup>55</sup>侍ベシ」ト奏申タリケレバ、<sup>56</sup>上一人ヨリ<sup>57</sup>奉始、<sup>58</sup>当參ノ  
卿相雲客、<sup>59</sup>隨喜ノ涙ヲ流シテ、<sup>60</sup>偲仰ノ袖ヲ絞ケリ。仍<sup>61</sup>及<sup>62</sup>晚陰<sup>63</sup>祇園社ヘ奉レ入。神輿ニ立所ノ矢ヲバ、<sup>64</sup>神人ヲ以テ拔セラレケリ。  
【校異】1 〈底・近・蓬・静〉以下「諸国之男女歩ヲ運ベリ」まで一字下げ。なお、〈近〉合点あり。行の冒頭に「山王垂跡事」と傍書。2 〈蓬  
金刺宮〉、〈静〉「金判宮」。3 〈近〉「しきのかみのこほり」、〈蓬〉「城上郡」、〈静〉「城上郡」。4 〈近〉「大ひえの大みやうじんと」、〈蓬〉「大  
比叡大明神と」、〈静〉「大比叡大明神と」。5 〈近〉「大ぜうあんのさず」、〈蓬〉「大乗院座主」。6 〈近〉「けいめい」、〈蓬・静〉割注に記す。なお、  
「慶命」。7 〈蓬〉「山王本地を」。8 〈静〉「御託宣に」。9 〈近〉「むりやうざい」。10 〈近・静〉「こゝにして」、〈蓬〉「爰にして」。11 〈近〉「むり  
やうざい」。12 〈蓬〉「提婆宮」。13 〈近〉「しやがによらい」、〈蓬・静〉「尺迦如来」。14 〈近〉「しやつくるいとく」、〈蓬・静〉「積功累徳」。15 〈蓬  
未曾止息」。16 〈近〉「によかいしこ」、〈蓬・静〉「如芥子許」。17 〈蓬・静〉「尺尊の」。18 〈蓬〉「我」なし。19 〈近〉「ていさう」、〈蓬・静〉「啼泣」。  
20 〈近〉「わくぶ」、〈蓬・静〉「或復」。21 〈近〉「につほん」、〈蓬〉「日本」。22 〈近〉「ひよしの」、〈蓬〉「日吉の」。23 〈蓬〉「垂迹し給へき」、〈静  
垂迹し給へき」。24 〈近〉「くるそんぶつの」、〈蓬〉「約留尊仏の」、〈静〉「約留尊仏の」。25 〈近〉「とうほくのかたへ」、〈蓬〉「東北方へ」。26 〈近  
「さうはを」。27 〈近〉「をびえの」とし、「を」の右に「こイ」を異本注記。〈蓬〉「小比叡の」、〈静〉「小比叡の」。28 〈近〉「すきのもとに」、〈蓬・静  
「杉の下に」。29 〈近〉「そのち」。30 〈近〉「てんせうだいしん」、〈蓬〉「天照大神の」、〈静〉「天照大神の」。31 〈蓬・静〉「天ノ」なし。32 〈近〉「み  
ほこを」、〈蓬〉「御鋒を」、〈静〉「御鋒を」。33 〈近〉「ほこに」、〈蓬・静〉「鋒に」。34 〈近〉「につほんこの」、〈蓬〉「日本国」。35 〈蓬・静〉「ノ」  
なし。36 〈蓬〉「日吉と」、〈静〉「ニ」なく、「日吉」。37 〈蓬〉「三津河の」。38 〈蓬〉「波を」、〈静〉「波を」。39 〈近〉「こひえとて」、〈蓬〉「小比  
叡とて」。40 〈蓬〉「跡を」。41 〈近〉「ふるひ」、〈蓬・静〉「ふる」。42 〈近〉「わうじやうしゆこのれいしやなり」、〈蓬〉「王城鎮護靈社也」。43 〈近  
「これよて」。44 〈近〉「ふかし」、〈蓬・静〉「ふかく」。45 〈近〉「ちんくわいに」とし、右に「ちんはいイ」(あるいは「ちんはいか」)を傍記。

《蓬・静》「ニ」なく、《蓬》「塵灰」<sup>チシクグライ</sup>、《静》「塵灰」<sup>チシクグライ</sup>。46《近》「ざんにんともに」。47《近》「ましへり」、《蓬・静》「ましへ奉りて」。48《近》「さふらふへしと」、《蓬・静》「侍るへしと」。49《静》「上」<sup>ミ</sup>。50《近》「ばしめたてまつり」、《蓬》「始奉りて」、《静》「始奉て」。51《近》「けいしやう」、《蓬》「卿相」<sup>ケイシヤウ</sup>、《静》「卿上」<sup>ケイシャウ</sup>。52《近》「かつがうの」、《蓬》「謁仰の」<sup>カクヤウ</sup>、《静》「謁仰の」<sup>カクヤウ</sup>。53《近》「ゆふかけにをよひて」、《蓬・静》「晚隠にをよんて」<sup>ベンカクレ</sup>。54《近》「しんにんを」、《蓬》「神人」<sup>シニン</sup>に」。

【注解】○凡山王権現ト申ハ：以下山王の靈験を語る《盛》の独自記事が続くが、《盛》の異本の底本を初めとする《近・蓬・静》はいずれも一字下げ記事の中に記す。以下の記事は、澄憲の発言ではなく、注釈的に挿入された記事として読める。橋本正俊の検証があり、それを参照して記す。先ず、「感涙ヲ流サレケル」までが、「山王」「山王権現」とあり、また「大比叡大明神」とあるように、大宮をめぐる説。『山家要略記』「大比叡明神奉<sup>レ</sup>名大宮事」〔統天台宗全書 神道1〕三〇頁。「大比叡大明神ト顕給へり」までが、大宮の縁起説である。○磯城島金判官即位元年、大和国城上郡大三輪神ト天降給シガ、大津宮即位元年ニ、俗形老翁ノ体ニテ、大比叡大明神ト顕給へり「磯城島金判官」は、「磯城島金刺宮」が良い。欽明天皇の宮城。欽明天皇の即位元年は、五四〇年。その年に、山王権現は、大和国城上郡に大三輪の神として天下ったとする。『日吉山王新記』「延喜式云大和国城上郡大神大物主神社者、謂三輪也」（続群書二下―七五〇頁）。大津宮は、天智天皇の宮城。天智天皇の即位元年は、六六八年。その年に、俗形老翁の体で、大比叡大明神として顕現したとする。なお、当該記事は、平安末の天台座主顕真に仮託されているが、実は義源がその編纂に深く関わり、十四世紀に入って整えられた書とされる『山家要略記』巻「冒頭」に「神祇宣令」からの引用として載る記事に近似する。特に傍線部がほぼ一致する。「黄門侍郎大江匡房、宣奉勅、

康和元年正月十一日、進官神祇宣令文曰。大比叡明神《俗形》人皇第三十代磯城島金刺宮、欽明天皇即位元年《庚申》、大和国城上郡大三輪神天降、第三十九代天智天皇大津宮即位元年、大比叡神顕坐。日吉与三輪大物主神此国地主也。法号言法宿菩薩。但非僧形唯俗体也《已上》」〔統天台宗全書 神道1 山王神道I〕二五頁。また、「扶桑明月集云」として引く『延暦寺護国縁起』にも近似する。「大比叡明神 亦大宮 俗形 人皇第三十代磯城嶋金刺宮、欽明天皇即位元年《庚申》、大和国城上郡三輪明神天降。第三十九代大津宮天智天皇即位元年、大比叡大明神顕御」〔続群書二七下―四三〇頁〕。『神祇宣令』も『扶桑明月集』も、大江匡房に仮託して、延暦寺僧が偽作したものと考えられる（佐藤真人）。さらに、同様の説を、『耀天記』も「四十大宮」に「日本紀神祇部」から引く。「人皇第卅代磯城島金刺宮欽明天皇即位元年《庚申》、大和国城上郡大三輪神天降<sup>シテ</sup>、第卅九代天智天皇大津宮即位元年、大比叡大明神顕給<sup>シテ</sup>日吉」。三輪大物主神、此国地主也《已上日本紀神祇部》。法号言法宿大菩薩。然而非僧形。唯俗人也」〔神道大系 日吉〕六八頁統。『耀天記』は、正応年間の写本が確認されているように、十三世紀には成立していたと考えられる。《盛》もこれらの縁起説に拠ったのであろうが、「俗形老翁ノ体ニテ、大比叡大明神ト顕給へり」と明記するのは、俗形・僧形説の対立があったことによると考えられる。縁起そのものよりも俗形であるこ

とを主張する方が重要であったのである（橋本正俊七五、八四頁）。また『山家要略記』『耀天記』にある「此国地主」を省略するのは、後掲する二宮が「地主権現」として引かれることと齟齬するためであるとする（八四頁）。○大乘院ノ座主慶命、山王ノ本地ヲ被祈申ケル

ニ…当該記事から、「感涙ヲゾ流サレケル」までが、大宮の本地説に関わる内容。大宮の本地は釈迦であることが知られるが、そのことを天台座主慶命（九六五～一〇三八）が祈請したところ、神の託宣により知ったというもの。『天台座主記』第廿七権僧正慶命（開大能無動寺）。治山十年、大宰少貳藤原孝友息」（統群書四下―五八四頁）。慶命は、中世になって山王神道と密接な関係が築かれることになる人物。このことは、慶命が山王権現より一心三觀の口決を与えられる説話（『山家要略記』『溪風拾葉集』『金剛秘密山王伝授大事』など）や、七社の一つである客人の本地が白山であることを知る説話（『耀天記』『古事談』『日吉山王利生記』など）からもうかがえる。なお、当該話は、『耀天記』に含まれる「山王事」に引かれる記事に類似している。「夫ニ日吉大宮権現ヲ、尺迦如来ノ垂迹ト申侍ル事ハ、昔大乘院座主（慶命）云、「本地ヲ示給ヘ」ト祈精シ給ケル時ニ、権現託宣シテ言ク、「コ、ニシテ無量歳群生ヲリス」トアリケルヲ、法花經提婆品ニ、釈迦如来ノ利他ノ行願ノイミジキ事ヲ、智積菩薩ノホメ給ヘルニ、「我見尺迦如来、於無量劫、難行苦行、積功累徳、求菩薩道、未曾止息、觀三千大千世界、乃至無有如芥子許、非菩薩捨身命處」トホムル所ニ思合ルニ、誠ニ尺迦如来ノ慈悲ノ様ナル仏菩薩ハヲハシマサズ。無量無辺劫ノ間、仏果ヲモトメテ、億々万劫ノ行末マデモ、衆生ノ利益セント思食ハ、難有事也。夫彼御託宣ノ御詞ニ、法花ノ文ヲ思ヒ合セテ、大

宮権現ハ本地ハ釈迦如来ニテ御ス也ケリト知タテマツリ給テ、披露セラレテ後ハ、本地ノ高キ事ヲ仰テ、垂迹ノ弥ヨ止事無ヲ知タテマツルナリ。サテ尺迦如来、「我滅度後、於末法中、現大明神、広度衆生」ト仰ラレケルハ、山王トイフ神ニ現ゼントスルナリトイフ金言ナリ。

「汝勿啼泣、於焰浮提、或復還生、現大明神」トナグサメ給ケルハ、日本国ノ中ニハ、比叡山ト云山ノフモトニ、遂ニアトヲタレテ、衆生ヲ利益センズルナリト仰ラレタル実語ナリ」（『神道大系 日吉』八〇～八一頁）。傍線部のように近い本文を有するが、表現に違いもあり、《盛》が「山王事」を参照したとまでは言えないだろう。また『耀天記』では、「四十 大宮」でもこの説話を取り上げている。「御本地云、大乘院座主慶命、本地祈精之時、託宣云、「此無量歳期仏果、此無量歳刹那生」《文》。座主思念法花提婆品、説「尺尊行願」文云、「我見釈迦如来、於無量劫、難行苦行、積功累徳、求菩薩道、未曾止息、觀三千大千世界、乃至無有如芥子許、非菩薩捨身命處」云々、即知今御託宣、本地尺迦云々」（『神道大系 日吉』七三頁）。託宣の内容は、傍線部に見るように、こちらの方が《盛》に近い。但し、《盛》や「山王事」には見られた、後半の「我滅度後於末法中、現大明神広度衆生」以下の託宣は引かれていない。○御託宣ニ云、「此ニシテ無量歳仏果ヲ期シ、是ニシテ無量歳群生ヲリス」ト仰ケレバ『耀天記』『山王事』「コ、ニシテ無量歳群生ヲリス」、「大宮」「此無量歳期仏果、此無量歳刹那生」。「山王」は、託宣の前半を欠く。「大宮」の「刹那生」は、《盛》や「山王」の「利群生」の誤りと考えられる。群生は「仏語。すべての生きもの。多くの衆生」（『日国大』）。『楊鳴曉筆』「廿歳ニシテ証果、諸国ニ行化シ、群生ヲ導ク」



（中世の文学一二四頁）。〈新定盛〉は、「無量歳仏果」無限の仏の功德」「無量歳群生を利す」無限の永き時にわたって衆生を利益する」と解する。しかしこの二句が対句仕立であることを勘案するならば、「この地において無限の永きにわたって仏の功德を約束し、この地において無限の永きにわたって衆生を救済する」と解すべきか。○提婆品ノ『我見釈迦如来、於無量劫、難行苦行、積功累徳、求菩薩道、未曾止息、観三千大千世界、乃至無有、如芥子許、非是菩薩、捨身命処』ト云文『法花経』提婆達多品の一節。「われ、釈迦如来を見たてまつるに、無量劫において、難行し、苦行し、功を積み、徳を累ねて、菩薩の道を求むること、未だ曾て止息したまわず。三千大千世界を観るに、乃至、芥子の如き許りも、これ菩薩の、身を捨てし処に非ざること有ることなし」（岩波文庫『法花経』中一二〇頁）。『新羅明神記』「饑饉掘出、諸人之恐怖不少、大阿闍梨見之、金色文曰、観三千大千世界乃至無有如芥子許、非是菩薩捨身命処矣、是則釈迦如来往昔之御戸也」（黒田智八七頁）。釈迦如来を想起させる一節であることが分かる。○大宮権現ハ、ヤ釈尊ノ示現也ケリ 慶命が大宮の本地仏を知りたいと祈請したところ、神の託宣があり、その内容を『法華経』提婆品の文句と照合した結果、大宮は釈迦如来の顕現であったことが分かったとする（山本ひろ子①一六三頁）。○我滅度後於末法中、現大明神広度衆生 先に引いた『耀天記』の「山王事」に同一の偈が見られた。また、高山寺蔵『麗気記』（一二七八〜一三三〇年の間成立）八巻には、「釈迦如来、我滅度後於惡世中現大明神広度衆生（文）」とある。このように、衆生済度のために釈迦如来が惡世に大明神となつて示現するものには、他に『金玉要集』に「釈尊ノ御約束ニモ、

於我滅度後、々五百歳中、示現大明神、広度諸衆生ト説給へり」（『磯馴帖 村雨篇』二一六頁）、『楊嶋曉筆』（一五二一〜一五三二年頃の成立か）に「悲華経ニ我滅度ノ後、於惡世中現大明神ト広度衆生ト云々」（中世の文学五六一頁）とある。『麗気記』では、釈迦如来が語つたものとしていたのが、ここでは、悲華経を典拠としている。悲華経を典拠とするものには、他に『八幡愚童訓』乙本（一三〇二〜一三〇四年成立）がある。「是につきて悲華経をみるに、「我涅槃後、於生死中、現大明神、広度衆生」とあれば、靈託は往昔の事をつけ、经文は未来の事をしるしまし／＼せば、旁うたがひ有べからず」（日本思想大系『寺社縁起』二二五頁）。しかし、この偈は悲華経にはなく、仏典に存しないことは「大明神」という語の使用からも推察できる。本偈は鎌倉時代初頭以後の典籍類、つまり日蓮『垂迹法門』（一二五六年成立）、『溪嵐拾葉集』（一二三一〜一三四八年成立）等を初めとする神道・金利・釈迦等に関することを論じた典籍に集中して見られる（野村卓美二五二頁）。次項の注解参照。○汝勿涕泣於閻浮提、或復還生現大明神 前項の偈と同様に、山王信仰の書でも、仏菩薩と神とを同体であることを論証する文脈で用いられている点は同様で、例えば、『一心妙戒鈔』（十三世紀中頃、惠尋撰か）に、「山王為戒体証拠事」として、「悲華経又云、我滅度後 於末法中 現大明神 広度衆生 涅槃後分云、汝勿啼泣 於閻浮提 或復還生 現大明神」などとし、『山王絵詞』巻一第一段にも、「中にも大宮権現の御本懷ハ、余社に勝給へり。然ニ所見を勸ニ、本地釈尊誓を発して、悲花経ニ説ての給ハク、「我滅度後、於末法中。現大明神。広度衆生」と。或ハ又「汝勿涕泣。於閻浮提。或復還生。現大明神」と説れたり。此文を解するに、如来



出世の素意より起て、入涅槃の後ハ日域ニ神とあらはれて、閻浮の群類を救はんと覺しくわたとて給けるニこそ」(『統天台宗全書 神道1』四二三頁)と見えるように、しばしば引用されている(橋本正俊八〇頁)。○日本叡岳ノ麓ニ、日吉ノ大明神ト垂跡シ給ベキ事ヲ説給ケルニコソト、感涙ヲ流サレケル 大宮の本地が釈迦であることを知った慶命は、さらに「我滅度後…」「汝勿啼泣…」の託宣を思い起こし、これも日吉大明神として垂迹したことを示していたのだと思に至る。一方『耀天記』では、「四十、大宮事」でも「山王事」でも、説話の中身は前半の託宣と提婆吉品の引用のみであり、「山王事」はさらに説話に対して補注的に「我滅度後…」「汝勿啼泣…」を引く形となっている。それに対して「盛」は、すでに知られていた「我滅度後…」「汝勿啼泣…」の託宣も説話中に取り込んでいたのであり、より説話化が進んでいると言える(橋本正俊八〇頁)。○地主権現ト申ハ、豹留尊仏ノ時… 以下、「三津川ノ水五色ノ浪ヲ流シケリ」まで、二宮の縁起説である。主神Ⅱ大宮が大和国から勧請された三輪明神であるのに対し、二宮は、大宮の来臨以前に、この地に棲息していた地主明神であるとする(山本ひろ子②一二頁)。「豹留尊仏」は、「拘(狗・鳩)留(楼)尊仏」と表記されることが多い。仏語。過去七仏の第四(日国大)。二宮が、拘留尊仏の時から、この地に止住していた意。二宮の縁起説にはいくつかバリエーションがあるが、ここでは大昔に仏が天竺より小比叡の地を訪ねてきたという説を引いている。これも『耀天記』「山王事」に類似する本文が見出せる。「又二宮ヲバ古老ノ人ノ伝ニハ、鳩棲孫仏ノ時ヨリ、小比叡ノ梶ノ本サブカゼノ嶽ニ跡ヲ垂テ御シケルトゾ申伝タル。夫ハ天竺ノ南海群ト云所ノ海ノ面ニ、「切衆

生、悉有仏性ト唱ヘケル波ノ立ケルニ乗テ、トビマラン所ニハ定テ仏法弘マランズラン、ソコニヲチツカント思食テ、ユラサレアリカセ給ケル程ニ、小比叡ノ梶ノホラニトビマラセ給ニケリ。其後ニ天照大神ノアマノイハトヲヒラキテ、鉾ヲモテサグラセ給ケルニ、アシノ葉ノサハリテ有ケルヲ、是ハ何ニゾト尋サセ給ケルニ、上件ノ事ヲバ申サセ給ケル。次ニ「我ハ日本国ノ地主ニテ侍也」ト申サセ給タリケルトカヤ。其小比叡ノ梶ノ本ニテ、劫ヲ経テ後ニ大宮権現ノ当時御ス所ニイタリテ御シケルガ、大宮ノ天下テ御シケル日、夫ヲバサリテ今御ス御宝殿ノ地ニ遷ラセ給ヒケル也」(『神道大系 日吉』八六〇八七頁)。傍線部に見るように類似する点も多いが、異なる点も多く、「山王事」を直接の出典とするのは無理があるだろう。○天竺ノ南海ニ、「一切衆生、悉有仏性」ト唱ル波立テ 地主権現Ⅱ二宮は、拘留尊仏の時に、天竺の南海で、「一切衆生、悉有仏性」と唱える波に乗り、波の留まった所に居を占めようとしたとする。このように、神が「一切衆生…」(涅槃経に見える句)の波に乗って渡来するモチーフは、むしろ大宮縁起の唐崎渡御説話に多く見られる。『山家要略記』二一に引く「大比叡明神垂迹縁起文」もその一つである。「此処有大乗教法流布之靈地乎」。宇志丸答曰、「湖上常五色浪起。其声唱一切衆生、悉有仏性。如来常住。無有變易云々」(『統天台宗全書 神道1』二五頁)。また、『日吉山王利生記』の唐崎渡御説話も同様である。「山王天津の八柳にあまくだり御ける時、田中の恒世扁舟に棹して、湖水の汀に侍ける。金色の浪一すじたちて、一切衆生悉有仏性、如来常住無有變易と聞ければたゞ事にあらず、此浪の源を見んとて、明神もろともに北をさしてこがせ給けるに、唐崎の琴御館宇志丸が許にこぎつ

かせ給」（『神道大系 神社編 日吉』六四九頁）。〈延〉の巻一に見る唐崎渡御説話も同様である。これらからすれば、二宮縁起は、大宮縁起からこのモチーフを借りたのではないか（橋本正俊八二—八三頁）。

○小比叡ノ杉下ニ留ラセ給ケリ 波の留まった地が、天竺の南海から、百千万里の波路を越えた、東北の方に位置する、「小比叡ノ杉下」であった。先に引いた『耀天記』の「山王事」には、「小比叡ノ梶ノ本サブカゼノ嶽ニ跡ヲ垂テ御シケルトゾ申伝タル。…小比叡ノ梶ノホラニトマラセ給ニケリ」と、より詳細に記される。『溪嵐拾葉集』の編著者光宗が正和元年（一一三二）に神蔵寺で著した『運心巡礼私記』に、「西塔 小比叡〈有レ小比叡 有レ隠水 名波母山 二宮 夷

地主権現御歌云 寒風嶽〈白山権現 常ニ立寄給〉堀切岳地也」とある。山本ひろ子②が指摘するように、小比叡の山中こそ、二宮影向の聖跡であり、その付近には、白山権現が常に立ち寄るために冷たい風の吹きつける「寒風嶽」もあった。「寒風嶽」の場所をめぐっては異説が多いが、『耀天記』の場合は、小比叡＝寒風嶽の所伝によるものと考えられる（一四頁）。同じく山本ひろ子②によれば、『諸国一見聖物語』により、小比叡の杉とは、西塔から横川へ至る行道の途上、修禪峯の一角（北）にあったことが分かる（一五頁）。○其後天照大神天ノ岩戸ヲ開、天ノ御鋒ヲ以テ海中ヲ捜セ給シニ、鋒ニ当人アリ

天照大神が天岩戸を開き、鋒で海中を探ると、鋒に当たる人がいたので、誰かと尋ねると、私は日本国の地主と答えたとする。天照大神が海中を鋒で探るのは、中世に広まった国土創世説話と関わるものであるが、『耀天記』の「山王事」では、「アシノ葉ノサハリテ有ケルヲ」とするのを、〈盛〉では「鋒ニ当人アリ」とするところなどは、「山王

事」の方が神話的な印象が強く、「山王事」を直接の典故とするのは無理があろう。○昔天地開闢ノ初ノ国常立尊ノ天降給ヘル也 二宮の神体は国常立尊。『山家要略記』「小比叡大明神垂迹事」「小比叡明神〈僧形〉天地開闢ノ之昔、天神第一皇子国常立尊、高峯五色ナサク華開オホスキニ大根ニ天地開闢初ニ天降マス」(『続天台宗全書 神道1』三二頁)、『嚴神鈔』「匡房卿ノ作りタル扶桑名月集ト云フ記録ニハ、此二宮権現ヲバ、天神第一国常立尊ト云ヘリ」(『続群書二下』六三九頁)。○此神日吉ニ顕給ケルニハ、三津川ノ水五色ノ浪ヲ流シケリ 『耀天記』に「サテ唐崎ヨリシテ五色ノ波ヲ尋テ登リ給事ハ、三川ノホトリナリ。今大宮御ス処ニ粉楡ヲヒキヨセテ結テヲカレタリ」(『神道大系 日吉』八六頁)、『山王権現略縁起』に「かくて御神は比叡より三津川のがれ五色の波にそひて遡給ふ程に、日枝の山の麓に一切衆生悉有仏性如来常住无有变易といふ涅槃經の文、水のひゞきに聞へければ、あやしき立より見たまへば、かの五色の波はここよりぞ立出ける」(小峯和明二二三頁)とある。○サレバ我朝ハ、大比叡小比叡トテ大宮二宮ノ御国也 「諸国之男女歩ヲ運ベリ」までが、以上の説を踏まえての総説となっている。ここでは、中世に山王信仰の中心となった大宮・二宮・聖真子の山王三聖や山王七社ではなく、大宮・二宮のみを称揚する内容となっている。○係目出キ神輿ヲ塵灰ニ蹴立テ、白昼ニ雜人共ニ交ヘ奉リ入奉ラン事、其恐侍ベシ 〈四・延・長〉もほぼ同じ。ただし冒頭〈四〉「斯ル咄キ垂迹ヲ」(巻一一五九左)、「延・長」〈カ、ル目出タク止ム事無キ御神ヲ〉(〈延〉巻一一〇一ウ)。「係目出キ神輿」とは、矢を射掛けられた十禅師をはじめとした、今回動座した日吉の神輿(八王子・客人) 他を言うのだが、〈盛〉の場合は、一字下げ記

事の中に見る「大宮・宮」を指すようにも読め違和感がある。ここは、  
 〈盛〉は欠くが、〈四・延・長〉等に見るように、澄憲が弁舌の冒頭で、  
 神輿を白昼に迎え入れることの非を言う「白昼ニ塵灰ノ中ニ蹴立進セ  
 テ、当社へ奉入事、生々世々可口惜<sup>ん</sup>」（〈延〉巻一——一〇〇オ）の記  
 事を受けていると考えられよう。〈盛〉の一字下げ記事（別記文）の内、  
 〈盛〉本文と同時に成立したと考えられる記事が見られることにより  
 （八一—三頁の注解「帝王御出家ノ事…」参照）、一概に当該一字下げ  
 記事（別記文）が後補されたためとは言えないが、違和感のある構成  
 と言えよう。但し、〈盛〉は〈延〉の当該記事を欠くため、大きくは  
 目立たない構成になっている。あるいは、〈四・延・長〉と異なり、〈盛〉

# 【引用研究文献】

- \* 黒田智「新羅明神記」（東京大学史料編纂所研究紀要二一〇号、二〇〇一・三）
- \* 小峯和明「早大図書館蔵教林文庫本翻刻（四）——山王関係資料二種——」（調査研究報告一〇号、一九八九・三）
- \* 佐藤真人「伝大江匡房撰『扶桑明月集』について」（神道宗教二一八号、一九八五・三）
- \* 野村卓美「『悲華経』と『釈迦如来五百大願』をめぐって」（国語と国文学一九九三・八、『中世仏教説話論考』和泉書院二〇〇五・二再録。引用は後者による）
- \* 橋本正俊「『源平盛衰記』の山王垂迹説話」（松尾章江編『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院二〇一五・五）
- \* 山本ひろ子①「信仰／儀礼／物語 \* 中世叡山の薬師信仰をめぐって」（『日本文学史を読む Ⅲ 中世』有精堂一九九二・三）
- \* 山本ひろ子②「日吉社・宮縁起と「小比叡ノ杉」『耀天記』所収縁起をめぐって」（月刊百科三四号、一九八九・一〇）

山門ノ大衆訴詔ヲ致ス時、聖断遅々ノ間、神輿ヲ下シ奉事度々ニ及ベリ。

<sup>1</sup> 鳥羽院御宇嘉承三年三月三十日、<sup>2</sup> 尊勝寺灌頂ノ事ニ依<sup>て</sup>、二社へ八王子、<sup>3</sup> 客人、神輿、<sup>4</sup> 下松マデ下給ヘリ。可有<sup>レ</sup>裁許<sup>ニ</sup>之由、<sup>5</sup> 即時<sup>6</sup> 被<sup>レ</sup>  
 仰下<sup>一</sup>ケレバ、其夜<sup>7</sup> 御帰坐。四月一日彼<sup>8</sup> 寺ノ灌頂<sup>9</sup> 被付<sup>レ</sup>天台兩門之旨、被<sup>レ</sup>仰下<sup>一</sup>畢。

<sup>10</sup> 崇徳院御宇保安四年七月十八日、<sup>11</sup> 忠盛朝臣、<sup>12</sup> 神<sup>13</sup> 五九人殺害事ニ依テ、三聖并<sup>14</sup> 三宮奉<sup>レ</sup>下<sup>一</sup>神輿。官軍<sup>15</sup> 川原ニ馳向<sup>16</sup> 禦間、神人等神

では前半の靈験譚の意味づけが「急可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>裁許哉」の根拠へと変っ  
 ているために、白昼の動座への疑義の根拠としてこの一節が新たに必  
 要とされたか。○奏申タリケレバ、上一人ヨリ奉始、当参ノ卿相雲  
 客、随喜ノ涙ヲ流シテ 奏し申したのは、別記文の前に記される澄憲。  
 その澄憲の言葉を聞いて、天皇を初めとして、その場にいた卿相雲客  
 が、喜びの涙を流したとするのは、〈盛〉の独自本文。○偈仰ノ袖  
 「偈仰」の表記、〈逢・静〉は「偈仰」。但し、〈近〉が「かつがう」  
 とし、〈逢・静〉も「カツカウ」「カツガウ」とルビを付すように、正  
 しくは、「偈仰」が良い。

輿ヲ<sup>17</sup>奉<sup>レ</sup>捨分散ス。大衆數百人感神院ニ<sup>18</sup>引籠テ、官軍ト合戦ニ及<sup>およぶ</sup>。

<sup>19</sup>同御宇保延四年四月廿九日、<sup>20</sup>賀茂社領住人、日吉ノ馬<sup>21</sup>上<sup>22</sup>對捍ノ事ニ依テ、八王子・<sup>23</sup>客人・<sup>24</sup>十禪師三社ノ神輿ヲ仙洞へ<sup>25</sup>鳥羽院<sup>26</sup>奉<sup>レ</sup>振。

即時ニ裁許有ケレバ、大衆歸山ノ次ニ、<sup>27</sup>鴨禰宜住宅ヲ破却シケリ。

<sup>28</sup>近衛院御宇久安三年六月廿八日、<sup>29</sup>清盛朝臣郎從依<sup>30</sup>神人殺害事、三社ノ御輿ヲ陣頭ニ奉<sup>レ</sup>振。同日ニ<sup>31</sup>忠盛<sup>32</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>33</sup>配流<sup>34</sup>之由被<sup>35</sup>仰<sup>36</sup>下<sup>37</sup>一畢<sup>38</sup>。

<sup>39</sup>二条院御宇永暦元年十一月十二日、<sup>40</sup>菅貞衡朝<sup>41</sup>臣息男資成、依<sup>42</sup>有智山僧坊焼失事、三社ノ御輿ヲ仙洞へ<sup>43</sup>後白川院<sup>44</sup>奉<sup>レ</sup>振。  
<sup>45</sup>當日貞衡解官、資成流罪、<sup>46</sup>安樂寺ノ住僧六人禁獄之由、右大弁<sup>47</sup>雅頼ヲ以テ大衆ノ中へ被<sup>48</sup>仰下<sup>49</sup>。大衆不日ノ勅裁ヲ悦<sup>50</sup>シテ、<sup>51</sup>俱舎頌ヲ誦シテ<sup>52</sup>歸山畢。ヤサシカリケル事也。

<sup>53</sup>高倉院御宇嘉應元年十二月廿二日、<sup>54</sup>尾張国目代政友、依<sup>55</sup>平野ノ神人<sup>56</sup>陵礫ノ事、三社ノ神輿ヲ奉<sup>レ</sup>振<sup>57</sup>大内<sup>58</sup>。裁報遅々ノ間、御輿ヲ南殿ニ向ケ奉<sup>レ</sup>振居<sup>59</sup>。同廿四日成親卿解官配流<sup>60</sup>備中国、政友禁獄之由被<sup>61</sup>宣下<sup>62</sup>一畢<sup>63</sup>。

<sup>64</sup>神輿下洛ノ御事、代々及<sup>65</sup>六箇度、毎度ニ武士ヲ召<sup>66</sup>テ被<sup>67</sup>禦ケレ共、御輿ニ矢ヲ<sup>68</sup>進ル事ハナカリキ。今度ノ御輿ニ矢ノ立事、乱国ノ基歟。浅間シト云モ疎也。人恨<sup>69</sup>神怒レバ災害必成トイヘリ。天下ノ大事ニ及<sup>70</sup>ナント、心アル者ハ<sup>71</sup>上下皆歎<sup>72</sup>恐ケリ。

【校異】 1 〈近〉「とはのるんのぎよう」〈蓬〉「鳥羽院御宇」〈静〉「鳥羽院御宇」。 2 〈近〉「そんなうじくはんちやうの」〈蓬〉「尊勝寺灌頂の」〈静〉「尊勝寺灌頂の」。 3 〈近〉「きやくじん」。 4 〈近〉「さかりまつまで」〈蓬〉「垂松まで」〈静〉「垂松まで」。 5 〈近〉「そくし」〈蓬・静〉「即時に」。 6 〈近〉「おほせぐたされければ」。 7 〈蓬・静〉「御帰座」。 8 〈蓬〉「寺の」。 9 〈近〉「てんだいにつけられりやうものむね」〈蓬〉「天台兩門に付せらるゝの旨」〈静〉「天台兩門に付せらるゝの旨」。 10 〈近〉「しゅとくあんの」〈蓬〉「崇徳院」〈静〉「崇徳院」。 11 〈近〉「た、もりあそん」〈蓬〉「忠盛朝臣」〈静〉「忠盛朝臣」。 12 〈近〉「じんにな」〈蓬〉「神人」。 13 〈近〉「三の宮のしんよをくたしたてまつる」〈蓬〉「三宮神輿を下し奉る」〈静〉「三宮神輿を下し奉る」。 14 〈蓬〉「河原に」〈静〉「河原に」。 15 〈近〉「はせむかひ」〈蓬〉「はせむかひて」〈静〉「馳むかひて」。 16 〈近〉「じんになら」〈蓬〉「神人等」。 17 〈近〉「すてたてまつり」〈蓬〉「捨奉て」〈静〉「すて奉て」。 18 〈近〉「ひきこもつて」〈蓬・静〉「引籠て」。 19 〈近〉「おなしぎ」〈蓬・静〉「同」。なお、〈蓬・静〉は改行なし。但し一字分の空白あり。 20 〈近〉「かものしやりやう」〈蓬〉「賀茂社領」〈静〉「賀茂社領」。 21 〈近〉「たいたんの」。 22 〈静〉「八王寺」。 23 〈近〉「きやくじん」〈蓬〉「客人」〈静〉「客人」。 24 〈近〉「十せんじ」。 25 〈近〉「かものねぎちうたくを」〈蓬〉「鴨禰宜住宅を」〈静〉「鴨禰宜住宅を」。 26 〈近〉「こんゑのあんの」〈蓬〉「清盛朝臣」〈静〉「清盛朝臣」。 27 〈近〉「きよもりあそん」〈蓬〉「清盛朝臣」〈静〉「清盛朝臣」。 28 〈近〉「近衛院」。なお、〈蓬・静〉改行なし。但し、〈蓬〉に二字分の空白あり。 29 〈近〉「おなしき日に」〈蓬〉「同日に」。 30 〈静〉「忠盛」。 31 〈近〉「はいるせらるへきのよし」〈蓬・静〉「神人」〈蓬〉「神人」〈静〉「神人」。 29 〈近〉「おなしき日に」〈蓬〉「同日に」。 30 〈静〉「忠盛」。 31 〈近〉「はいるせらるへきのよし」〈蓬・静〉

「配流せらるへきよし」。32〈蓬〉「二条院」。「静」。「二条院」。33〈近〉「すがのさだひらあそんの」。「蓬」。「菅貞衡朝臣」。「静」。「菅貞衡朝臣」。  
 34〈近〉「うちやまのそうはう」とし、「う」の右に「あらイ」を異本注記。〈蓬〉「有智山僧坊」。「静」。「有智山僧坊」。35〈蓬〉「興を」。36〈近〉「ご  
 しらかはのゐん」。「蓬」。「後白川院」。「静」。「後白河院」。37〈近〉「その日」。「蓬」。「当日に」。「静」。「当日に」。38〈静〉「安樂寺住僧」。39〈近〉「が  
 らいを」。「蓬・静」。「雅頼を」。40〈近〉「くしやのじゆを」。「蓬」。「俱舎頌を」。「静」。「俱舎頌を」。41〈近〉「きさんしをはんぬ」。「蓬」。「帰山畢」。  
 42〈近〉「たかくらのゐんの」。「蓬」。「高倉院」。「静」。「高倉院」。43〈近〉「おはりのくにもくだい」。「蓬・静」。「尾張国目代」。44〈近〉「ひ  
 らのゝじん」。「蓬・静」。「平野神人」。45〈近〉「れうりやくの」。「蓬・静」。「陵礫の」。46〈近〉「大内に」。「蓬」。「大内に」。「静」。「大内に」。47〈近〉「な  
 んてんに」。「蓬」。「南殿に」。48〈蓬〉「むけたてまつりてふりすへたてまつる」。「静」。「向奉て振居奉る」。49〈近〉「おなしき」。50〈近〉「るさい」。  
 51〈近〉「しよ」とし、右に「んよ」(あるいは「んに」か)を傍記。52〈近〉「及」なし。なお、「代々六箇度」。「蓬」。「代々六箇度にをよへり」。「静」  
 「代々六箇度にをよへり」。53〈近・蓬〉「まいらする」。「静」。「進する」。54〈蓬〉「云」なし。なお、「あさましとも」。55〈近〉「をろかなり」。「蓬」  
 「をろそかなり」。「静」。「疎也」。56〈蓬〉「神」。57〈蓬〉「上下」。

【注解】○山門ノ大衆訴詔ヲ致ス時、聖断遅々ノ間、神興ヲ下シ奉事度々  
 ニ及ベリ 以下、嘉承三年(一一〇八)の事件からはじめて嘉應元年  
 (一一六九)の事件まで、神興が下洛した六例を列挙する。ただし、  
 後述するように、古記録からはこれらの神興下洛は必ずしも「聖断  
 遅々」が原因であったとは思われない。神興を下すことは大衆の横暴  
 ではなく、政の判断に責任があるとの認識に立つものだろう。なお、  
 神興下洛の事例を具体的に挙げるのは〈盛〉のみ。これは〈盛〉に特  
 徴的な列挙表現の一つ(山中美佳)。また、事件の起点を嘉承三年と  
 するのは〈盛〉のみで、他諸本は永久元年(一一一三)の事件を起点  
 としている(これについては「神興下洛ノ御事、代々及六箇度」項参  
 照)。なお、〈延・盛・中〉は、神興下洛の例とするのみだが、〈四・闕  
 〉は、「大衆山王ノ御興ヲ奉振内裏ニ」(〈闕〉卷一上―三六オ)とし、〈長・  
 南・屋・覚〉は、「山門の大衆、日吉の神興を、陣頭へ振奉る事」(〈覚  
 上―五九頁〉)の例とする。○鳥羽院御宇嘉承三年三月三十日、尊勝

寺灌頂ノ事ニ依、二社へ八王子、客人ノ神興、下松マデ下給へり 嘉  
 承三年(一一〇八)三月の強訴は、この年園城寺が担当するはずであっ  
 た尊勝寺の灌頂阿闍梨が、白河院により東寺に与えられたために、同  
 じ天台宗の延暦寺が同心して訴訟に及んだものであった。『中右記』殿  
 下仰云、山<sup>天衆</sup>乱発、已下<sup>同カ</sup>有<sup>同カ</sup>聞、是尊勝寺灌頂阿闍梨今年  
 可賜園城寺之旨存処、已賜東寺了、依為同天台宗訴申之者、  
 此事如何」嘉承三年三月二十一日条。以下『中右記』によって事件  
 の経緯を確認しておく。二十三日には山門の大衆が西坂本より下山、  
 三井寺の衆徒も如意山を越えて迫るが、朝廷は檢非違使や武士に入京  
 阻止を命じる。〔是山・三井寺大衆可<sup>レ</sup>参闕之由有風聞、分遣武  
 士於河原辺、偏可<sup>レ</sup>相禦、由、夜前被<sup>レ</sup>仰下了、雖<sup>レ</sup>然禁中無人、早可<sup>レ</sup>  
 参入者、仍三人午時許北轅帰洛参内、先参<sup>レ</sup>撰政殿下御直廬、源大  
 納言被<sup>レ</sup>参、山大衆已從<sup>レ</sup>西坂本了了、又三井寺衆徒從<sup>レ</sup>如意山上超来、  
 両寺衆徒同意訴申之旨、誠入<sup>レ</sup>水火、又々指遣檢非違使・武勇輩、



不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>京中<sub>一</sub>之由被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>」同三月二十三日条）。四月一日条には夜前から日吉神輿が西坂本まで動座し、数千人に及ぶ神人・大衆が群集したのに対し、朝廷も数万の兵を法成寺東河原から松前<sup>まつがさき</sup>（松ヶ崎）に展開して防衛にあたらせた旨が記される（「夜前從<sub>二</sub>台嶺<sub>一</sub>所<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>」之大衆等、昇<sub>二</sub>日吉神輿<sub>一</sub>、昇<sub>二</sub>向西坂下<sub>一</sub>、神人・衆徒数千人群集、爰又為<sub>二</sub>相禦<sub>一</sub>、公家所指遣<sub>二</sub>之檢非違使并源氏・平氏、天下弓兵之士、武勇之輩数万人、從<sub>二</sub>法成寺東河原及松前<sub>一</sub>、引<sub>二</sub>陣結<sub>一</sub>、党相守不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>同四月一日条）。この事件について衣川仁は次のように指摘する。「王威」を脅かすこの強訴に対する藤原宗忠の感想は、「園城寺訴申、一之道理也、上皇之御案、又以道理也、於<sub>レ</sub>今先<sub>□□</sub>宗延曆寺園城寺、同心訴申、頗可<sub>レ</sub>然歟、然而、兩寺衆徒被<sub>二</sub>甲冑、帶<sub>二</sub>弓、箭、企<sub>二</sub>参内<sub>一</sub>、已違<sub>二</sub>僧之行<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>相禦<sub>一</sub>、条、又以可<sub>レ</sub>然歟」というものであった。ここで宗忠は、昇進ルートをもたない東寺への措置とする上皇案を道理としつつ、次第の原則を主張する園城寺の提訴と延暦寺の同調にも理を認め、彼らへの非難は武装しての参内に絞っている。十一世紀初頭に問題となっていた「大衆参上」そのものの不当性は後退し、訴訟の「道理」を含めて議論されるようになる」（二二頁）。なお、〈盛〉は「二社（八王子、客人）」とするが、『中右記』にはいずれの神輿が動座したかは記されず、『天台座主記』では次項に見るように「日吉八王子・客人・十禪師宮・神輿」としている。また、『一代要記』にも、「同（三月）卅日、天台大衆昇<sub>二</sub>八王子・客人・十禪師等神輿<sub>一</sub>群下。武士防<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>宮城<sub>一</sub>。然而蒙<sub>二</sub>裁許<sub>一</sub>、歸<sub>二</sub>山<sub>一</sub>（座主仁源）」（続神道大系二一〇七頁）とある。下坂守①が平安・鎌倉時代の神輿振りについて分析し、「神輿振りではまず八王子・客人・十禪師の三基の神輿が

根本中堂まで動座し、残りの大宮・聖真子・二宮・三宮の神輿は、その後少し時間をおいて動座するのが通例となっていた」（二〇頁）と指摘するように、動座するのは八王子・客人・十禪師の三基、あるいは七基が普通であったようである。ここでも『天台座主記』や『一代要記』の記すように三基であったのではないか。但し、実際の目撃者にはいずれの神輿であるかは判別しなかったであろうし、〈盛〉の既述は何らかの記録に基づいているのだろう。なお下松については、本全釈七—二三頁の注解「下松」参照。○可有裁許之由、即時被仰下ケレバ、其夜御帰坐 三月三十日の神輿下洛によって、大衆等の要求が即座に裁決されたことを強調するのであろう。この時は武士側の厳しい防備もあり、また前項に引いた『一代要記』にも見るように裁許が叶ったこともあり、大衆等は参内することはなかった。『中右記』によれば、下洛の翌日である四月一日夜半に、翌年以降は「弘法・慈覚・智証大師等門跡」で交替とする旨が決定され、檢非違使中原資清を以て大衆に告げたところ、衆徒等は帰山した（於西坂下<sub>二</sub>差<sub>レ</sub>使申上云、今年灌頂已被<sub>レ</sub>行了、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>。但於後々年<sub>二</sub>者、猶弘法・慈覚・智証大師等門跡、相次可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行者、是本之訟訴源也。於院人々被<sub>レ</sub>相定、可<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>請之由、以<sub>レ</sub>檢非違使資清<sub>（中略）</sub>被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>。爰徒衆大歡喜、含<sub>レ</sub>咲帰山了」同四月一日条）。しかし、三月二十一日に大衆・衆徒が訴えてから、裁許が下され解決に至る四月一日まで、十日余の日数がかかった事に対して、藤原宗忠は「件事可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>裁許者、前日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>歟。此十余日未<sub>レ</sub>定之間、数千軍兵相禦之間、東山・河原・賀茂・吉田之辺、下人之由田畠為<sub>二</sub>兵士等<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>滅亡了後、遂隨<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>有<sub>二</sub>裁許<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>彼法会<sub>一</sub>為<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>頗無<sub>二</sub>益歟<sub>一</sub>」（四月二日条）と、裁許の遅れに

よる混乱を批判する。但し、〈盛〉には三月三十日の下洛からしか記されていないため、強訴があって即裁許されたかのように読み取れる。これは『天台座主記』も同様で、三月三十日に大衆が八王子・客人・十禅師の神輿を西坂本まで下して訴えたところ、翌四月一日に裁許を得て帰山したと記される（三月三十日、山・大衆昇<sup>ニ</sup>日吉八王子・客人・十禅師宮ノ神輿<sup>ヲ</sup>群<sup>ニ</sup>下<sup>ス</sup>西坂本<sup>ニ</sup>、武士防<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>奉<sup>ラ</sup>入<sup>レ</sup>鳳城<sup>ニ</sup>、是<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>訴<sup>ヲ</sup>申<sup>ス</sup>尊勝寺灌頂東寺延暦園城次第<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>請<sup>之</sup>由<sup>ヲ</sup>也、四月一日蒙<sup>ニ</sup>裁許<sup>ヲ</sup>帰山<sup>ニ</sup>）〔法印仁源〕『校訂増補天台座主記』第一書房一九七三・四、七五頁）。○四月一日彼寺ノ灌頂被付天台兩門之旨、被仰下畢 前項に引いた『中右記』によると、灌頂阿闍梨は「弘法・慈覚・智証」の三門流、つまり真言（東寺）・山門・寺門が交替で勤めるよう決定されており、「天台兩門」というわけではない。この決定に対して「衆徒大歓喜、含咲帰山了」（四月二日条）というのであるから、山門・寺門も納得したということになる。藤原宗忠は、事件の原因が、院が「弘法・慈覚・智証」という灌頂阿闍梨の順番を破ったことにあるとしながらも、その一方で強訴に押されて決定を下したことも朝威を損ずるものとして批判している。『中右記』「今年被<sup>レ</sup>破<sup>ニ</sup>件次第<sup>ニ</sup>、頗<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>穩便<sup>ニ</sup>。又被<sup>レ</sup>破者、縦衆徒雖<sup>レ</sup>訴申<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>裁許<sup>ニ</sup>歟、破次第<sup>ニ</sup>又有<sup>ニ</sup>裁許<sup>ニ</sup>。彼是共為<sup>ニ</sup>朝威<sup>ニ</sup>甚以不便也。凡末代法、衆徒所為、人力不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及也。弥及末世者、定滅<sup>ニ</sup>亡朝家<sup>ニ</sup>歟、可<sup>レ</sup>恐<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>慎也」（四月二日条）。○崇徳院御宇保安四年七月十八日、忠盛朝臣、神人殺害事<sup>ニ</sup>依テ、三聖并三宮奉下神輿 保安四年七月十八日に起きた事件とは、比叡山の衆徒が神輿を担いで京中に乱入しようとしたのを、武士たちが河原で阻止したために、神輿を破棄した衆徒が祇園

社に籠り、追捕に派遣された平忠盛、源為義と合戦に及んだというものであった（『百練抄』「天台衆徒為<sup>レ</sup>先神輿、欲<sup>ニ</sup>乱<sup>ニ</sup>入京中<sup>ニ</sup>。公家遣<sup>ニ</sup>武士<sup>ニ</sup>。相<sup>ニ</sup>禦于垣川辺<sup>ニ</sup>之間、棄<sup>ニ</sup>神輿<sup>ニ</sup>退散。又山僧等籠<sup>ニ</sup>祇園内<sup>ニ</sup>。仍遣<sup>ニ</sup>越前守忠盛、左衛門尉為義<sup>ニ</sup>追却之間、互合戦。神殿内多<sup>ニ</sup>損<sup>ニ</sup>命者<sup>ニ</sup>。後日造<sup>ニ</sup>改神殿<sup>ニ</sup>奉<sup>レ</sup>移御躰<sup>ニ</sup>、『一代要記』七月十八日、衆徒昇<sup>ニ</sup>日吉七社神輿<sup>ニ</sup>入洛。官兵奉<sup>レ</sup>防之間、奉<sup>レ</sup>寄河原畢。忠盛朝臣於<sup>ニ</sup>越前国<sup>ニ</sup>擲<sup>ニ</sup>取神人<sup>ニ</sup>之故也。又大衆籠<sup>ニ</sup>祇園<sup>ニ</sup>之間、遣<sup>ニ</sup>忠盛・為義等<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>追罰。无<sup>ニ</sup>裁許<sup>ニ</sup>。河原神輿奉<sup>レ</sup>送赤山<sup>ニ</sup>」（統神道大系二一〇九頁）。『一代要記』によれば、事の発端は、忠盛が越前国で、神人を絡め取ったことにあり、その後山門の大衆等は日吉七社の神輿（『延暦寺護国縁起』によれば、「先三社、後四社。已上七社入洛。其後七社入洛之儀未<sup>レ</sup>聞其例<sup>ニ</sup>云々」（統群書一七下—四三八頁）とある）を振り強訴に及んだが、武士の反撃に遭い、大衆は神輿を河原に置いたまま、祇園に籠もったことになる。「忠盛朝臣、神人殺害事<sup>ニ</sup>依テ」という事件の概要は、高橋昌明①によれば次のようになる。保安四（一二三）年五月のころ、忠盛が国守を勤める越前国の敦賀郡で殺害事件が発生。忠盛と「所部の人等」（郡司・在地住人ら）は犯人を搦め取り検非違使に引き渡した。殺害人は日吉社の神人であったらしく、これを不満とする天台の悪僧らは、京都に移送中の犯人を途中で奪取する筈に出た。これに対し朝廷が延暦寺に牒状を送り、張本の悪僧を禁固させたため、怒った大衆らは大挙して蜂起、七月四日天台座主権僧正覚慶の房舎無動寺大乗房を切り破り、座主を追放、日吉山王の神輿を山上にかつぎあげた。「爰<sup>ニ</sup>今年五月之比、越前国敦賀郡<sup>ニ</sup>不慮之外<sup>ニ</sup>、闖殺之輩所出来<sup>ニ</sup>、所部人等擲捕犯人<sup>ニ</sup>、検非違使庁<sup>ニ</sup>へ請渡之後、

途中経廻之程、為惡僧等被奪取、公家此旨聞食、張本の人牒寺家、令召籠之処、台岳の徒衆結党、成郡、寺家の長吏の房舍を研破、日吉の社壇の神輿を奉迎、吐莠言致擾乱上、猶又為訴非理、欲入洛京、由、世以騒動、人以驚走」、『平安遺文』一九九三号「白河法皇御告文案」。同月十五日になると延暦寺大衆は、八王子・客人・十禅師の日吉三社の神輿を先頭に西坂本に下向。派遣の武士らに阻まれた大衆は、十八日新たに四社の神輿を加えて下向、大衆と武士らの間に合戦が起こった（動座した神輿については次項参照）。「七月四日山上、大衆入り無動寺伐弘大乗房追却山門」。是依越前守忠盛朝臣之訴被妨寺家所司応好於檢非違使庁之故也。同十五日、大衆振日吉八王子、客人、十禅師神輿下向西坂下、武士防御不奉入洛中之間、同十八日重奉大宮、二宮、聖真子三宮神輿大衆与官軍合戦」（『天台座主記』「權僧正寛慶」八〇頁）。この結果僧徒の側に多数の死傷者が出、大衆は七基の神輿を賀茂河原に棄てて遁走した。一方、一類の大衆三百人ばかりが東山を経て祇園にこもり、神輿をかついで訴えんとしたので、忠盛と左衛門尉源為義が制止のため派遣され、こちらでも合戦が起こり、神殿内で多くの命が失われている（一七〇—一七二頁）。この時は、白河法皇も珍しく毅然たる態度をとり、結局衆徒の要求をのまなかった。当時の状況では、事件の発端になった越前国における神人追捕の責任を問われるなど、理不尽なことも起こりかねなかったもので、院のこの姿勢は注目される（一七二頁）。〇三聖并三宮奉下神輿『天台座主記』によれば、七月十五日にまず八王子・客人・十禅師の神輿が西坂本に下され、武士たちによって入洛が阻止されたため、十八日に改めて大宮・二宮・

（三）

聖真子と三宮の神輿が動座して合戦に及んでいる。三聖は大宮・二宮・聖真子を指すが、〈盛〉のいう「三聖并三宮」は十八日に後発で動座した四社を示していることになる。しかし「三聖」の語は円珍の頃から存在していたものの、これが日吉社の大宮・二宮・聖真子に対応するものとして意識されるようになったのがいつ頃なのかは、明確にしない（水上文義）。三聖信仰が高まる十三世紀に成立した山王神道書『耀天記』にはこのことが確認されるが、保安四年当時どの程度であったかは定かでない。『耀天記』「口伝云、両所二宮、大宮也。聖真子、本大宮、築垣内ニ御也……然、無動寺建立大師相応和尚御時、大五間大宮、神殿作間、又聖真子東遷奉故、二宮、大宮、聖真子、各別事外広大成給間、其後両所三聖呼也」（神道大系日吉一九八三・2、六四頁）。〈盛〉は十八日に大宮・二宮・聖真子・三宮の神輿が下されたとの記事をもとに、「三聖并三宮」としたのだろう。〇官軍川原二馳向御間、神人等神輿ヲ奉捨分散ス。大衆数百人感神院二引籠テ、官軍ト合戦ニ及、京中に入ろうとする神輿・大衆は、武士たちに河原で阻止されたために、ここに神輿を棄却して、祇園社に立てこもり合戦に及んだ。感神院は祇園社のこと。『天台座主記』には、「僧徒多ヲ以傷死、遂奉棄神輿於河原遁去了。又、一類大衆三百人許、経東山分籠祇園、昇神輿欲参公門。仍遣忠盛・為義等制止之之間、衆徒退散、或中矢殞命」（八〇頁）とある。前項で引いた『百練抄』でも、追捕のために派遣されたのは平忠盛・源為義であった。〈盛〉が挙げている他の実例の説明においては、いずれもが神輿下洛の結果、大衆の要求がすみやかに裁許がされた旨を記しているのに対し（それが事実

に反しているものもあるが）、保安四年の例のみは、裁許結果を記していない。これは、前々項に引いた『一代要記』が記すように、この時裁許はなかったためであろう。また、大衆等はこの時も内裏にまで進入することはなかったと考えられる。文脈からすると〈盛〉に引かれる六例は、神輿動座の結果すみやかに裁許がなされた前例であるべきにもかかわらず、保安の例はこれに該当していない。○同御宇保延四年四月廿九日、賀茂社領住人、日吉ノ馬上対捍ノ事ニ依テ、八王子・客人・十禅師三社ノ神輿ヲ仙洞へ（鳥羽院）奉振。即時ニ裁許有ケレバ、大衆帰山ノ次ニ、鴨禰宜住宅ヲ破却シケリ『天台座主記』によれば、事件の発端は、保延四年（一一三八）に、賀茂社領であった近江国「賀茂生庄」（不明）の下司が、五月五日に行なわれる日吉の祭の馬役を拒絶したことであった。この強訴に際しては、八王子・客人・十禅師に加えて、祇園社、北野社、京極寺の神輿が動座している。この時大衆等は陣頭にまで進み、裁許されている。「衆徒昇<sup>ニ</sup>日吉八王子、客人、十禅師、祇園、北野、京極寺等ノ神輿、参陣ノ頭<sup>ニ</sup>。是<sup>レ</sup>依<sup>ル</sup>訴<sup>ト</sup>申<sup>ス</sup>近江国賀茂生庄<sup>ニ</sup>下司可<sup>ニ</sup>勤<sup>ニ</sup>仕<sup>ス</sup>日吉馬役<sup>ノ</sup>之由<sup>也</sup>也。蒙<sup>ニ</sup>裁許<sup>ヲ</sup>帰山<sup>」</sup>（『天台座主記』「大僧正法印忠尋」保延三年四月二十九日条、八五頁）。『百練抄』「天台大衆為<sup>レ</sup>先<sup>ニ</sup>神輿<sup>ニ</sup>参陣。訴申賀茂社領下司日吉社五月五日馬上事。蒙裁許<sup>ヲ</sup>帰山<sup>」</sup>（保延四年四月二十九日条）。『一代要記』「四月廿九日、台領衆徒捧三社へ八王子・客・十禅師、并祇園・北野・京極寺等神輿<sup>ニ</sup>参陣頭<sup>ニ</sup>、加賀庄下司可<sup>ニ</sup>勤<sup>ニ</sup>馬上<sup>ニ</sup>之由訴申<sup>之</sup>、蒙裁許<sup>ヲ</sup>、衆徒奉<sup>レ</sup>還<sup>ニ</sup>神輿<sup>ニ</sup>畢、座主東陽房忠尋<sup>」</sup>（一一二四頁）。「馬上」は、日吉社の本祭りと匹敵する祭事である五月五日の小五月会の祭頭のこと。「対捍」は「特に、中世、年貢公事・

課役・臨時恒例の雑役など、幕府・領主などに対して義務を負っている者が、強い意志をもって積極的にその義務の履行を拒否すること」（日国大）。下坂守<sup>②</sup>によれば、室町期には、富裕の都市民を馬上頭役に差定させて、祭礼料を負担させる、という方式をとり、それに関わる莫大な費用を近隣に賦課した負担が馬上役であった。一二世紀前半、承久三年に日吉社小五月会の右方馬上役を対捍したものに対し「対捍者、任社解召禁其身、可令没收所領等」と財産没収することが院宣によって命じられている（『華頂要略』百廿二、『天台座主記』「第七十二代権僧正承円」。さらに貞和四年（一一三八）の山門衆徒の「申詞」に「小五月会<sup>馬</sup>上役者、於京都へ左方、江州へ右方」以非当社神人之輩、撰<sup>③</sup>用仰神慮、一度差定之後、曾無改動之例、其趣保延<sup>□</sup>年被下官府以来、神威弥耀、天下規則未違末代者<sup>也</sup>」（『玉燭宝典』紙背文書七—4（今江廣道編前田本『玉燭宝典』紙背文書とその研究（統群書類従完成会）五八頁）とあり、実在は確認できないが「保延<sup>□</sup>年」の太政官符が十四世紀に「天下の規則」としてその拠り所となっていた。保延四年の事件は、太政官符によって後世のように領主に関わりなく認められた小五月会費用（＝馬上役）徴収権を行使した日吉社に対し、賦課された賀茂社領の住民がこれを拒否したことによって起こった紛争であったものと思われる。「賀茂生」は「蒲生」かとも考えられるが不明。「馬上役」に関しては、賀茂社以外にも、石清水八幡宮とも紛争を起こしている（『園太暦』二十九 南朝正平十二年・北朝延文二年（一一三五）四月二十四日条）。帰山の際に鴨神社の祢宜宅を破壊したことについては、資料では確認できない。○近衛院御宇久安三年六月廿八日、清盛朝臣郎從依神人殺害事、三社ノ御輿ヲ



陣頭二奉振 発端となった事件の概要については『本朝世紀』に詳しい。それによると、久安三年（一一四七）六月十五日の祇園社臨時祭の際に、当中務大輔であった清盛が、宿願を果たそうと田楽奉納を企てた。その警護に武装した武士たちを派遣したところ、武装がふさわしくないと社家の下部からクレームが付き、争いの結果刃傷沙汰に及び、祇園社の権上座隆慶に矢が当たったほか、下僧にも負傷者が出た（十五日丁未。天晴。今日祇園臨時祭也。……今夜中務大輔平清盛朝臣為果宿願調立田楽、発遣祇園社頭。又為守護田楽之輩、帶兵仗者有其数。爰社家下部等令制止兵仗之間、鬭諍出来、彼是互刃傷。清盛朝臣郎等放矢者、有其数。権上座隆慶中矢。下僧珍徳永幸等被刃傷了。久安三年六月十五日条）。二十六日に延暦寺の所司等が参院、この事を訴えたので、忠盛、清盛は事態の收拾を図るため、下手人を院庁に引き渡し、その後検非違使へと引き渡されるが、納得しなかった大衆が忠盛・清盛の配流を求めて二十八日に神輿を立てて下山した。後白河院は検非違使等に命じてこれを禦がせるとともに、しかるべく裁許を下す旨（『台記』によれば三ヶ日の期限を切っている）を約し帰山させている（廿六日戊午。今日延暦寺所司等参院。訴申祇園鬭乱事。播磨守忠盛朝臣、無仰以前召進下手人七人於院庁云々。即給檢非違使了。廿八日庚申。已刻。叡山衆徒及日吉祇園両社神人等昇神輿、猥欲入洛。是則依去十五日祇園鬭乱事、忠盛朝臣清盛朝臣父子共以可被処流刑之由訴申故也。以奏狀進院云々。爰法皇差遣檢非違使左衛門少尉源朝臣光保、同朝臣親康、同朝臣季頼、同為義、平家弘等、於切堤辺令守禦。又散位平正弘、河内守源季範等、各率軍兵発向。依法皇仰也。衆

徒等結党成群、放声叫喚。其響聞洛中、京師因茲騒動。及申刻、民部卿頭頼卿奉院宣、差遣庁官一人。仰衆徒云。至于訴申事者、任道理可有裁許。早可罷歸。衆徒等承仰愁歸山了。『台記』にも「臨晩、詔衆徒曰、三日之内、許所請者、衆即歸」（久安三年六月二十八日条）と記される。なお、鬭諍があり、刃傷があったことは確かで、権上座隆慶が矢に中り、下僧珍徳永幸等の刃傷があった。しかし、〈盛〉「神人殺害」という事実があったかは確認できない。『台記』の六月十五日条には、「今夕祇園所司、与忠盛朝臣郎等鬭。所司蒙瘡。矢中神殿云々」とあり、『天台座主記』には、「忠盛朝臣郎従等、依田楽事、放矢之間、中神殿柱、所司專又又被疵之故也」（九〇頁）とある。また、この時動座したのが「三社ノ神輿」であるかは、記録からは確認できない。○同日ニ忠盛可被配流之由被仰下畢 〈盛〉によれば、強訴のあった二十八日の内に、忠盛の配流が決定されたとなっているが、事実は大きく異なる。『台記』や『本朝世紀』によれば、六月三十日に院御所で群議が開かれ、内大臣頼長の処分への強硬論があったものの、下手人への尋問と調査を待つべきとの結論に落ち着いた。その後、調査と議論に日数が費やされる中で、山上では再び蜂起の動きが起こるが、院は武士を西坂本に派遣してこの動きを牽制、鳥羽院自身が派遣の軍を閲兵して決意の程を示している。七月二十四日、清盛他の罪名が議論されるが結論は出ず、深夜になって清盛に対して「贖銅三十斤」の決定がなされ、二十七日に奉幣使によってこの決定が祇園社に伝えられ、八月五日に太政官符が下された。六月二十八日の強訴の際に伝えられた三日以内という約束は反古にされ、結論が出るまでに一ヶ月近くが費やされた上、忠盛・



清盛二人の流罪要求に対しても、清盛への贖銅のみに留まっている。強訴の当日に忠盛の配流が決定されたという〈盛〉の記事は、史実とは大きく異なっているが、これも神興下洛の威力、日吉の神威を強調し、その要求はすみやかに叶えられるべきものという認識を強調したもののか。なお、この事件の経緯については、『台記』や『本朝世紀』等の史料に基づき、五味文彦や高橋昌明①が詳しく紹介している。この事件について、五味は、「優柔不断な法皇にしては珍らしく、強い態度をもって臨み、武士を派遣して大衆の強訴を防ごうとし、忠盛を保護する姿勢を貫いた。その強訴阻止のために組織されたのが忠盛一門を除く源氏・平氏の武士たちであり、その行軍は法皇の権威を示すとともに武士の武威をも示すものとなった」（五五頁）と評し、高橋昌明①も「経過の中ではっきりしているのは、鳥羽院が忠盛・清盛を、延暦寺の攻勢から最大の努力を払って庇いぬいた事実である。かつて白河院時代、高階為家・藤原為房らの近習といえども、衆徒の強訴の前に流刑をまぬがれなかったことを思えば、院の敢然とした姿勢はきわだっている」（二八八頁）とし、また、事件後は院が自由に動かしうる中央軍事警察機構の武官数が拡大されていることを捉えて、「これを契機に武士がいっそう中央に進出し、中央官府・院庁の軍事化の傾向に拍車をかけたことは疑いない。それは保元・平治の乱の伏線の一つとして、正当に評価されねばならない事柄である」（二八八頁・二九二頁）と指摘する。〇二条院御宇永暦元年十一月十二日、菅貞衡朝臣息男資成、依有智山僧坊焼失事……事件の詳細は不明だが、『天台座主記』には、「大衆昇日吉八王子・客人・十禅師・祇園・北野・京極寺・神興・参院〔後白河〕陣、依大原山・悪僧焼失、有知山」

并焼中竈戸宮、為訴申可被行菅家長者治部少輔貞衡於罪科之由也、任二申請、蒙裁許了」（「権僧正最雲」永暦元年（二一六〇）十月十二日条。九四頁）と記される。菅原貞衡は加賀守清能の男。従四位上で治部少輔、弾正大弼に任ぜられた。仁安二年（一二六七）三月二十九日没、七十二歳（尊卑）四一六九頁。他に『菅原系図』（続群書七下―二〇頁、二八頁、五七頁）、『出雲氏族菅原朝臣系図』（古代氏族系譜集成中―一〇二頁）参照。『山槐記』には「弾正大弼従四位下行菅原貞衡死去、年七十二、氏長者也」（仁安二年三月二十九日条）とある。その息資成については、「資成（式本資重）」（『菅原系図』（続群書七下―一四頁）とある。『山槐記』によれば、永暦元年九月二十七日条に、日吉の社司、延暦寺の所司三四十人が院御所の門前で「内山（有智山）事」について貞衡を訴えたことあり（院御所門前、日吉社司、延暦寺所司三四十人許群立。是依内山事訴申菅貞衡（氏長者云々）」（同日条）、「百練抄」は、この事によって延暦寺大衆が日吉神興を捧げて参洛したことを記す（延暦寺大衆、捧日吉神興参洛。訴申大宰府竈門宮并大山安樂寺焼亡、治部権少輔菅原貞衡合戦事」（永暦元年十月十二日条）。その結果貞衡は解官、息男資成は配流されている（菅原資成配流。貞衡解官（同十七日条）。なお〈盛〉の「十一月」は「十月」の誤り。安樂寺は「福岡県筑紫郡太宰府町にあった寺院で、菅原道真の廟所……『東寺文書』や『尊卑分脈』によれば天暦元年（九四七）祭神の孫平忠が初代別当に補せられてから観心・文和年中（一二三〇―一五六）経円まで三十六世に及んだ。……これらの別当はいずれも祭神の血統である氏人の出であるから、常に安樂寺が天満宮に奉仕する神官を支配する立場にあった」（『国

史大事典』。また、竈門宮は「宝満山（竈門山）頂から山麓にかけて所在する。旧官幣小社。現在の祭神は玉依姫命・神功皇后・応神天皇。『延喜式』神名帳記載の名神大社、御笠郡「竈門神社」は当社に比定され、同書臨時祭にも名神として名を連ねる。……平安時代からは竈門山寺・大山寺・内山寺・有智山寺とも称される神宮寺を有し、一体となって活動している」（『平凡社地名・福岡県』七〇〇～七〇二頁）。竈門宮の神宮寺である大山寺は「大山者是天台之末寺也」（『中右記』長治二年十月三十日条）とあるように、十二世紀初頭には延暦寺の末寺となっており、「悪僧自法薬禅師執行山上政之時、推而成彼大山別当、下遣延暦寺下部并日吉社宮主法師原於鎮西、猥以執行」（『同日条』）とあるように、延暦寺の「悪僧」が「推して（＝押して）」大山別当となり下部や宮主らを現地に派遣して寺の支配を実行している。同様に、延暦寺は安楽寺に対して影響力を及ぼすことを図っており、元永元年には安楽寺別当を延暦寺の僧の中から選ぶように奏状を出した（『中右記』元永元年二月二十九日条）が、陣定において菅原氏の氏長者の挙によるものと決定され「不可異議」とされ実現しなかった（『同』五月二十二日条）。おそらく安楽寺をめぐる、比叡山と菅原氏を代表とする地元勢力との間に対立が継続しており、これが永暦元年の武力衝突の原因となっていたのであろう。列挙された他の事例が、院や院近臣と大衆との対立の構図であったのに比べると、この事件は九州で起きた事件であり異質。○右大弁雅頼（補任）によれば、中納言源雅兼の三男。母は権大納言能俊女。永暦元年十月に右大弁となっていた（三一五三八頁）。○俱舎頌（俱舎論頌疏。唐の円暉が世親の俱舎論本頌六百偈を訳したもの。文流暢にして意義

通じ易い」（『新定盛』1二三五頁）。『俱舎論研究の入門書として中国・日本で盛んに学習され、多くの末注が作られた』（『大蔵経全解説大辞典』五二五頁）。『梁塵秘抄』二二三「天台宗の畏さは、般若や華嚴摩訶止観、玄義や釈籤俱舎頌疏、法華経八巻が其の論義」（新大系六三頁）。『日吉山王利生記』「小兒どもの文ならひをむる□には、俱舎頌とてよむぞかしな」（神道大系『日吉』六七五頁）。○ヤサシカリケル事也「ヤサシカリ」はここでは「姿や言語、振舞いなどに、こまやかな心づかいや、たしなみの深さなどが感じられるさま」（『日国大』）であろう。俱舎頌疏を誦しながら帰山する大衆の様子が優美であったという。なお、〈盛〉の成立を青蓮院門跡周辺との関係から考える松田宣史は、有智山と青蓮院門跡は何らかの関係があると考えられることから、有智山を焼いた者が禁獄された話について、〈盛〉編者は「ヤサシカリケル」のような評をつけたのではあるまいかとする（八三三頁）。○高倉院御宇嘉応元年十二月廿二日、尾張国目代政友、依平野ノ神人陵礫ノ事…『天台座主記』によれば、事件の発端は尾張国の目代右衛門尉政友が美濃国平野庄の神人を禁獄にしたことが原因であった（是、為尾張国目代右衛門尉政友被禁獄美濃国平野庄神人之故）『法印明雲』仁安四年（一一六九）十二月二十三日条。一〇三三頁。『平家物語』諸本は、この事件の詳細を、鹿谷事件により流罪されることになった成親が、まだ中納言であった時にも流罪された事件として記す。〈盛〉「此大納言ノ中納言ニテ御座シ時、尾張国守ニテ、去嘉応元年冬ノ比、目代ニテ衛門尉政友ヲ当国へ被下ケルガ、美濃国杭瀬河ニテ宿ヲ取。山門領平野庄ノ神人、蘭ヲ売テ出来レリ。政友是ヲ買ントテ、直ノ高下ヲ論ジテ様々ニナブル程ニ、蘭ニ

墨ヲ付タリケル。懸ケレバ神人等、憤起テ、山門ニ攀登テ致訴詔一間、衆徒及奏聞。聖断遅々ニ依テ、同年十二月廿四日ニ、大衆等日吉ノ神輿ヲ頂戴シテ下洛ス。武士ニ仰テ被<sub>レ</sub>防シカ共、神輿ヲ建礼門ノ前ニ奉<sub>二</sub>振居<sub>一</sub>、国司成親卿ヲ流罪ナリ、目代政友ヲ可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>禁獄<sub>一</sub>之由、訴申ケレバ、成親卿ハ備中国ヘ流罪、政友ヲバ禁獄ノ由、被<sub>レ</sub>仰下。即西ノ朱雀マデ被<sub>レ</sub>出タリシカ共、同廿八日ニ被<sub>レ</sub>召返、同卅日本位ニ復シ中納言ニ成返テ、嘉応二年正月五日、右衛門督ヲ兼ジテ檢非違使ノ別当ニ成給フ(卷七「成親卿流罪」1—427—428頁。諸本もほぼ同様の記事を有する)。成親はこの時尾張守ではなく、知行国主であつたのだが、目代として下向途中の政友が、美濃国杭瀬河の宿所で、葛粉(あるいは葛で織つた布とも)の値段のことで山門領平野の神人に難癖をつけたあげく、売り物である葛に墨を入れたというのである。初めに引いた『天台座主記』の記事とは異なっており、こうした経緯の史実性は確認できない。『兵範記』の嘉応元年十二月十七日条によれば、その後の経緯は延暦寺所司と日吉社司各数人が、尾張国知行国主である成親の配流、政友の禁獄を要求する書状を持参したが、受け取らなかつたため、これを投げ入れて帰つたという(「延暦寺所司、日吉社司各三四人、依<sub>ル</sub>大衆使持来奏状。尾張守家教目代右衛門尉政友、於<sub>レ</sub>国<sub>二</sub>礫<sub>一</sub>美濃国平野庄人。是依<sub>二</sub>中堂御油寄人々<sub>一</sub>大衆訴申也、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>流罪<sub>一</sub>權中納言成親・仰<sub>中</sub>禁獄<sub>上</sub>。下官依<sub>二</sub>所<sub>一</sub>勞<sub>二</sub>不出仕<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>由雖<sub>二</sub>辞遁<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>承<sub>二</sub>引<sub>一</sub>、投入分散畢)。その後、十二月二十二日夜に至つて、大衆が神輿を先頭を下洛、待賢門・陽明門に神輿を昇き据え交渉に及ぶが裁許が得られなかつたため、待賢門の大衆が内裏に押し入り神輿六基を建礼門壇上南面に安置、陽

明門の大衆は北野の二基を左衛門陣屋に安置した。院御所には重盛率いる五百騎が伺候していたが、後白河院からの度重なる内裏への出動要請については、夜陰による混乱から神輿破損の恐れを理由に公卿たちがこれを決断せず、結局院御所に止められたままであつた。重盛も公卿たちの判断に同意しており、三度にわたる院からの出動要請にも兵を動かさなかつた(『玉葉』「或人云、昨日早参内裏、可<sub>レ</sub>追<sub>二</sub>婦衆徒<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>重盛卿<sub>一</sub>。而申云、已及<sub>二</sub>夜陰<sub>一</sub>了、内裏太無情、自<sub>レ</sub>外責伏、衆徒乱入内裏之中、大事出来後、後悔不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶云々。然而尚被<sub>レ</sub>仰已<sub>二</sub>三ヶ度<sub>一</sub>、仍欲<sub>二</sub>参内<sub>一</sub>之間、又被<sub>レ</sub>止了。明晓可<sub>レ</sub>向云々」嘉応元年十二月二十四日条)。こうした事態について、元木泰雄は、「内裏に対する強訴や、宮中への乱入、さらに神輿の放置といったことは従来の強訴には見られなかつたことであつた。強訴の攻撃的性格が強まつた背景には、後白河や平氏に擁立された高倉の王権に対する寺社勢力の不信が影を落としていたのではあるまいか。重大な結果を招いただけに、平氏一門の非協力的態度は後白河院にとって許しがたかつたものと考えられる」(九四—九五頁)と指摘する。なお、『兵範記』十二月二十三日条に「待賢門大衆先<sub>二</sub>立神輿六基<sub>一</sub>(日吉、十禅師、八王子、客宮、祇園三輿、已上宮司神人獅子等相從)」、押<sub>二</sub>入門中<sub>一</sub>、建礼門壇上南面奉<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>神輿六基<sub>一</sub>とあり、『天台座主記』にも「衆徒昇<sub>二</sub>日吉八王子、客人、十禅師、祇園、北野、京極寺神輿<sub>一</sub>参内」(一〇三頁)とあるので、(盛)が「三社ノ神輿ヲ奉振大内」とするのは、日吉の神輿のみを数えたものか。○陵礫『邦訳日葡辞書』「Reotiacu レウリヤク(凌礫・陵礫)人にひどい仕打ちをしたりして、行動によつて、侮辱を加えること」。目代政友と平野庄神人との陵礫を交えた争

いについては、前項に見るように諸本ともに成親流罪の場面に詳述する。田中文英は「在地における神人・寄人らの田堵農民層の利害にかかわる政治的要求が延暦寺の大衆組織のなかにもちこまれ、大衆組織の内部にその要求をうけとめる勢力が存在し、その勢力が嗾訴という政治行動をとらしめる起動力になった点が示唆されているのであるが、それはおそらく事実であったと考えられる」とし、「この嗾訴の根底には、神人・寄人などの形態をとって国衙権力の支配に抵抗する田堵農民層の闘争が伏在しているのであり、延暦寺大衆が直接の手下人である政友の禁獄のみならず成親の配流を執拗に要求するものこの点と関連するものであった」（一八五頁）と指摘する。○同廿四日成親卿解官配流（備中国）、政友禁獄之由被宣下畢『玉葉』『兵範記』によれば、後白河院は十二月二十四日に成親の解官と備中への配流、政友の禁獄を決定し、衆徒等は帰山する。『兵範記』「下官仰中納言」云、権中納言藤原朝臣成親、左衛門尉藤原政友解却見任、成親除名追位記令配流備中国、政友賜獄所……此間座主以下僧綱参会建礼門前、衆徒所司宮司群集、奉神興歎喜帰山畢」（同二十四日条）。ところが法皇は二十七日に座主明雲の護持僧を停止し、翌二十八日には権中納言で検非違使別当であった平時忠と、藏人頭平信範を解官、時忠を出雲へ、信範を備後へと配流を決定（『兵範記』「別当遣出雲国」、下官備後国、各被成官符云々」同二十八日条）、その一方で成親の召還を命じた（『兵範記』「権中納言藤原成親（去廿四日依大衆訴解官流罪、同廿八日被召返、令還任也）」同三十日条）。これについて兼実は「今日沙汰、抑天魔所為也」（『玉葉』嘉応元年十二月二十八日条）と批判している。時忠や信範の処分について、元木泰

雄は、「武門平氏への不満が、公家平氏一門にぶつけられたような結果となった」（九五頁）と評する。翌嘉応二年正月六日、後白河院が、召し返した成親を右兵衛督・検非違使別当に昇進させると、大衆は再び不穏な動きを見せ、洛中は緊迫した空気に包まれる。大衆は、成親の再配流と、時信・信範の召還を要求（『玉葉』「昨日於院被定山僧愁申二ヶ条事云々、其趣被配流成親卿、并可被召還時忠・信範等之由云々」嘉応二年一月二十三日条）、院もついにこれを裁許せざるを得なくなる（『玉葉』「昨日参院之次、光能語云、去廿七日僧綱等院参、二ヶ条事尚訴申、仰云、於此事可裁許、自今以後台山之訴訟、一切不可有沙汰云々」同一月三十日条。結局二月六日に正式な宣下が下されて、この事件はようやく決着を見るのである（『玉葉』「一昨日被宣下云、時忠卿・信範朝臣等宜令召還」、又成親卿可解却中納言右兵衛督等」同二月八日条）。《盛》の記事は、十二月二十四日で終わっており、その後の二転三転する事態については触れられていない。田中文英は、「延暦寺衆徒の要求に対して法皇の態度が二転・三転した政治的背景の一つには、政治支配層内部の足並みの乱れと亀裂があった」と指摘する。事態収拾に早くから匙を投げていた明雲を初め、法皇の対処を冷ややかに見つめて天魔の所為と批判する九条兼実、院殿上における公卿會議も判断保留か、「諸卿定申趣、非一」（『玉葉』嘉応二年一月二十三日条）という有様の中、院権力の武力的支柱たるべき平氏が、政局の山場において山門との衝突を回避する消極的姿勢を取ったことが、法皇の対処策を転変せしめる大きな政治的要因になったとし、法皇が最終的に衆徒の要求をのんだのは、一月十七日に上洛した清盛の意向が強く働いていたためとす



る(一八七頁)。同様に、高橋昌明②③も、法皇の強引なまきかえしについて、廷臣等は山徒の圧力を背景に、事実上その決定を覆したとし、重盛の出動拒否も重盛の意志というよりは、平家全体、なかなか清盛の判断と決意を踏まえての選択とし、一月十七日に清盛自身が上洛したのは、一門の引き締め、後白河に対する示威、延暦寺にたいする支持の政治的シグナルを意味していたとする(②一〇〇―一〇二頁、③一九四―一九七頁)。嘉応元年の強訴は、地方の荘園支配権をめぐる院および院近臣と延暦寺との対立という構図を持っているという点で、安元三年の強訴の前段的な性格を有していたといえよう。なお、飯田悠紀子は、衆徒達が目代の非法に対して、目代と国守とを訴えるのではなく、目代と知行主とを訴えたのは、目代の行動の源泉が知行主藤原成親にあることを知っていたためであるとす。つまり国務沙汰権は国守藤原家教にではなく、知行主の成親にあったため、衆徒は成親の流罪が決定するまで帰山しなかったたのであろうとする(五九―六〇頁)。○神輿下洛ノ御事、代々及六箇度(闕・南・屋・覚・中)は「大衆山王御輿奉振内裏、從昔及度々、從永久元年(癸巳)以来至<sup>テ</sup>治承元年六箇度」(闕)一上―三六オ。但し、傍線部を「南・屋・覚」は「陣頭へ振奉る事」(「覚」上―五九頁)、「中」「せうをいたす事」(上―六三頁)とする)のように、永久元年を起点としつつ、終点を治承元年とする。《全注釈》はこの「六箇度」を「永久元年(一一一三)四月一日の事件、保安四年(一一二三)七月十八日の事件、久安三年(一一四七)四月十四日、同六月二十八日の事件、嘉応元年(一一六九)十二月二十三日の事件とこのたびの事件(\*安元三年三月)をさすのであろう」(上―一二二頁)とするが、その根

拠は示されていない。また、久安三年四月の例では、僧綱らが白山平泉寺を延暦寺の末寺とすべく群参したのみで神輿が入洛したことは確認できず『本朝世紀』『百練抄』『天台座主記』、保安四年七月の例や久安三年六月の例では、神輿は陣頭あるいは内裏の門にまで迫っていない。これに対し、《四・延・長》は「凡神輿入洛事其例ヲ勘ルニ、永久元年ヨリ以来タ既六ヶ度也」(《延》卷一―一〇一ウ。但し、傍線部を《四》は「参内裏事」(卷一―六〇右)、「長」「ちん頭へまいる事」(一―一〇七頁)とする)と、永久元年を起点とする点とは同じながら、「既六ヶ度」と、今回以前に六回あったとするので、保延四年または永暦元年のいずれかを加えて六回と数えていることになる。『愚管抄』には「長治二年十月卅日、山大衆日吉神輿ヲグシマイラセテダリケル事ノ始也」(旧大系一〇六頁)と、長治二年(一一〇五)十月を、日吉社の神輿が下山し入洛した初例としている。衣川仁によれば、これ以降安元三年に至るまで、大衆による神輿動座が次の八回あったことが確認される。①嘉承三年(一一〇八)三月、②天永四年(一一一三)四月、③永久元年(一一一三)九月、④保安四年(一一二三)七月、⑤保延四年(一一三八)四月、⑥久安三年(一一四七)六月、⑦永暦元年(一一六〇)十月、⑧嘉応元年(一一六九)十二月(一九六―二〇一頁)。(闕・南・屋・覚・中)また《四・延・長》が永久元年以来とするのは、③(あるいは②③を一連として捉えるか)から⑧に至る六回を指すのだろうか。これに対し、《盛》のみ起点を①嘉承三年として、②天永四年(一一一三)、③永久元年を除く六回を具体的に挙げている。「六箇度」という数字が先にあり、そのため恣意的に事件を数える結果となったとみられる。《盛》がなぜ諸本が挙げる永



久元年②や③を省いたのかは不明。③については『長秋記』に「今夜山大衆群降祇園、昇神輿欲參陣頭（座主可被成替）之由、無動寺衆訴申云々、上皇仰盛重時忠盛宗実四人、檢非違使等遣追却衆等、本人数少、弥聞此旨散々逃去云々、又頭弁下官預宣旨一枚、昨日所下、山悪僧等可奉追捕之由宣旨也、依有字失、書直所進也、可令進大臣者、件宣旨、今夜下山所司等在京者不請取、相具可登山之由令申云々、其宣旨状云、山悪僧、於山上者、所司可捕進、於在京者、檢非違使等可追捕、於諸国、各国司可追捕進者」（永久元年九月三十日条）とあるように、大衆の要求は院によって却下され、逆に山悪僧が追捕を受ける事になっている。本節冒頭の神輿によって聖断を促すという趣旨に適合しないため排除されたか。ただし、その場合には保安四年の例も適合しないことになる。あるいは、右に引いた『長秋記』「山大衆群降祇園、昇神輿欲參陣頭」や『殿暦』「祇園神輿奉迎京極寺云々」（同日条）からは、大衆は祇園社の神輿を動座しただけのように読めるためか。同様に②についても『長秋記』に「僧徒二千余人、昇祇園神輿進参」（天永四年四月一日条）とあり、動座したのは祇園社の神輿ということになる。とすれば、②③の永久元年の強訴では、日吉社の神輿動座はなかったとも考えられる。日吉社の神輿の動座を記録した資料があり、それを盛編者が参照したとすれば、永久の強訴を除く六度の神輿動座の記事を取り込んだ可能性もあろう。

○毎度二武士ヲ召テ被禦ケレ共、御輿ニ矢ヲ進ル事ハナカリキ 神輿に矢が当たったことは、前代未聞のこと

## 【引用研究文献】

\* 飯田悠紀子「平氏時代の国衙支配形態をめぐる一考察」（日本歴史二六二号、一九七〇・3）

ととして人々の恐怖心をあおった。『玉葉』「件神輿射立矢云々、古来雖有衆徒騒動、未無其矢中神輿之例、尤可懼々々」（安元三年四月十三日条）。また『愚昧記』も、矢が当たって放置された神輿の周囲に人々が群集し、これを伏拝んだ事が記される。「仍不堪其責、射弘衆徒之間、其矢中日吉神輿云々、……神輿棄置二条町辺（陣口也）、京中難人群集、低頭合掌、事趣可恐可歎、困代未有如此事歟」（安元三年四月十三日条）。○今度ノ御輿ニ矢ノ立事、乱国ノ基歟。浅間シト云モ疎也。人恨神怒レバ災害必成トイヘリ、天下ノ大事ニ及ナント、心アル者ハ上下皆歎恐ケリ（四）「人恨神の憤災害必至」（卷一六〇右、〈延〉「人ヲ怨レ神ヲ怨レバ、国ニ災害起ルト云ヘリ」（卷一一〇一ウ、〈長〉「人いきどほり、神いければ、災害かならずおこるといへり」（一——一〇七頁、〈南〉「靈神忿ヲナセバ災害巷ニ充ト云ヘリ」（上——一四〇頁、〈屋〉「靈神忿ヲナセバ災害衢ニミット云ヘリ」（八二頁、〈覺・中〉も同）と、表現には若干の異同がある。人の怨み↓神の怒り↓災害↓国の乱れという展開については、遠藤光正が、『貞観政要』卷一の君道篇に、「夫事無可観、則人怨神怒。人怨神怒、則災害必生。災害既生、則禍乱必作」とあるものが典拠である。『貞観政要』の通行刊本では、「夫事無可観則人怨、人怨則神怒。神怒則災害必生」とあって、盛衰記の文とは合わない。盛衰記の本文は『貞観政要』の旧鈔本の文字を伝えているものである（原田種成博士の説に拠る）（一一一頁）と指摘する。通行刊本では災害↓国の乱れが欠けていることになる。

\* 遠藤光正『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(八) (『東洋研究』一〇四号、一九九二・9)

\* 衣川仁「強訴考」(『史林』八五巻五号、二〇〇二・9。『中世寺院勢力論—悪僧と大衆の時代—』吉川弘文館二〇〇七・11。引用は後者による。)

\* 五味文彦『平清盛』(吉川弘文館一九九・1)

\* 下坂守①『京を支配する山法師たち』(吉川弘文館二〇一一・5)

\* 下坂守②『中世寺院社会史の研究』第二章延暦寺大衆と日吉小五月会(その一) (思文閣出版二〇〇一・12)

\* 高橋昌明①『清盛以前 伊勢平氏の興隆』(平凡社一九八四・5。増補改訂版、平凡社ライブラリー二〇一一・12。引用は後者による)

\* 高橋昌明②『平清盛 福原の夢』(講談社二〇〇七・11)

\* 高橋昌明③「嘉応・安元の延暦寺強訴について—後白河院権力・平氏および延暦寺大衆—」(『延暦寺と中世社会』法蔵館二〇〇四・6。『平家と六波羅幕府』東京大学出版会二〇一三・2再録)

\* 田中文英「後白河院政期の政治権力と権門寺院」(『日本歴史』二五〇号、一九八三・6。『平氏政権の研究』思文閣出版一九九四・6再録。引用は後者による)

\* 松田宣史『源平盛衰記』と青蓮院門跡—『源平盛衰記』の成立圏・統論— (『室町藝文論攷』三弥井書店一九九一・12。『比叡山仏教説話研究—序説—』三弥井書店二〇〇三・11再録。引用は後者による)

\* 水上文義「山王神道の形成—その問題点と留意点—」(伊藤聡編『中世神話と神祇・神道世界』竹林舎二〇一一・4。『日本天台教学論』台密・神祇・古活字』春秋社二〇一七・6再録)

\* 元木泰雄『平清盛の戦い—幻の中世国家』(角川書店二〇〇一・2)

\* 山中美佳『源平盛衰記』の列挙表現—名所・歌枕巡りを中心として— (『日本文学研究』四八巻2号、一九九六・9)

四月<sup>1</sup>十四日ニ、大衆ナヲ<sup>2</sup>可<sup>3</sup>下洛<sup>4</sup>之由聞エケレバ、<sup>5</sup>夜中ニ主上腰輿ニ召テ、<sup>6</sup>院御所法住寺殿へ行幸、内大臣重盛以下ノ人々、<sup>7</sup>直衣ニ矢負テ供奉セラル。軍兵御輿ノ前後ニ<sup>8</sup>打囲テ雲霞ノ如也。中宮ハ御車ニテ行啓、禁中何トナク周章騒、男女東西ニ走迷ヘリ。関白以下大臣公卿殿上ノ<sup>9</sup>侍臣、皆馳参ケリ。「聖断遅々ノ間、衆徒多矢ニアタリ、<sup>10</sup>神人殺害ニ及上ハ、神<sup>11</sup>輿ノ残四社ヲ奉振下、七社ノ神殿、三塔ノ仏閣一字モ不<sup>12</sup>残焼払、山野ニ交ルベシ。悲哉、西光一人ガ姦邪ニ依テ、忽ニ円融十乘ノ<sup>13</sup>教法ヲ亡ン事ヲ」ト、三千衆徒僉議スト聞エケレバ、当山ノ上綱ヲ召テ、<sup>14</sup>可有御成敗之旨依<sup>15</sup>被<sup>16</sup>仰下、<sup>17</sup>十五日勅定ヲ披露ノ為ニ僧綱等<sup>18</sup>登山シケルヲ、衆徒瞋ヲ成テ水飲<sup>19</sup>ニ下向テ<sup>20</sup>追帰ス。僧綱色ヲ失テ逃<sup>21</sup>下。

【校異】 1 〈近〉「十四に」。〈蓬〉「二」なく、「十四日」。 2 〈近〉「けらくすべきのよし」、〈蓬〉「下洛すへきよし」、〈静〉「下洛すへきよし」。 3 〈蓬〉「夜中に」。 4 〈近〉「ちよくいに」、〈蓬〉「直衣に」、〈静〉「直衣に」。 5 〈近〉「をふて」、〈蓬・静〉「負て」。 6 〈近〉「うちにこんて」、〈蓬・静〉「うちかこみて」。 7 〈近〉「じしん」。 8 〈近〉「しんにん」、〈蓬〉「神人」。 9 〈近〉「ふりおろしたてまつり」、〈蓬〉「振下し奉りて」、〈静〉「振下奉りて」。 10 〈蓬〉「一字を」、〈静〉「一字を」。 11 〈近〉「よて」、〈蓬・静〉「よりて」。 12 〈近〉「けうぼうを」。 13 〈近〉「御せいはいあるへきのむね」、〈蓬〉「御成敗あるへき旨」、〈静〉「御成敗あるへき旨」。 14 〈蓬・静〉「十五日に」。 15 〈近〉「とうざんしけるを」、〈蓬〉「登山しけるを」、〈静〉「登山しけるを」。 16 〈近〉「おりむかつて」、〈蓬〉「下向て」。 17 〈静〉「追返す」。

【注解】 ○四月十四日ニ、大衆ナヲ可下洛之由聞エケレバ：〈闕・延・長・南・屋・覚・中〉もほぼ同。「同十四日ノ夜半計、山門の大衆、又おびたしく下洛すと聞えしかば」（〈覚〉上―六〇頁）。安元三年の強訴に際しての行幸の様子については『玉葉』や『愚昧記』に詳しい。『玉葉』安元三年四月十四日条によると、十四日の寅の刻に高倉天皇の閑院内裏から法住寺殿への行幸の知らせが届くが、兼実ははじめてそれを信じず（「寅刻人告云、山僧又以下向、依恐其事」、忽行幸法住寺殿云々、余敢不信受之間、大夫史降職告送同状）、関白基房も突然の連絡に供奉には間に合わなかったという（「関白兼不被聞之、依卒爾之告遅参」。供奉の人々は直衣姿の者もあり、衣冠姿の者もありとまちまちで（「供奉之輩、或直衣或衣冠」、主上の御椅子他の雑具は雑役車に積んだり人夫にかつがせたりという混乱ぶり（「御椅子・時簡・殿上雑具等、積雑役車渡之、鑑鈴等人夫負之」）、中宮の行啓に従ったのは大進基親のみという有様だった（「中宮行啓、大進基親之外、更無他人云々」）。これに対し兼実は、「縦夷狄雖致謀叛、天子豈棄皇居乎、可彈指之世也」と非難し、「仏法王法滅尽期至歟。五濁之世、天魔得其力」、是世之理運也。惣非言語之所及、非筆端之可尽。夢歟非夢歟」と歎いている。『愚

昧記』四月十四日条によれば、内大臣重盛が「向殿」（左大臣藤原経宗）に行幸について相談をしてきた。（「寅刻許、自向殿以清光示給云、内大臣只今示送云」）。「治安維持の責任者たる重盛は、親しい左大臣経宗に「事の体すでに京洛を棄てらるるか、行幸あるべからず、ただ例にまかせ切堤の辺り（高野川の東岸）で禦ぐべきの由、申さしめんと欲するは如何」と意見を求め」（高橋昌明一六六―一六七頁）、経宗も「然者尤其由可申旨」（『愚昧記』四月十四日条）と答えている（「事跡已被棄京洛歟、不可有行幸」、只任例可禦切堤辺之由、欲令申、如何、然者尤其由可申旨答云々）。経宗自身は、「尤可参歟」としながらも「但天曙之後儀歟云々」と考えて、行幸には間に合っていない。なお、平重盛はこの事件以外にも「申此由於向殿」、示給云、只今自大将（重盛）許有示遣事」（『愚昧記』安元三年二月十日条）などのように藤原経宗に相談をしながら事に当たっている。儀式の作法なども、重盛は経宗の教えを「金言」（『玉葉』承安四年十月八日条）としている。 ○夜中ニ主上腰輿ニ召テ、院御所法住寺殿へ行幸（四・闕・延・長・南・屋・覚・中）同。『玉葉』や『愚昧記』によれば、寅刻に主上臨幸の知らせがあった。突然の決定に関白基房も参内が間に合わなかったという（前項参照）。高倉天皇は閑

院内裏から法住寺殿へ臨幸、南殿を一時的な内裏とした（『參南殿』、是皇居也）『愚昧記』安元三年四月十四日条）。○内大臣重盛以下ノ人々、直衣ニ矢負テ供奉セラル。軍兵御輿ノ前後ニ打圍テ雲霞ノ如也供奉の人々については、重盛以下の人々が直衣に矢を負ってという点は〈中〉を除き〈中〉は重盛以下の供奉を全く記さない）諸本で共通するが、その他については若干の異同が認められる。〈延〉は、「内大臣重盛以下供奉人々、非常ノ警固ニテ直衣ニ矢負テ被<sup>レ</sup>供奉」。左少将雅賢、着闕腋束帯平胡籙負テ被<sup>レ</sup>供奉」（卷一—二オ、〈長〉もほぼ同文）と、「直衣ニ矢負テ」という装束が「非常ノ警固」のためであると説明するほか、左少将雅賢の名と装束を挙げる。同行者を後白河院近臣の雅賢とするのは〈延・長〉で、〈四〉は「少将維盛朝臣付<sup>ケツエキ</sup>闕腋<sup>ニ</sup>束帯<sup>ニ</sup>平胡籙<sup>ハヒヤナクイヲ</sup>負テ被<sup>レ</sup>供奉」（卷一—六〇左、〈覺〉は「嫡子権亮少将維盛、束帯にひらやなぐひ負ふて参られけり」（上—六〇頁）とする。〈闕・南・屋・盛〉は次将を記さない。〈延全注釈〉は、「闕腋の束帯に平胡籙は、行幸供奉の次将の正式装束だが、『次将装束抄』には「仰如<sup>レ</sup>此之時、束帯細太刀之類努々不可<sup>レ</sup>有之由」とあり、非常警固の場合、束帯は好ましくないようである」（卷一—五八〇頁）と指摘する。雅賢ないし維盛の装束は、彼らを次将として挙げることにともなう、行幸供奉の正装として記されたものか。また、警護の武士については、〈延・長〉が「内大臣ノ隨兵」（卷一—二オ）と、それが重盛の隨兵であったと記す。『平家物語』諸本が描き出すのは、重盛以下が非常の装束に身を包み、重盛の隨兵らしき大勢の武士に厳重に警護されたものものしい行幸の様子である。ところが実際には、供奉した人々は、「臨幸之儀、駕腰輿、公卿邦綱一人（直衣）、殿上

人五六人（或宿衣、或束帯）其外偏武士等云々」（『愚昧記』安元三年四月十四日条）という有様で、重盛以下の供奉はなかったとみられる。『玉葉』によれば、「御倚子・時簡・殿上雜員等、積雜役車渡<sup>レ</sup>之、鎰鈴等人夫負<sup>レ</sup>之」までを引き連れて、「凡禁中周章、上下男女奔波、偏如<sup>ニ</sup>内裏炎上之時<sup>ニ</sup>云々」（安元三年四月十四日条）と混乱した様子であったとされ、藤原実房は「事跡已被棄京洛歟」「行幸之為艱不<sup>レ</sup>似先例、末代之作法可<sup>レ</sup>悲者也」（『愚昧記』）と歎いている。その一方で、法住寺殿および閑院内裏の付近には軍兵が充満し洛中で合戦が行なわれた平治の乱の時のようであったと記している（『院并内裏辺軍兵遍滿已不<sup>レ</sup>別平治乱代』『愚昧記』）。一方兼実は、官兵を所々に分け遣わして大衆の入洛を防がせるべきであるのに、その指示もなく、法住寺近辺にばかり群集していることを批判している（『官兵等須<sup>レ</sup>分手、可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>防衆徒參洛之道也、而敢無其沙汰、只御在所之近辺雲集星烈云々』『玉葉』安元三年四月十四日条）。○中宮八御車ニテ行啓（四・闕・延・長・南・屋・覺）同じ。〈中〉「中宮御くるまにて、六はらへ行けいあり」（上—六三—六四頁）。『玉葉』によれば「中宮行啓、大進基親之外、更無他人云々」（四月十四日条）と、ほとんど従う人々のいない状態での行啓であった。こうしてみると、法住寺殿への高倉天皇の行幸、中宮徳子の行啓は、平氏一門挙げでの整然とした警護というものではなかったのではないか。また、『愚昧記』に記された重盛から経宗への問合せを見るならば、重盛自身、この行幸には必ずしも賛成ではなかったと思われる。夜明け前に行なわれた急な行幸の背景には、嘉応元年（一一六九）の強訴の際、当時まだ幼かった高倉帝のいる閑院内裏が大衆によって取り囲まれ、蹂躪さ

れた時の記憶が影響していたのかもしれない。なお、『愚昧記』に記される「参仕人」は、大納言藤原実定、権大納言藤原隆季・実房・邦綱・実国、権中納言平時忠・藤原忠親（この時別当）、参議藤原実守で、内大臣平重盛他の平氏一門の名は挙げられない。ただし、安元三年の強訴に際しては、重盛自身は比較的院の意向に従う姿勢を見せていたが（本全釈二二七七頁）以外に狼藉出来て、官兵矢ヲ放。…（項参照）、今回は一門が挙って消極的な姿勢を示し、行幸・行啓については後白河院主導で推し進められたと考えられる。○禁中何トナク周章騒、男女東西ニ走迷ヘリ（四）「禁中の上下劇騒、京中の貴賤走迷ヘリ」（一六〇左）、〈闕・延・長〉「禁中の上下周章騒キ、京中の貴賤走迷ヘリ」（延）巻二一〇二オ、〈南〉「禁中走り迷ヘリ」（上—一四〇頁）、〈屋〉「京中の貴賤、禁中の上下走りマドエリ」（八三頁）、〈覚〉「凡京中の貴賤、禁中の上下、さはぎのゝしる事緩し」（上—一六〇頁）、〈中〉はこの一文を欠く。『玉葉』「凡禁中周章、上下男女奔波、偏如内裏炎上之時ニ云々」（安元三年四月十四日条）。○関白以下大臣公卿殿上ノ侍臣、皆馳参ケリ（四・闕・延・長・南・屋・覚・中）ほぼ同じ。『玉葉』によれば、右大臣兼実家は参内せず（兼実は翌十五日も病氣を理由に参内していない）、関白も突然の行幸に遅参したという。『愚昧記』三月十四日条に記される「参仕人」には、大納言実定以下の名前が挙げられるばかりで、関白基房、太政大臣師長、左大臣経宗、右大臣兼実、内大臣重盛らの名はない（前々項「中宮ハ御車ニテ行啓」項参照）。○聖断遅タノ間、衆徒多矢ニアタリ、神人殺害ニ及上ハ、神輿ノ残四社ヲ奉振下、七社ノ神殿、三塔ノ仏閣一字モ不残焼払、山野ニ交ルベシ（四）「裁報遅タノ上、神人中死衆徒多被<sub>レ</sub>疵<sub>二</sub>之間大

宮二宮以下の七社講堂以下<sub>二</sub>諸堂不<sub>レ</sub>残<sub>一</sub>（「<sub>二</sub>字<sub>一</sub>」放<sub>レ</sub>火を焼<sub>レ</sub>払<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>交<sub>一</sub>」）山野<sub>二</sub>之<sub>レ</sub>由<sub>一</sub>」（巻一—一六〇左—一六二右）、〈延〉「裁報遅タノ上、神輿ニ矢立チ、神人宮仕矢ニ当テ死ス。衆徒多ク疵ヲ被ル上ハ、今ハ山門ノ滅亡、此時也トテ、大宮・二宮以下ノ七社講堂中堂諸堂一字モ不<sub>レ</sub>残焼払テ、山野ニ可<sub>レ</sub>交<sub>二</sub>由<sub>一</sub>」（巻二—一〇二オ—一〇二ウ。〈長〉もほぼ同文）、〈屋〉「御裁断遅タノ上、神輿ニ矢射立テ、神人宮司多ク射殺サル、衆徒アマタ被<sub>レ</sub>疵ヲケレバ、弥騒動シテ、大宮・二宮・講堂・中堂・惣ジテ諸堂一字モ不<sub>レ</sub>残焼払テ可<sub>レ</sub>交<sub>二</sub>山林之<sub>レ</sub>由<sub>一</sub>」（八三頁）、〈覚〉「山門には、神輿に箭立チ、神人・宮仕射殺され、衆徒おほく疵をかうぶりしかば、大宮・二宮以下、講堂・中堂すべて諸堂一字も残さず焼払て、山野にまじはるべき由」（上—一六〇頁。〈中〉もほぼ同文）等。〈四・闕・延・長・南・屋・覚・中〉は、いずれも大宮・二宮以下の七社や講堂・中堂諸堂を一字も残さず焼き払ってとするが、〈盛〉は、その前に「神輿ノ残四社ヲ奉振下」を挿入する。○悲哉、西光一人ガ姦邪ニ依テ、忽ニ円融十乘ノ教法ヲ亡ン事ヲ（盛）の独自本文。これまでの大衆の要求としては、国司師高の流罪、目代師経の禁獄であり（山門大衆奏状ヲ捧テ、国司師高ヲ被流罪、目代師経ヲ可<sub>レ</sub>被禁獄之由度々奏聞ニ及ケレ共、更ニ御裁許ナカリケリ）本全釈二一—八二頁、神輿に矢を射たのは重盛の郎等であった。ところがこの場面において、〈盛〉が突如、事件の責任者として西光をクローズアップしているのは不自然であろう。但し、『愚昧記』に「衆徒訴訟可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>裁許<sub>一</sub>之由、被<sub>レ</sub>仰座主、師隆（加賀守）・西光（父也）配流、又奉射神輿之者（国景郎等十人禁獄、徒七年之由云々）」（四月十五日条）とあるところをみると（西光配流は、三月二十日条によれば誤報であることがわ



かる）、早くから西光が罪を問われるという噂が貴族の間で流れていたらしい。円融十乗の教法は「天台円教の十乗観法をいう」（『例文仏教語大辞典』）。『玉葉』に引かれる「衆徒濫行問事」と題された四月十七日付けの座主宛御教書では、衆徒の濫行を非難しながらも、「何況叙念所帰、偏円宗之教法也、已忘衆徒凶惡、只思食一山安穩」（四月十七日条）の一節がある。衆徒の狼藉を批判しながらも、天台という宗教的權威の安穩を願うというのは、この時代に共有された感覚か。〈盛〉はこれを衆徒側の主張に転用している。○十五日勅定ヲ披露ノ為ニ僧綱等登山シケルヲ、衆徒瞋ヲ成テ水飲ニ下向テ追帰ス。

僧綱色ヲ失テ逃下 諸本はほぼ同じだが、〈闕〉は十九日のこととし、〈南・屋・覚・中〉は日付不記。また、僧綱等を追い返した地を水飲とするのは、〈盛〉のみ。〈南・屋・覚・中〉は「西坂本」とする。『玉葉』によれば、十五日曉方に院宣を受けた僧綱等が登山を企てたが、衆徒の怒りにあつて全員逃げ散り、帰参してこのことを報告している（「人告云、今曉依院宣、僧綱等企登山、衆徒大怒、皆以逐散、各逐電、帰参申此旨云々」四月十五日条）。また、加賀守師高の配流と、

# 【研究論文】

\* 衣川仁『僧兵 祈りと暴力の力』（講談社二〇一〇・11）

\* 高橋昌明『平清盛 福原の夢』（講談社二〇〇七・11）

## 師高流罪宣

1 廿日加賀守師高<sup>2</sup>解官、<sup>3</sup>尾張国流罪由被<sup>4</sup>宣下<sup>5</sup>。上卿ハ<sup>6</sup>権中納言忠親卿也。此宣旨ヲ以テ急登山シテ、山門ノ騒動ヲ可<sup>7</sup>鎮之由仰ケレ共、衆徒ノ蜂起ニ恐テ、登山セント云人ナシ。平大納言時忠卿、其時ハ中納言ニテ<sup>8</sup>御座ケルガ、本ヨリ心猛<sup>9</sup>ク勇ル人ニテ、乱ノ中ノ面目トヤ被<sup>10</sup>思ケン、侍十人花ヲ折テ<sup>11</sup>装束シ、雑色共人ニ至マデ。当色キセテ<sup>12</sup>出立給ヘリ。山上ニハ、「時忠登山アラバ、速ニモトバリヲ<sup>13</sup>切、湖水ニ

神輿を射た者の禁獄が賀茂祭の後に行なわれることが決定され、その旨が内々に座主明雲に告げられたので、昨夜は大衆が下向しなかったという（「又人告云、加賀守師高配流、奉射神輿之者可禁獄、件〔両イ〕事等、祭以後可被<sup>レ</sup>行之由、内々先被<sup>レ</sup>仰座主云々、因之去夜大衆不下向云々」同日条）。『愚昧記』にも同様の記事が見える（「衆徒訴訟可有裁許之由、被<sup>レ</sup>仰座主、師隆〔加賀守〕・西光〔父也〕配流、又奉射神輿之者因景郎等十人禁獄、徒七年之由云々、仍大衆和平、今夕可行幸閑院之由云々」四月十五日条）。先述のごとく、西光とあるのは誤報。師高等の配流・禁獄の決定を座主から伝え聞いた大衆等は、下洛を中止する一方で、院宣を受けた僧綱等を追い返していることになる。水飲は地名。〈校注盛〉「都側から叡山に登る雲母坂の頂」（1—133頁）。『叡岳要記』「延暦寺。在日本国近江国志賀郡比叡山。……四至。東限江際。南限富谷。西限下水飲。北限楞嚴院」（群書二四一五〇五頁）とあり、延暦寺結果の西限であった。永祚元年（九八九）の天台座主補任時には、勅使が水飲で追い返されている（永祚宣命事件。衣川仁二七頁）。

12 ハメヨ」ナンド僉議スト聞ケリ。時忠卿既ニ有「登山」<sup>13</sup> 実ニ衆徒ノ瞋レル<sup>14</sup> 気色、面ヲ<sup>15</sup> 向ベキ<sup>16</sup> 様ニ非。只今<sup>17</sup> 可レ会<sup>18</sup> 事体也ケレバ、<sup>19</sup> 供ニ有ツル<sup>20</sup> 侍モ雑色モ、大床ノ下御堂ノ陰ニ忍居タリ。時忠卿ハ少モ騒給ハズ、大講堂ノ庭ニ進出テ、懷中ヨリ矢立墨筆取出シテ、所司ヲ招視ニ水入、畳紙ニ一筆<sup>21</sup> 書テゾ<sup>22</sup> 給タリケル。所司状ヲ捧テ大衆ノ前ゴトニ披露ス。其詞ニ云、<sup>23</sup> 衆徒致<sup>24</sup> 濫惡<sup>25</sup> 者魔縁之所行、<sup>26</sup> 明王加<sup>27</sup> 制止<sup>28</sup> 者善逝<sup>29</sup> 之加護也」トゾ書タリケル。大衆<sup>30</sup> 各見<sup>31</sup> 之、理ナレバ<sup>32</sup> 不<sup>33</sup> 及<sup>34</sup> 引張<sup>35</sup>、<sup>36</sup> 還テ<sup>37</sup> 優ニ<sup>38</sup> 書レタル一筆カナト、称美<sup>39</sup> 讚嘆<sup>40</sup> 及、落涙スル衆徒モ多カリケリ。其後師高解官<sup>41</sup> 配流ノ宣旨ヲ<sup>42</sup> 取出テ披露アリ。

【校異】1〈近〉合点あり。行の冒頭に「もろたかるさいのせんノコト」と傍書。2〈近〉「けくはんし、〈蓬・静〉」解官。3〈近〉「おはりのくに、」とし、「」の右に「ヘイ」を異本注記。〈蓬〉「尾張国へ、」静「尾張国へ」。4〈近〉「しやうけいは、〈蓬〉」上卿は「静」「上卿は」。5〈近〉「ごんぢうなこん」。〈蓬・静〉右に「中山内大臣忠宗子」を傍記。なお、「権中納言」。6〈近〉「たゝちかのきやうなり、〈蓬〉」忠親卿也、〈静〉「忠親卿也」。7〈近・蓬・静〉「おはしけるか」。8〈近〉「さうそくし、〈蓬・静〉」装束し。9〈近〉「たうしよく、〈蓬〉」当色。10〈近〉「出た、せ給へり」。11〈近〉「きり、〈蓬・静〉」きれ。12〈近〉「はめにな」とし、「に」の右に「よ」を傍記。〈蓬・静〉「はめはめよなんと」。13〈近〉「まことに、〈蓬・静〉」実に。14〈近〉「けしき、〈蓬〉」気色。15〈近〉「むくへき、〈蓬・静〉」むかふへき。16〈近〉「やうも」。17〈近〉「ことにあふへき、〈蓬・静〉」事にあひぬへき。18〈蓬〉「共に、〈静〉」共。19〈蓬〉「侍とも」。20〈近〉「かいてそ、〈蓬〉」書てそ。21〈近〉「たうたりける」。22〈近〉「しゆとのらんあくをいたすは、〈蓬〉」衆徒致<sup>23</sup> 濫惡<sup>24</sup> 者、〈静〉「衆徒致<sup>25</sup> 濫惡<sup>26</sup> 者」。23〈近〉「みやうわうせいしをくはふるは、〈蓬〉」明王加<sup>27</sup> 制止<sup>28</sup> 者、〈静〉「明王加<sup>29</sup> 制止<sup>30</sup> 者」。24〈近〉「ぜんせいひの、〈静〉」善逝<sup>31</sup> 之。25〈近〉「ひつはるにをよはす、〈蓬〉」引張に及はす、〈静〉「引張にをよはす」。26〈近〉「かへつて、〈蓬〉」返て、〈静〉「返」。27〈蓬〉「書たる」、〈静〉「書たる」。28〈近〉「さんだんに」。29〈蓬〉「配流の」とし、最初の「配」に見せ消ち。30〈静〉「取出披露有」。

【注解】○廿日加賀守師高解官、尾張国流罪由被宣下。上卿ハ権中納言忠親卿也。〈四・闕・延・長・南・屋・覚・中〉はいずれも、先ず時忠が衆徒を慰撫するために叡山に登山し、殺氣立つ衆徒を制して下山、その上で二十日に師高等の処分が決定される。これに対し、〈盛〉のみが、二十日に処分を伝える院宣が出された後に、時忠がその院宣を帶し登山して、大衆を制止した上で宣旨を読み上げたとしている点が注目される。登山を院宣前とする諸本では、時忠は大衆の怒りを一旦は有めるものの、それが静まりがたいことを告げて、院に師高等

の処分を迫るという展開となる。詳細は以下の項目で述べる。『玉葉』安元三年四月二十日条は、「申刻大夫史隆職注送云」として次の宣旨を引く。

安元三年四月廿日宣旨（上卿別当）

加賀守藤原朝臣師高、宜解却見任、

仰外記、

加賀守藤原朝臣師高、仰諸司除名追位記、令配流尾張国、依奉射神輿、給獄所輩

平利家〈字平次〉、同家兼〈字平五〉、田使俊行〈字難〔波イ〕五郎〉、藤原道久〈字加藤太〉、同成直〈字阜尾十郎〉、同光景〈字新次郎〉、

已上被<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>官

と伝え、『愚昧記』も、「今日加賀守師隆配流尾張国」云々、是依<sup>高</sup>日吉訴也、又内府郎從六人禁獄<sup>平利家、同家兼、田使俊行、藤原道久、同成直、同光景</sup>云々、是依奉<sup>レ</sup>射神輿事也、此条大衆不<sup>レ</sup>及訴<sup>文事</sup>申、依<sup>レ</sup>恐神慮為<sup>レ</sup>解謝也、又内府進申請云々、今日上卿別当忠親卿結政請印（安元三年四月二十日条）と記す。四月二十日に、師高・師経らの配流が決定されたこと、上卿を忠親が務めたことは史実として確認できる。しかし、時忠の名は一切確認できない。注目すべきは、大衆が神輿を射た武士の処分を要求していないこと、それにもかかわらず重盛が「内府進申請」とあるように自ら郎等の処分を申請しているという二点である。山門側には、平氏との関係を悪化させる意思がなかったこと、平氏側も山門との関係を重視しての措置と考えてよからう。〈四・延・長〉はこの時の院宣と覚しき文書を引用、その中で〈四〉は「上卿別当忠親」（巻一一六二左）と記す。〈延〉「上卿別当忠親」（巻一一〇四ウ）とあるのは忠親の誤記と考えられる。〈闘・南・屋・覚・中〉は院宣を引用せず、本文中で〈南〉「同廿二日、花山院ノ權中納言忠親卿ニ仰テ、終ニ加賀守師高ヲ解官シテ尾張ノ伊土田ヘ流サル。弟近藤判官師経獄定セラル。又去十三日ニ神輿ヲ射奉ル所ノ武士八人、同禁獄セラレニキ。平利家、同家直、藤原ノ久通、同成直、同光景、俊行等ナリ。是ハ皆小松殿ノ家人也」（上一一四三頁）のように記す。日付を「廿二日」とするのは〈南・屋〉、〈覚・中〉は「廿日」とする。また、忠親の官職を

「權中納言」としているのは〈南・屋・覚〉、〈中〉は「中納言」とする。いずれも武士の人数を「六人」とするが、〈屋・中〉は具体的人名を欠く。〈闘〉は院宣発給記事を欠く。中山忠親は藤原北家師実流で、花山院流の祖家忠の子忠宗の三男。天承元年（一一三二）生、建久六年（一一九五）没。〈補任〉によれば、權中納言忠宗卿二男。母は參議家保卿女。長寛二年（一一六四）に參議正四位下、仁安四年（一一六九）に權中納言正三位に昇任、安元三年（一一七七）一月には右衛門督を兼任、檢非違使別当に任じられている。○此宣旨ヲ以テ急登山シテ 前述のとおり、時忠の登山を四月二十日の院宣以降とするのは〈盛〉のみ。ただし、〈延〉の場合、「院ヨリ衆徒ヲ為<sup>ニ</sup>被有<sup>一</sup>、大衆ノ鬱訴可達之由、為<sup>シテ</sup>勅使<sup>ト</sup>、可<sup>ト</sup>登山<sup>ヲ</sup>被<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>下ケレドモ、公卿ノ中ニモ殿上人ノ中ニモ、我<sup>レ</sup>上卿ニ立ント申人無シ。皆辞申ケル間」（巻一一〇二ウ）と、とりあえず大衆の憤りを宥めるために「大衆ノ鬱訴可達之由」を伝えさせようとしたとされ、大衆の騒動を鎮めた時忠が、「山門ノ訴訟可達之由ノ宣旨ヲ被<sup>レ</sup>披露ケル」（巻一一〇四オ）とあるので、時忠登山の時点ですでに山門の要求を呑む旨の決定がなされていたことになる。当然、大衆に示された宣旨には、師高兄弟の処断が触れられていたはずである。とすれば、大衆のもとから戻った時忠の進言を受けて法皇が下した裁断とは一体いかなるものであったのか、先の宣旨とどう違うのかが分かりづらい（四評釈）早川考察。三一〇一頁）。〈盛〉の形は、〈延〉に内在するこうした混乱を整理したものとも考えられようか。『玉葉』によれば、十四日には、後白河法皇は暗に神輿を射させた責任を認め、関係者を罪科に処す旨の院宣を発し（十六日条所引四月十四日付院宣）、さらに師高

の配流及び神輿を射た武士の禁獄を賀茂祭の後に行なう旨、内々に天台座主明雲に伝えている（「又人告云、加賀守師高配流、奉射神輿之者可禁獄、件〔両イ〕事等、祭以後可被行之由、内々先被仰座主云々」四月十五日条）。十五日には、前節のとおり、院宣を携えた僧綱らが追い返されているが、十六日付けで、あらためて「国司処流罪、下手官兵又可有罪」を告げる院宣を発給している（四月十七日条）。あるいは、〈延〉の記事はこうした動きを反映したとも言えるか。

○平大納言時忠卿、其時ハ中納言ニテ御座ケルガ 時忠のその時の官職を中納言とするのは〈四〉、左衛門督とするのは〈延・平・覚・中〉、中納言右衛門督とするのは〈長〉、右衛門督とするのは〈屋〉、〈闘〉は不記。安元三年（一一七七）四月時点では、正しくは従二位権中納言兼左衛門督。この年の正月に右衛門督から左衛門督へ転任、右衛門督にはおなじく権中納言であった忠親が就任、検非違使別当に任ぜられている。正三位権中納言であった時忠は、嘉応元年（一一六九）十二月の強訴の際に、比叡山との衝突に消極的であった武門平氏への後白河院の不满をぶつけられたようにして解官、出雲へ配流されるが（元木泰雄九五頁）、成親召還に反発した大衆の圧力によって翌嘉応二年二月六日に召還され、嘉応三年四月に権中納言に還任している。安元元年（一一七五）十二月に右衛門督に任ぜられ再び検非違使別当を兼任するが、翌二年七月に妹である建春門院が逝去すると、十二月に別当を辞している。治承三年（一一七九）一月に正二位に昇進、三度目の検非違使別当に任じられている。

○本ヨリ心猛ク勇ル人ニテ

〈盛〉の独自本文。松蘭斎は、時忠三度目の別当就任に着目し、「時忠をこわもての別当として有名にした、多くの強盗の手を切ったり獄囚

を数多く処刑したりしたことや『山槐記』治承三年五月十九日条・『百鍊抄』治承四年正月二十七日条など）、内裏の火災の際、平家の家人を動員して消火に奮闘し『山槐記』治承四年二月十四日条・『吉記』治承四年四月一日条）、さらに検非違使別当宣によって「京中在家」に「楯」を立ち並べさせ、内裏および京都の防衛体制を固めたことなど（『山槐記』治承四年十二月二日条、〔高橋二〇〇七〕、検非違使別当らしい行動はみなこの時期のことである」（三四九頁）と指摘する。また平藤幸は、「ここで着目したいのは、時忠が検非違使尉・検非違使佐を歴任しているという点である。この点は検非違使別当を三度務めたことに比べてあまり重要視されていないように思われる。しかし、尉・佐を経て別当になったという例もまた、検非違使庁創設以来初のことであった。このことは、時忠が後に別当として、自邸の門前で強盗十二人の手首を切断させたり、山科において獄囚十五人を斬首し、二十一人の手を切断させたりしたことに少なからず影響しているものと思われる。武士でないにもかかわらず、時忠のこのような剛勇かつ残酷な指揮のとり方は、かつて尉・佐として、実際に罪人の追捕や裁判の任務に当たっていた経験に基づくものではなかったかと思われる」（三〇頁）と、時忠の行動の背景を想定する。こういった時忠の人物像により、『平家物語』において、大衆を有めるために臆することなく叡山に向かわせる人物として取り上げられることになったのだろう。

○乱ノ中ノ面目トヤ被思ケン 〈延〉では「可登山之由被仰下ケレバ、時忠心中ニハ益無キ事哉ト被思」ケレドモ、君ノ仰難キ背<sub>上</sub>、多クノ人ノ中ニ思食入テ被仰下事、面目ト存テ」（巻一一一〇二ウ〜一〇三オ）と、院の命によって、無益なこととは思



ながらも「面目ト存テ」登山したとされる（〈長〉もほぼ同じ）。〈四〉「立上卿」<sup>二</sup>（巻一―一六一左。〈南・屋・覚・中〉もほぼ同じ）も、上卿に任じられての登山という点では一致する。〈闘〉では、公卿僉議の結果、時忠が上卿に選ばれたとする（依此<sup>三</sup>誰<sup>カ</sup>罷<sup>カ</sup>向山上<sup>ニ</sup>申<sup>ス</sup>含<sup>ム</sup>勅宣趣<sup>ヲ</sup>、可有<sup>ニ</sup>大衆<sup>ヲ</sup>、有<sup>ニ</sup>公卿僉議<sup>ヲ</sup>、人々多<sup>シ</sup>中<sup>ニ</sup>、平大納言時忠卿預<sup>リ</sup>清撰<sup>ニ</sup>、立上卿<sup>ニ</sup>一上―三六ウ―三七オ）。これに対して、〈盛〉では、特に指名を受けることもなく、宣旨伝達のために自ら進んで登山しているかに読める。そもそも、安元の強訴に際して時忠が叡山への使者として登山したという史実は、史料からは確認できない。「乱ノ中ノ面目」という表現は、〈延・長〉では、この後大衆に取り囲まれて従者が逃げ散った窮地の場面で「共ニ有ツル侍モ雑色モイツチカ行ヌラム、皆逃失ヌ。時忠危ク被思ケレドモ、本ヨリ猿人ニテ、乱ノ中ノ面目トヤ被思ケム、騒ガヌ体ニテ宣ケルハ」（巻一―一〇三ウ）と用いられている。当該表現が転用されたのであろう。○侍十人花ヲ折テ装束シ、雑色共人ニ至マデ当色キセテ出立給ヘリ「乱ノ中ノ面目」と受け止めた時忠の意気込みから、従者までも華やかに装束させたとする一節。〈延・長〉「殊ニキラメキテ出立給ヘリ。侍一人花ヲ折テ装束ス。雑色四人当色ニテ万ツ清ゲニテ登山シテ」（〈延〉巻一―一〇三オ。傍線部、〈長〉「十人」（一―一〇八頁）。〈四・闘・南・屋・覚・中〉には、供の侍・雑色の描写はない。〈延全注釈〉（巻一―一五八七頁）は、「花を折りかざすの意から来たもの」という池田亀鑑の指摘を受けて（五五八頁）、『貞丈雑記』「花を折と云詞は、人の衣装などの体其外出立のありさまを、はなやかに、にぎく敷する事をいふ也」（『改訂増補故実叢書』1―五八九頁）を引く。もともとは池田亀鑑が指摘

するように、実際に花を折りかざしていたものが、貞丈の時代には華やかに装う意となっていたものか。なお、花を折りかざした例としては、〈盛〉では一ノ谷の合戦に際し、梶原景季が梅の枝を簪に差し添えて出陣したエピソードが有名。当色は「公家の位階、職掌に相当する装束の色目・文様・地質を総称する。通常は位階によって制定された位色と同様に取り扱うのを普通とするが、狭義には行事奉仕の官人の職掌相当の特殊の装束・装身具の類をさしている。……『台記』久安六年（一一五〇）正月条に加冠扶持の当色に紫小袍とあり、『宗雅卿記』仁治二年（一二四一）正月条の加冠にも「内蔵頭顯氏朝臣着」当色「薄紫袍、面裏同色、無鰭袖帶同色也、従普通袍短」とあって、位色とは別に行事の際の特殊な任務相当の当色の装束の呼称を示している」（『国史大事典』）。ここでは「雑色」とあるので、位色ではなく、「職掌に相当する装束の色目・文様・地質」の意か。〈闘〉のみ時忠自身の装束も「紺葛袴、立烏帽子<sup>ニテ</sup>」（一上―三七オ）とする。○山上ニハ、「時忠登山アラバ、速ニモトギリヲ切、湖水ニハメヨ」ナンド僉議スト聞ケリ〈盛〉では時忠が登山するということを聞いて、大衆がこのように騒いで待ち構えたとしているのに対して、〈延・長〉は登山してきた時忠を見て大衆がいよいよ怒ったとして次のように記す。〈延〉「衆徒等時忠ヲ見テ弥嘖テ、「何故ニ時忠<sup>キ</sup>登山<sup>ノ</sup>ゾヤ、返々奇怪ナリ。既ニ山王大師ノ御敵ナリ。速ニ大衆中へ引入テ、シヤ冠ヲ打落シ、足手ヲ引張り本鳥切テ、湖ニ逆マニハメヨ」ト、音タニ匈リケルヲ聞テ」（巻一―一〇三オ―一〇三ウ）。〈四〉「講堂の庭に三塔会合<sup>シテ</sup>引張<sup>リ</sup>上卿<sup>ヲ</sup>可<sup>キ</sup>レ与<sup>フ</sup>恥辱<sup>ヲ</sup>之由有<sup>ニ</sup>義定披露<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>騒<sup>サワリ</sup>」（巻一―一六一左。他、〈闘・南・屋・覚・中〉も登山してきた時忠を前に、

大衆が僉議をしたとする点は〈延・長〉と同じ。時忠の登山に関しては、他本が師高配流の決定以前としているのに対し、〈盛〉のみ決定後とするなど、他本との違いが目立つ。なお、髻を切ることは、俗世との縁を絶ち出家することを示した。したがって、貴族や武士にとって髻を切られることはこの上ない屈辱であり、平生どおり世間と交われないこととなる。本全釈八—六四頁参照。○供ニ有ツル侍モ雑色モ、大床ノ下御堂ノ陰ニ忍居タリ 供の侍・雑色が逃げ散ったとするのは〈延・長〉も共通。〈延〉「其ニ有ツル侍モ雑色モイツチカ行ヌラム、皆逃失ヌ」（〈延〉巻一—一〇三ウ）。〈盛〉のみ「大床ノ下御堂ノ陰」に隠れたとする。この場合の大床とは広庇のことか。「ひろびさし（広庇）」に同じ」（日国大）。なお〈四・闕・南・屋・覚・中〉には供の描写はない。○時忠卿ハ少モ騷給ハズ、大講堂ノ庭ニ進出テ、懷中ヨリ矢立墨筆取出シテ、所司ヲ招硯ニ水入、疊紙ニ一筆書テゾ給タリケル。所司状ヲ捧テ大衆ノ前ゴトニ披露ス 時忠が少しも慌てずに、一書をしたためたとする点は諸本に共通、時忠が懷から小硯と疊紙を取り出すというのは〈闕・延・長・南・屋・覚・中〉に共通するが、硯や疊紙を時忠に渡した人物を、〈闕〉「小侍」、〈延〉「諸司」、〈長〉「承仕」、〈南・屋・覚・中〉は、特に誰を招き寄せることもなく、大衆、あるいは衆徒に疊紙を渡したとしている。一方、書状を捧げて大衆に披露したのを、〈盛〉は「所司」とするが、〈延〉は「諸司」とし、〈四・闕・長・南・屋・覚・中〉は、特に誰とも記さない。〈延〉「諸司此一筆ヲ捧テ、サシモドゞメク大衆ノ前毎ニ披露ス」（巻一—一〇四オ）。所司は、一般的には寺の俗事を担当した僧、諸司は役人。『殿曆』に「山諸司」の記述がある。「大衆使山諸司来」（康和四年五月七日条）、「為

隆（藤原）朝臣来云、山諸司参陽明門申云」（長治元年十月廿日条）、「山諸司并祇園諸司等来、大衆使也、座主事也」（永久元年八月二日条）などであり、大衆の使いとなって内裏や貴族の許にやってくる場合もあったようである。一方、『山槐記』に「院御所門前日吉杜司延曆寺所司三四十人許群立、是依内山事訴申」（永暦元年（一一六〇）九月二十七日）とあるが、この「延曆寺所司」と「山諸司」が同一のものなのかは不明。○衆徒致濫悪者魔縁之所行、明王加制止者善逝之加護也 時忠がしたためたとするこの文言は諸本共通。明王は、〈新定盛〉（一一—三六頁）や、〈延全注釈〉（一一五八頁）が記すように、後白河院のこと。後白河院が衆徒を制止したのは、延曆寺の本尊である薬師如来の加護によるものだとする。○大衆各見之……落涙スル衆徒モ多カリケリ 〈盛〉はここで、時忠の秀句に対する大衆の反応を描き、次節でそれを受けて時忠が院宣を披露し、その後改めて時忠に対する大衆の評価を記す。つまり大衆の反応が二箇所に分かれて記されていることになる。〈四・闕・延・長・南・屋・覚・中〉は前述のとおり、ここで時忠は帰洛し、その後二十日の院宣が示されるため、ここで大衆や人々の反応や評価がまとめて記される。時忠評の相違については次節「後ニ大衆口々ニ申ケルハ、哀、能ハイミジキ者カナ：」項参照。○其後師高解官配流ノ宣旨ヲ取出テ披露アリ 師高配流の宣旨を時忠が披露したとするのは〈盛〉のみ。〈延〉は、「山門ノ訴訟可達之由ノ宣旨ヲゾ被披露ケル」（巻一—一〇四オ）とする一方で、時忠が下山の後に、院のもとへ大衆の憤りを伝え、それによって配流の決定がなされたとする（先述）。その他の諸本では宣旨の提示はない。

## 【研究論文】

\* 池田亀鑑「花を折る」の追記」『物語文学Ⅱ』至文堂一九六九・6

\* 高橋昌明『平清盛 福原の夢』（講談社二〇〇七・11）

\* 平藤幸「平時忠伝考証」（国語と国文学七九卷九号、二〇〇二・9）

\* 松蘭斎「平時忠と信範——日記の家」と武門平氏」（元木泰雄編『保元・平治の乱と平氏の栄華』清文堂出版二〇一四・3）

\* 元木泰雄『平清盛の闘い——幻の中世国家』（角川書店二〇〇一・2）

今月十三日、<sup>1</sup>叡山衆徒、<sup>2</sup>昇<sup>3</sup>日古社感神院等之神輿、不憚<sup>4</sup>勅制<sup>5</sup>乱入陣中。爰警固之輩、相<sup>6</sup>禦凶党<sup>7</sup>之間、其矢誤中<sup>8</sup>神輿<sup>9</sup>事、雖<sup>10</sup>不<sup>11</sup>図何<sup>12</sup>不行<sup>13</sup>其科<sup>14</sup>。宜<sup>15</sup>仰<sup>16</sup>檢非遣使、召<sup>17</sup>平利家、<sup>18</sup>同家兼、藤原通久、同<sup>19</sup>成直、同<sup>20</sup>光景、<sup>21</sup>田使俊行等、<sup>22</sup>給<sup>23</sup>獄所上<sup>24</sup>者也。從五位上加賀守藤原<sup>25</sup>朝臣師高解官流罪尾張国、目代師經<sup>26</sup>流罪備後国、<sup>27</sup>奉<sup>28</sup>射神輿<sup>29</sup>官兵<sup>30</sup>七人禁獄事者、今日宣下<sup>31</sup>訖<sup>32</sup>以<sup>33</sup>此旨<sup>34</sup>可<sup>35</sup>令<sup>36</sup>披<sup>37</sup>露山上<sup>38</sup>給<sup>39</sup>之由所候也。<sup>40</sup>恐々謹言。

〔二五〕四月廿日 <sup>18</sup>権中納言藤原光能

<sup>19</sup>執当法眼御房ヘトゾ有ケル。

<sup>20</sup>追書云、<sup>21</sup>林獄官兵等之<sup>22</sup>父名<sup>23</sup>山上<sup>24</sup>定<sup>25</sup>令<sup>26</sup>不<sup>27</sup>審<sup>28</sup>候歟。仍内々委<sup>29</sup>相尋<sup>30</sup>尻付<sup>31</sup>父名一通、<sup>32</sup>所被<sup>33</sup>相副<sup>34</sup>候也。<sup>35</sup>平利家字平次、是ハ<sup>36</sup>薩摩

入道家季孫、<sup>37</sup>中務丞家資子、<sup>38</sup>同<sup>39</sup>家兼字平五、<sup>40</sup>故筑後入道家貞孫、<sup>41</sup>平田太郎家継子。<sup>42</sup>藤原通久字加藤太。同<sup>43</sup>成直字十郎、是ハ<sup>44</sup>右馬允

成高子。同<sup>45</sup>光景字新次郎、是ハ<sup>46</sup>前左衛門尉<sup>47</sup>忠清子。<sup>48</sup>成田兵衛尉為成。<sup>49</sup>田使俊行、<sup>50</sup>難波五郎<sup>51</sup>ト注シタリ。

衆徒取廻々々見之。事柄ヨカリケレバ、逃隠タリツル<sup>52</sup>侍モ難色モ、<sup>53</sup>此彼ヨリ出タリケリ。時<sup>54</sup>忠卿<sup>55</sup>則<sup>56</sup>下洛シテ<sup>57</sup>参内、事ノ次第一々ニ被<sup>58</sup>奏聞<sup>59</sup>ケリ。ユ、シクゾ聞エケル。後ニ大衆口々ニ申ケルハ、<sup>60</sup>哀<sup>61</sup>能<sup>62</sup>ハイミジキ者カナ、此時忠ガ五言四句ノ筆<sup>63</sup>スサミヲ以テ、<sup>64</sup>三千一山ノ憤ヲ平ゲツ、<sup>65</sup>難<sup>66</sup>逃<sup>67</sup>虎口ヲ通テ、見ルベキ身ノ恥ヲ<sup>68</sup>逃ヌルコソ有難ケレト<sup>69</sup>歎<sup>70</sup>感ジケリ。

【校異】 1 〈近〉「あいさんのしゅと」、〈逢〉「叡山衆徒」、〈静〉「叡山衆徒」。 2 〈逢〉「昇」。 3 〈近〉「ちかくせいを」。 4 〈近〉「ぢんぢうにらん」にうす、〈逢〉「乱入陣中」、〈静〉「乱入陣中」。 5 〈近〉「しんよを」、〈逢〉「静」に「神輿」。 6 〈近〉「よろしくげいしにおほせて」、〈逢〉「宜仰<sup>ニ</sup>檢非遣使」、〈静〉「宜仰<sup>ニ</sup>檢非遣使」。 7 〈近〉「おなしき」とし、「き」の右に「くイ」を異本注記。 8 〈近〉「しげなを」、〈逢・静〉「成直」。 9 〈近〉「でんしとしゆきを」、〈逢〉「田使俊行等」、〈静〉「田使俊行等」。 10 〈近〉「くくしよをたぶへきもの也」、〈逢〉「給<sup>タマフ</sup>獄所<sup>コクシヨ</sup>者也<sup>モノナリ</sup>」。 11 〈近〉「あそん」、〈逢〉「朝臣<sup>アソシン</sup>」。 12 〈近〉「るざいおはりのくに」、〈逢〉「流罪尾張国<sup>ルサイモク</sup>」、〈静〉「流罪尾張国<sup>ルサイモク</sup>」。 13 〈近〉

「るるいびごのくに」、〈蓬〉「流罪備後国」、〈静〉「流罪備後国」。14 〈近〉「しんよいたてまつる」。15 〈蓬・静〉「六人」。16 〈近〉「さんじやうにひろうせしめ給ふべきのよしこうするところなり」、〈蓬〉「可下令披露山上」給之由所候也、〈静〉「可下令披露山上」給上之由所候也。17 〈近〉「きようくきんげん」、〈蓬〉「恐々謹言」。18 〈近〉「こんぢうなごん」。19 〈近〉「しつたうほうげんの御ばうへとそ」、〈蓬〉「執当法眼御房へとそ」、〈静〉「執当法眼御房へとそ」。20 〈底・近・静〉以下「ト注シタリ」まで一字下げ。〈蓬〉は二字下げ。なお、〈近〉「をひがきに」、〈蓬・静〉「追書」。21 〈近〉「きんこくのくはんへいとうの」、〈蓬〉「禁獄官兵等之」、〈静〉「禁獄官兵等之」。22 〈近〉「さためてさんじやうふしんせしめ候が」。23 〈近〉「しりつけのけうみやう」、〈蓬・静〉「尻付交名」。24 〈近〉「あひそへられ候なり」、〈蓬〉「所被相副候也」、〈静〉「所被相副候也」。25 〈近〉「たいらのといへあざなはへいじ」、〈蓬〉「平利家字平次」、〈静〉「平利家字平次」。26 〈近〉「さつまのにうだういへすゑかまこ」、〈蓬〉「薩摩入道家季孫」、〈静〉「薩摩入道家季孫」。27 〈近〉「なかつかさのぜういへすけか子」、〈蓬〉「中務丞家資等」、〈静〉「中務丞家資子」。28 〈近〉「いへかぬあざなはへい五」、〈蓬〉「家兼字平五」、〈静〉「家兼字平五」。29 〈近〉「こちくこのにうだういへざたがまこ」、〈蓬〉「故筑後入道家貞孫」、〈静〉「故筑後入道家貞孫」。30 〈近〉「へいたのたらういへつぐか子」、〈蓬〉「平田太郎家継子」、〈静〉「平田太郎家継子」。31 〈近〉「ふちはらのみちひさあさなはかとうだ」、〈蓬〉「藤原通久字加藤太」。32 〈近〉「しけなをあさなは十郎」、〈蓬〉「成直字十郎」、〈静〉「成直字十郎」。33 〈近〉「うまのぜうしけたか子」、〈蓬〉「馬允成高子」、〈静〉「馬允成高子」。34 〈近〉「あざなはしん次郎」、〈蓬〉「成直字十郎」、〈静〉「成直字十郎」。35 〈近〉「たきよか子」、〈蓬〉「忠清子」。36 〈近〉「なりだのひやうゑのぜうためなり」、〈蓬〉「成田兵衛尉為成」、〈静〉「成田兵衛為成」とし、「兵衛」の後に補入符あり。右に「尉」を傍記。37 〈近〉「てんしとしゆき」、〈蓬〉「田使俊行」。38 〈近〉「なんばの五郎と」、〈蓬〉「難波五郎と」、〈静〉「難波五郎と」。39 〈近〉「これかれより」、〈蓬・静〉「こゝかしこより」。40 〈近〉「さんだいし」、〈蓬〉「参内」。41 〈蓬〉「能は」。42 〈蓬・静〉「ノ」なし。43 〈近〉「すきみを」とし、「み」の右に「ひい」を異本注記。44 〈近〉「ここうを」、〈蓬〉「虎の口を」、〈静〉「虎の口を」。45 〈近〉「のかれぬるこそ」、〈蓬〉「あかひぬるこそ」、〈静〉「あかひぬこそ」。46 〈蓬・静〉「感しける」。

【注解】○今月十三日、叡山衆徒、早日吉社感神院等之神輿… この

院宣文書を載せるのは〈盛〉の他は〈四・延・長〉。〈闕・南・屋・覚・中〉は文書を欠く。但し〈四・延・長〉は既述のとおり、時忠が叡山より帰洛した後に院宣が発せられる。〈四・延・長〉は、最初に〈盛〉には見られない発給の経緯を次のように記す。「従五位上加賀守藤原朝臣師高解官追位尾張国。職事頭右中弁兼左兵衛督光能朝臣仰。上卿別当忠雑仰。右少弁藤原光雅、仰左大史小槻澄職、令作官符。参

議平頼定卿、少納言藤原雅基等、御政御印官符。又仰云、檢非違使右衛門志中原重成、早配所可追遣者（〈延〉巻二—一〇四ウ—一〇五オ）。なお「職事頭右中弁兼左兵衛督光能」は〈四〉「職事頭の権中納言光能」（巻一—一六二左、〈長〉「職事権中納言光能」（一—一一〇頁）とし、「忠雑」は〈四・長〉「忠親」とし、「澄職」は〈四・長〉「隆職」とする。いずれも誤写によると考えられる。〈四評釈〉は安田次郎の教示によるとして、「外記方宣旨は、職事上卿↓外記のルートで作



成・発給されるから……この部分は、主に官符の作成過程が記されていることになる」(三十一〇四―一〇五頁)と指摘、〔考察〕において早川厚一は「その宣旨が、本来はそのまゝ一つのものではなく、宣旨・太政官符・光能書状の一部をとって作りあげられたもの」(二〇七頁)である可能性を指摘する。安藤淑江は、これを贋作とみるが(一六―一七頁)、上杉和彦が指摘するように、『玉葉』などの記録中に記された宣旨に付された注記を活用する形で再構成された文書(五四―五五頁)とみることができないのではないか。なお、五味文彦は、「この文書を自分の日記に記しそうな人物」(二四七頁。つまり『平家物語』作者が参照した可能性のある日記)として、「光能を最有力候補に、実定を第二の候補に絞ってみてよいか」(二四八頁)としている。なお、『今月十三日』以下は〈四・延・長・盛〉ともにほぼ同文。なお、感神院は祇園社。四月十三日の強訴時に、日吉社の神輿と共に祇園社や京極寺の神輿なども動座したことは、本全釈二二―五七頁「祇園〈三社〉」、北野、京極寺、末社ナレバ、賀茂川原ニ待受テ、力ヲ合テ振タリケリ」項参照。○不憚勅制乱入陣中「陣中」とは、「内裏の内部。近衛府が警衛を管轄する。陣」(〈日国大〉)。この時の内裏は閑院(早川厚一、二三頁)。閑院内裏の「陣中」は、「東は町小路、南は三条坊門小路、西は堀川小路、北は冷泉小路に囲まれた方九町とその領域の大路小路で構成されている」(野口孝子五頁)。但し、〈盛〉が大内裏を想定していたことについては、本全釈一二「神輿堀川猪熊ヲ過サセ給テ」の項(五九頁)参照。○宜仰檢非遣使、召平利家、同家兼、藤原通久、同成直、同光景、田使俊行等、給獄所者也「獄所」を〈延〉「禁獄」。平利家以下六名の氏名は〈四・延・長〉と同。こ

れに對し、〈闕・南・覚〉は院宣は載せないものの、禁獄される者の名を挙げる。〈南〉は「平利家、同家直、藤原ノ久通、同成直、同光景、俊行等ナリ。是ハ皆小松殿ノ家人也」(上―一四三頁)と微妙に異なり、〈覚〉は「左衛門尉藤原正純・右衛門尉正季・左衛門尉大江家兼・右衛門尉同家國・左兵衛尉清原康家・右兵衛尉同康友」(上―六一頁)と全くの別人名を記す。六名の考証については後項参照。

○從五位上加賀守藤原朝臣師高解官流罪尾張國、目代師經流罪備後國、奉射神輿官兵七人禁獄事者、今日宣下訖 目代師經の備後国流罪の件を記すのは〈盛〉のみ。先に引いた『玉葉』所収の宣旨にも見えないことから、〈盛〉の増補と考えられる。また、官兵を七名と記すのは底本および〈近〉(校異15参照)。〈逢・静〉および〈四・延・長・南・屋・覚・中〉は六名。ここで氏名が列挙されるのは六名。但し、追書では七名の氏名が記されるため、ここでも「七名」とする本文が生じたか。なお、武士八名の処分については、大衆の求めるところではなく、神慮を恐れての重盛の自発的行為であつたらしい(『愚昧記』平利家・同家兼・田使俊行・藤原通久・同成直・同光景)。「又内府郎從六人禁獄云々、是依奉射神輿事也、此条大衆不及訴申、依恐神慮為解謝也、又内府進申請云々」四月二十日条。なお、「廿日加賀守師高解官」の項を引いた『玉葉』四月二十日条の宣旨参照。○以此旨可令披露山上給之由所候也「此旨」すなわち、処罰を命じた院宣が発せられたという状況を、山上の大衆たちに知らせるためであるということ。〈四〉「件の間の事二通遣ス之を以て此の旨を可令披露山上之由所候」(卷一―六三左、〈延・長〉も同文)。なお、配流などの処分は正式には太政官符で発令される。以下に示す、建永元年(一二〇六)九月十八日太政官符(『三長記』同日条)は式部省

に宛てて官人としての「除名」措置を命じたものである。

太政官符 式部省

応除名造東大寺長官参議正三位行左大弁兼勘解由長官備前権守藤原朝臣公定事

右、從二位行権中納言藤原朝臣資実宣、奉 勅、件公定坐事配流佐渡国、仍除名如件者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

修理東大寺大仏長官正五位下行兼主殿頭左大史但馬権介小槻宿祢

右少弁正五位下藤原朝臣

建永元年九月十八日

この他、配流先に至る路次の国々にはそれぞれ対応を命じる官符が出される。院宣はそのような措置が執られたことを山門大衆らに連絡するという趣旨のものである。○権中納言藤原光能〈延・長〉

同、〈四〉「権中納言藤原光雅」〔「光能」の誤りか〕。光能は、父は民部少輔從五位上忠成。承安元年（一一七二）右中將となり、安元二年（一一七六）藏人頭に任ぜられ、事件当時は頭右中將。この後、治承三年（一一七九）に参議となり右兵衛督を兼ねるが、解官され、治承五年（一一八一）に還任、養和二年（一一八二）に左兵衛督となり翌寿永二年（一一八三）に没している。神興入洛事件を受けた四月十三日・十四日には光能が院からの伝達を務めていることが『玉葉』によって確認できる（四月十八日条「報状云、十三日、神興事出来之後、光能朝臣問諸卿」「曰イ」于時実定・定房・実国・忠親・雅頼・実家・実守候殿上ニ…、同二十日条「去十四日、光能朝臣為院御使申二関白云云…」）。一方でこの時権中納言であったのは中山忠親であり、〈延全注釈〉は、「光能は権中納言になっておらず、ここは忠親の誤り」（巻

（四）

一一五九六頁）とする。〈四・延・長〉のみに見られた宣旨の冒頭部分（前掲「今月十三日、叡山衆徒、昇日吉杜感神院等之神興…」項参照）では、〈延〉「職事頭右中弁兼左兵衛督光能朝臣仰ス、上卿別当忠雅（引用者注、「親」の誤、仰ス、右少弁藤原光雅仰<sup>テ</sup>…）」（巻一一〇四ウ）、〈長〉「職事権中納言光能、仰上卿別当忠親、忠親、右少弁藤原光雅仰<sup>テ</sup>…」（1111頁）（四）も同様）とあるように、職事が光能、上卿別当が忠親とされていた（ここで光能が「権中納言」と誤れることにについて、〈延全注釈〉は、「権中納言」は、次に記される上卿の忠親（当時権中納言・右衛門督）と混同したものであろう」（1159三頁）と指摘する）。前掲のように『玉葉』所引の院宣では「安元三年四月廿日宣旨〔上卿別当〕とあるように、ここには上卿別当で権中納言の「忠親」の名があるべきところ。○執当法眼御房〈四・延・長〉同。「山門の執当<sup>しやうたう</sup>の法眼のことである」（五味文彦一四七頁）。執当は「延暦寺の役職。諸堂の管理、諸役の補任のことをつかさどり、三綱が輪番で務めた」（日国大）。四月十四日、十六日の二つの宣旨が天台座主宛であるのに対し、処分決定を傳達するこの院宣は、こうした院宣の慣例に習い執当宛てに発給されていることになる。○追書〈延全注釈〉は「私文書に発達した形式であるが、十二世紀になって繪旨・院宣などが私文書と同一の形式をとって行なわれるようになった。これに習って公文書にも広くこの書式が用いられるに至った。以下の追書は、文面によれば、禁獄された武士達の名前・素姓などを山門に対して明らかにするために加えたもの」（1159六頁）と説明する。〈長〉は「追申」（11111頁）とする。〈四〉は追書の説明を欠き、武士の名および出自のみを記す。○平利家字平次、是ハ薩摩入道家孫孫、

中務丞家資子 『玉葉』では「平利家<sub>字</sub>平次」。(四)「平利家<sub>字</sub>平次、

薩摩入道家康<sub>子</sub>孫、中務丞家資<sub>子</sub>也」(巻一―一六四右)、〈延〉「平俊家<sub>字</sub>平次、是ハ薩摩入道家季孫、中務丞家資子」(巻一―一〇五ウ)、〈長〉「平利家<sub>字</sub>平次、是者薩摩入道家季孫、中務丞家資子」(1―1―1頁)。

『尊卑分脈脱漏』(続群書五上―一三五頁)によれば、薩摩入道家季の孫、中務丞家資の子。また祖父家季は、『平家物語』で平家の家人として活躍が描かれる家貞(本全釈一―一七頁「爰ニ忠盛朝臣ノ郎等ニ進三郎大夫季房子、左兵衛尉平家貞ト云者アリ」)項、六一三頁「筑後守家貞」項参照)の弟に当たる。高橋昌明①は、かつて平家の「一門の構成員であつたものの子孫で、早く家人化した存在」の代表として、「筑後守平家貞とその子平田入道家継・肥後守貞能・中務丞家実の兄弟、あるいは家貞の弟薩摩入道家季とその子薩摩中務丞家資らである」(一五―一頁)とする。平利家の父家資は北伊勢に拠点を有していたが、元暦元年(一一八四)七月に勃発した乱に参加し、合戦後は逃亡し、建久六年(一一九五)三月の東大寺再建供養の際、頼朝の命を狙って捕らえられ、六条河原で斬られている(川合康三八―一頁)。

○同家兼<sub>字</sub>平五、故筑後入道家貞孫、平田太郎家継子 『玉葉』では「同家兼<sub>字</sub>平五」。(四)「同家兼<sub>字</sub>平五、故筑前入道家貞孫<sub>子</sub>也」(巻一―一六四右)、〈延・長〉「同家兼<sub>字</sub>平五、故筑前入道家貞孫、平内太郎家継子」(〈延〉巻一―一〇五ウ―一〇六オ)。祖父家貞については前項参照。父家継は『平家物語』ではいわゆる「三日平氏」で蜂起する場面に登場する。〈延〉「貞能が兄平田入道ヲ大將軍トシテ、五百余騎ニテ近江国篠原ノ辺ニ打出テ」(巻十一―五八ウ)。「平田入道」が家継のこと。〈盛〉では「平田四郎貞継法師ト云者アリ。是ハ平家

ノ侍肥後守貞能ガ弟也」(六一―一八頁)とする。○藤原通久<sub>字</sub>加藤

太 『玉葉』では「藤原道久<sub>字</sub>加藤太」。(四)「同通<sub>字</sub>久<sub>字</sub>加藤太」(巻一―一六四右)、〈延・長〉「藤原通久<sub>字</sub>加藤太」(〈延〉巻一―一〇六オ)。高橋昌明②は、「字を加藤太というから、白河院政期に忠盛の郎等であつた加藤成家の子孫であろうか」(『古事談』巻一―一八二)(二二―一頁)とする。『古事談』一一八一「白川法皇、殺生禁断の時、加藤大夫成家、厳制に拘らず、鷹を仕る由聞し食して…成家は刑部卿殿(引用者注、忠盛)の相伝の家人に候ふ」(新大系一〇〇―一〇一頁)。なお、川合康は、通久は、同じ伊勢の加藤氏一族でも、伊豆での挙兵段階から頼朝に付き従つて活躍した加藤五景員とは別の家ということになるとする(三八二―三八三頁)。

○同成直<sub>字</sub>十郎、是ハ右馬允成高子 『玉葉』では「同成直<sub>字</sub>早尾十郎」。(四)「同成直<sub>字</sub>早尾十郎馬允成高子也」(巻一―一六四右)、〈延〉「同成直<sub>字</sub>早尾十郎、馬允成高子」(巻一―一〇六オ)、〈長〉「同成直、早尾十郎、右馬允成高子」(1―1―2頁)。川合康によれば、早尾という地名は尾張国海西郡にあり、木曾川下流左岸に位置し、美濃・伊勢との国境近隣にあることから、早尾十郎成直も伊勢平氏と関わる存在であつた可能性は高いとする(三八三頁)。

○同光景<sub>字</sub>新次郎、是ハ前左衛門尉忠清子 『玉葉』では「同光景<sub>字</sub>新次郎」。(四)「同光景<sub>字</sub>新次郎、前左衛門尉忠清子也」(巻一―一六四右)、〈延・長〉「同光景<sub>字</sub>新次郎、前左衛門尉忠清子」(〈延〉巻一―一〇六オ)。父藤原(伊藤)忠清は上総介「伊藤五」の呼称で知られる。伊藤氏は早くから平家に仕えた家人の代表であり(高橋昌明①一五〇頁)、忠清は『平家物語』でもこの後しばしば登場する。巻二十三・朝敵追討例「参川守知度ハ入道ノ乙子

也。侍ニハ上総守忠清ヲ始トシテ、伊藤有官無官、惣而五万余騎トゾ聞エケル」（三二—三九六頁）。なお、父の忠清は、閑院内裏の左衛門陣の警固を指揮していた（川合康三八三頁）。○成田兵衛尉為成『玉葉』には記載のない氏名。〈四・延・長〉の追書にもこの氏名は記載されない。この人物が追加されたために、先の院宣が「官兵七人」とされたか。次節「京中焼失」で、出火の原因を説く〈盛〉の独自記事の中に為成の名が挙がる。○田使俊行、難波五郎『玉葉』では「田使俊行〈字難波イ〉五郎」。〈四〉「田使俊行〈権並五郎是也〉」（巻一—六四右）。〈四評釈〉は「難」と「権」、「波」と「並」の誤り」（三—一〇六—一〇七頁）と指摘する。〈延・長〉「田使俊行難波五郎」（〈延〉巻一—一〇四頁）。高橋昌明②は、「備前を本拠にする平家家人難波経遠の縁者だろう」（二〇—一頁）とし、川合康は、「難波氏は、十二世紀初頭以来、平正盛・忠盛がたびたび備前守に任じられ、瀬戸内海の手賊追討を行うなかで、組織された家人の代表的存在である」（三八四頁）とする。○衆徒取廻々々見之。事柄ヨカリケレバ、逃隠タリツル侍モ雑色モ、此彼ヨリ出タリケリ こうした侍・雑色の姿にまで注目するのは他に〈延・長〉のみ。〈盛〉では、二十日の裁断の院宣に対する衆徒の反応のように読めるが、〈延〉では時忠の披露した院宣（前段参照）に対する反応として読める。「其時こそ、其ナリツル者共モ事ガラヨゲニ見エケレバ、コ、カシコヨリ出来テ、主ヲモテナシ奉ケレ」（巻一—一〇四オ）。また〈長〉では時忠の秀句を受けて次のように記す。「其時、逃かくれたりつる侍、雑色、こゝかしこの荊蕀の中より出来て、主をもてなしかしづきて下向す。於呼びれてぞ見えける」（一—一〇九頁）。諸本の異同については後掲「後ニ大衆口々ニ申ケル

ハ、「哀、能ハイミジキ者カナ：」項も参照。○時忠卿則下洛シテ参内、事ノ次第第一々ニ被奏聞ケリ。ユ、シクゾ聞エケル この場面の時忠を、〈盛〉は、大衆をすっかり納得させて悠然と帰参した姿として描写する。他の諸本は既述のとおり、時忠の帰洛後に院宣が発給されるので、時忠の帰洛、奏聞の場面は、院宣の前に描かれる。〈南〉「則参内シテ此由ヲ奏聞セラレケル。ユ、シクゾ聞ヘシ」（上—一四二頁）。これに対し、〈延〉は、「院ノ御所ヘ被参タリケレバ、『サテモ衆徒ノ所行ハ何ニ』ト、不取敢御尋アリケリ。時忠、『大方兎モ角モ申ニ不及候、只山王大師ノ助サセ給タルトバカリ存テ、匍々逃下テ候。忝可有御裁報候』ト被奏聞ケレバ」（巻一—一〇四ウ）と、なんとか大衆を鎮めながらも、なおその憤りに内心おびえながら匍々の体で帰参した姿として描き、時忠の切迫した言葉が師高等の処分を決断を院に促す大きな要因となったとする。同様の結構を取るのには〈長〉。〈四・南〉の場合は、時忠の報告を院はうるさく思うが、時忠の説得に理解を示した山門の大衆の様子を人々が賞賛して、進言した結果、師高等の処分が決まったとする（〈四〉「以外ノ嘍被ニ思食人々被仰山門衆徒喧計と思知レ理争可キと無御裁許被レ申」巻一—一六二右。次項も参照）。〈屋・覚・中〉は、時忠の帰参後の報告を記さないで、院宣との関係は記されない。○後ニ大衆口々ニ申ケルハ、「哀、能ハイミジキ者カナ：」（〈盛〉は時忠に対する大衆の評価を、前段と本段と、二つに分けて記している（前節「大衆各見之……落涙スル衆徒モ多カリケリ」項参照）。これに対して〈四・闕・延・長・南・屋・覚・中〉は、時忠によって二十日の院宣が披露されるわけではないので、前節の最後で大衆の時忠に対する評価が記されている。時忠



の秀句に対する大衆あるいは人々の評価について、前節と併せて諸本と比較すると、〈盛〉に最も近いのが〈延〉である。以下、〈延〉との比較を中心に、諸本の差異について見てみる。まず秀句を受けて、〈延〉或ル大衆是ヲ見テ、「面白クモ被書タル一筆哉」トテ、ハラ／＼トゾ泣ケル。大衆面々ニ、「現ニ面白書タリ」ト感ジ合テ、時忠ヲ引張ニ不及、静リニケリ。(二〇四オ)

〈盛〉大衆各見之、理ナレバ不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>引張<sub>一</sub>、還テ「優ニ書レタル一筆カナ」ト、称美讃嘆ニ及、落涙スル衆徒モ多カリケリ。(一―二六四頁)

と、大衆の感涙と、時忠を引き張るに及ばなかったことを記す。他はそれぞれ小異がある。〈四〉「大衆流<sub>シテ</sub>感涙<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>恥辱<sub>一</sub>」ト谷々<sub>ヘ</sub>入<sub>ヌ</sub>坊々<sub>ニ</sub>(卷一上―三七オ、〈屋〉もこれに近い)。〈長〉「大衆是を見て、をの／＼興に入て、あちとりこちとり見てかんじあへり。老僧どもは、うちなきなどして、おびたくしかりつる大衆のけいきも、すこししづまりければ、そのまぎれに、中納言、にげくだり給けり」(一―一〇九頁)。〈南・覚〉「大衆此上ハ引張ルニ及バズ、尤々ト同ジテ谷谷ヘ下リ、坊々ヘゾ入ニケル」(〈南〉上―一四三頁)。〈中〉「大衆これをかんじて、をの／＼たに／＼にくだり、はう／＼へぞ人にする」(上―一六四頁)。〈闘・南・屋・覚・中〉は大衆の落涙を記さず、大衆が谷々坊々へ去っていったことを記す。次いで時忠により〈延〉は「山門ノ訴訟可達之由ノ宣旨」(卷一―一〇四オ)、〈盛〉は裁断の宣旨が披露されると、隠れていた雑色達が姿を現す。

〈延〉其時コソ共ナリツル者共モ、事ガラヨゲニ見エケレバ、コ、カシコヨリ出来テ、主ヲモテナシ奉ケレ。(卷一―一〇四オ)

〈盛〉衆徒取廻<sub>ちまはし</sub>々々見<sub>レ</sub>之。事柄ヨカリケレバ、逃隠タリツル侍モ雑色モ、此彼ヨリ出タリケリ。(一―二六五―二六六頁)

これを記すのは他に〈長〉のみである(前掲「衆徒取廻々々見之。事柄ヨカリケレバ、逃隠タリツル侍モ雑色モ、此彼ヨリ出タリケリ」項参照)。そして、総括として時忠評が語られる(ただし〈盛〉は先に時忠の帰洛を記す)。

〈延〉時忠一紙一句ヲ以テ三塔三千ノ衆徒ノ憤リヲ休メ、虎口ヲ遁レケルコソ難有ケレ。山上洛中ノ人々感ジアヘル事限リナシ。(二〇四オ) 〔盛〕後ニ大衆口々ニ申ケルハ、「哀、能ハイミジキ者カナ、此時忠ガ五言四句ノ筆ノスサミヲ以テ、三千一山ノ憤ヲ平ゲツ、難<sub>レ</sub>逃虎口ヲ遁テ、見ルベキ身ノ恥ヲ逃ヌルコソ有難ケレ」ト感ジケリ。(一―二六六頁)

大衆が評価したとする〈盛〉に対して、〈延〉は語り手の感慨として記し、さらに「山上洛中人々」が感嘆したとする。〈四・闘〉も〈延〉にやや近く「凡<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>一紙一句の書を己<sub>ニ</sub>慰<sub>メ</sub>三塔三千<sub>の</sub>憤<sub>一</sub>、雪<sub>キ</sub>公私<sub>の</sub>恥<sub>通<sub>二</sub>虎口<sub>一</sub>の難<sub>ニ</sub>ト向<sub>ス</sub>」山上洛中の人皆驚<sub>シ</sub>耳目莫<sub>シ</sub>不<sub>レ</sub>感歎<sub>一</sub>」(四卷一―一六二右)とする。〈長〉「一紙一句をもて、三塔三千人の愁をやすめ、洛中山上の乱をしづむるのみにあらず、とらのくちをのがれ、公私の恥をきよむる、ありがたかりける事なり」(一―一〇九―一一〇頁)。〈南・屋・覚〉は「虎口の難」がなく、「一紙一句をもつて、三塔三千の憤をやすめ、公私の恥をのがれ給へる時忠卿こそゆゝしけれ」(〈覚〉上―一六一頁)とし、〈中〉は「一字一句のこと葉をもて、三たう三千のいきどをりをやすめ、たうざのなんをのがれて、ちよくしのせつをまたくしける、時忠卿こそやさしけれ。山上らく中じ</sub>

ばくをおどろかさずといふ事なし」（上―六四頁）とする。ここで〈盛〉の独自の表現として「見ルベキ身ノ恥ヲ逃ヌル」がある。本来受けるはずであった恥を秀句により免れたということで、〈四・闘・長・南・屋・覚〉の「公私の恥をのがれる」に近いだろう。以上比較してきたように、表現に違いがあるとはいえ〈盛〉の内容は〈延〉に近い。すなわち、〈延〉

の院宣を入れ替えると〈盛〉に近い形になると言えるだろう。また、〈四・延・長・南・覚〉は、この後さらに、『山門ノ衆徒ハ発向ノ喧シキ計リ歟トコソ存ツレ。理ヲモ知タリケルニコソ。争カ御成敗無ルベキ』ナド各申合ケリ」（〈延〉巻二―一〇四オ）といった、人々が衆徒を評価する一文があるが、〈盛〉にはこれに該当するものはない。

# 【研究論文】

\* 安藤淑江「延慶本平家物語の「宣旨」について―延慶本平家物語成立論のために―」（名古屋大学国語国文学四七号、一九八〇・12）

\* 上杉和彦「延慶本平家物語所収文書をめぐって―宣旨を中心に―」（軍記と語り物三一号、一九九五・3）

\* 川合康『鎌倉幕府成立史の研究』（校倉書房二〇〇四・10）

\* 五味文彦『平家物語、史と説話』（平凡社一九八七・11）

\* 高橋昌明①「平氏家人と源平合戦―譜代相伝の家人を中心として―」（軍記と語り物三八号、二〇〇二・3。『平家と六波羅幕府』東京大学出版会二〇一三・2再録。引用は後者による）

\* 高橋昌明②「嘉応・安元の延暦寺強訴について―後白河院権力・平家および延暦寺大衆―」（『延暦寺と中世社会』法蔵館二〇〇四・6。『平家と六波羅幕府』東京大学出版会二〇一三・2再録。引用は後者による）

\* 野口孝子「閑院内裏の空間領域―領域と諸門の機能―」（日本歴史六七四号、二〇〇四・7）

\* 早川厚一「『平家物語』の成立―鹿谷事件と二条・高倉両帝の造形について―」（名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）二四巻1号、一九八七・6。『平家物語を読む』和泉書院二〇〇〇・3再録。引用は後者による）

<sup>1</sup> 昔大國<sup>きこく</sup>二魏文帝<sup>ぎへい</sup>ト云御門<sup>みかど</sup>二御座<sup>みま</sup>ケリ。其<sup>その</sup>弟<sup>あとう</sup>二陳思王<sup>ちんし</sup>ト云<sup>い</sup>人アリ。<sup>5</sup> 同母<sup>どうぼ</sup>ノ兄弟<sup>けいだい</sup>ニテ、蘭菊<sup>らんきく</sup>ノ契<sup>ちぎ</sup>深<sup>ふか</sup>カルベカリケルニ、何事<sup>なにこと</sup>ノ<sup>6</sup> 隔<sup>へき</sup>有<sup>あ</sup>ケルヤラン、兄<sup>あに</sup>ノ文帝<sup>へい</sup>、陳思王<sup>ちんし</sup>ヲ<sup>7</sup> 惡<sup>にく</sup>テ殺<sup>ころ</sup>サント思<sup>おも</sup>ツ、<sup>8</sup> 弟<sup>あとう</sup>ヲ前<sup>まへ</sup>ニ呼<sup>よび</sup>居<sup>すま</sup>テ云ケルハ、「汝<sup>なんぢ</sup>七步<sup>しちふ</sup>ガ間<sup>ま</sup>ニ詩<sup>うた</sup>ヲ造<sup>つく</sup>、不<sup>ふ</sup>然<sup>しか</sup>者<sup>もの</sup>速<sup>はや</sup>ニ汝<sup>なんぢ</sup>ヲ可<sup>べ</sup>殺<sup>ころ</sup>」ト聞<sup>きこ</sup>ニ<sup>三六</sup>エケレバ、陳思<sup>ちんし</sup>死<sup>し</sup>ヲ逃<sup>のが</sup>シガ為<sup>ため</sup>ニ、文帝<sup>へい</sup>ノ前<sup>まへ</sup>ヲ立<sup>た</sup>テ七步<sup>しちふ</sup>シケル間<sup>ま</sup>ニ、「煮<sup>ゆ</sup>豆<sup>まめ</sup>燃<sup>も</sup>二豆<sup>まめ</sup>箕<sup>こ</sup>」。<sup>10</sup> 豆<sup>まめ</sup>在<sup>あ</sup>二釜<sup>かま</sup>中<sup>ちゆう</sup>ニ泣<sup>なみ</sup>。<sup>11</sup> 本<sup>ほん</sup>是同<sup>どう</sup>根<sup>こん</sup>生<sup>せい</sup>。<sup>12</sup> 相<sup>あひ</sup>煎<sup>せん</sup>何<sup>なん</sup>太<sup>た</sup>急<sup>きふ</sup>」ト<sup>13</sup>云<sup>い</sup>タリケレバ、文帝<sup>へい</sup>感<sup>かん</sup>レ之<sup>これ</sup>弟<sup>あとう</sup>ヲ許<sup>ゆる</sup>シ、厚<sup>あつ</sup>断<sup>だん</sup>金<sup>きん</sup>兄弟<sup>けいだい</sup>ノ<sup>16</sup> 昵<sup>なじ</sup>ヲ成<sup>な</sup>ケリ。是<sup>こ</sup>ヲ<sup>17</sup>七步<sup>しちふ</sup>ノオトイヘリ。陳思王<sup>ちんし</sup>ハ七步<sup>しちふ</sup>ノ詩<sup>うた</sup>ヲ造<sup>つく</sup>テ一<sup>18</sup>生<sup>せい</sup>ノ命<sup>いのち</sup>ヲ助<sup>たす</sup>ケ、時<sup>とき</sup>忠<sup>ちゆう</sup>卿<sup>けい</sup>ハ兩<sup>りやう</sup>句<sup>く</sup>ノ<sup>19</sup> 筆<sup>ひつ</sup>ニ依<sup>よ</sup>テ二<sup>20</sup>千<sup>せん</sup>ノ恥<sup>ち</sup>ヲ逃<sup>のが</sup>タリ。誠<sup>まこと</sup>ニ時<sup>とき</sup>ノ災<sup>さい</sup>ヲマヌカル、事<sup>こと</sup>、共<sup>とも</sup>能<sup>よ</sup>二過<sup>す</sup>タルハナカリケリ。

【校異】 1 〈底・近・逢・静〉以下「芸能ニ過タルハナカリケリ」まで一字下げ。2 〈近〉「おはしけり」〈逢〉「御座ケリ」。3 〈近〉「おとうとに」〈逢・静〉「弟」。4 〈近〉「人そ」。5 〈近〉「おなしはゝの」。なお、〈近〉「はゝ」(字母「波」)の右に「はゝイ」(字母「者」)を異本注記。〈逢・静〉「同母の」。6 〈近〉「へたて」〈逢・静〉「隔ての」。7 〈近〉「にくんて」〈逢・静〉「にくみて」。8 〈近〉「おとうとを」〈逢・静〉「弟を」。9 〈近〉「とうをにるにとうsきをたく」〈逢〉「煮豆燃豆其」。10 〈近〉「とうふちうにあつてきうす」〈逢〉「豆在釜中泣」〈静〉「豆在釜中泣」。11 〈近〉「もとはこれとうこんしやう」〈逢・静〉「本是同根生」。12 〈近〉「さうせん」〈逢・静〉「相煎」。13 〈近〉「いひたりければ」〈逢・静〉「いひたりければ」。〈底〉「云タリケレ」を改める。14 〈近〉「おとうとを」〈逢・静〉「弟を」。15 〈近〉「こんていの」。16 〈近〉「むつびを」〈逢〉「昵を」〈静〉「昵を」。17 〈逢〉「七歩才を」。18 〈近〉「めいを」〈逢〉「命を」。19 〈近〉「ぶてに」。20 〈逢〉「通たり」〈静〉「通れたり」。

【注解】 ○昔大國ニ魏文帝ト云御門御座ケリ… この節、「誠ニ時ノ災ヲマヌカル、事、芸能ニ過タルハナカリケリ」とあるように、前節の時忠の逸話を受けて、危機を才芸により切り抜けた故事として、曹植の「七歩の才」を一字下げで引く。当話は、〈盛〉の独自異文。「七歩の才」の故事は早くは『世説新語』第四「文学」に見られ、その後『文選』卷六十「齊竟陵文宣王行狀一首」の李善注、『初学記』卷十「帝戚」、『蒙求』下「陳思七歩」、『太平御覽』卷八四一「百穀部」なども『世説曰』としてこれを引き、広く知られた(遠藤光正)。他にも『太平御覽』卷六〇〇「文部」十六「思疾」も「魏志曰」としてこれを引き(ただし、『三国志』及びその裴松之注にそうした記載は見つからない)、『古今事文類聚・後集』卷八「人倫部・兄弟」もこの故事を載せる。日本でも早く『世俗諺文』「七歩才」などに引かれる他、『十訓抄』六ノ十五、『鑑囊抄』卷十一「一」などに見える。牛尾久美子は、〈盛〉の直接の典拠となったのは、古注『蒙求』ではないかとする(三七頁)。そこで以下、『蒙求』については古注諸本も参照して比較する。古注『蒙求』の本文は、『蒙求古註集成』(池田利夫編、汲古書院所引)に収載の①心安頃刊五

山版(上―五〇九頁)、②国会図書館蔵大永五年書写本(中―一四三頁)、③龜田鵬斎校「旧注蒙求」(中―四九九頁)、④細合方明校「韓本蒙求」刊本(下―二三九頁)、⑤林述斎校「古本蒙求」刊本(下―五三〇頁)に拠り(以下の注解では、①⑤の番号で記す)、新注『蒙求』は同書に収載の文禄五年刊「徐狀元補註蒙求」(別巻―五九三頁)に拠った。なお、魏文帝は、曹丕(一八七―二三六)。父曹操の死後に魏王を継ぎ、更に同年、禅譲により魏の皇帝(文帝)となった。○陳思王 曹植(一九二―二三三)。曹丕の弟。陳王に封ぜられ、諡が思王であったことから、陳思王と称される。『三国志』曹植伝に、「陳思王植、字子建、文帝同母弟也。年十余歳、誦詩論及辞賦数万言。善属文」とあり、『世説新語』劉孝標注(全体が残る現存最古の注釈であり、古くから高い評価を受けていた)にも、「陳思王植、字子建、文帝同母弟也。年十余歳、誦詩論及辞賦数万言。善属文」(新釈漢文大系上―三〇八頁)とある。『世説新語』『古今事文類聚』には「東阿王」とし、『初学記』『太平御覽』また新注『蒙求』も『世説新語』に従い「東阿王」とするが(最後に「東阿即陳思王曹植旧封」と追記する)、『文選』李善注には「陳

思王」とし、古注『蒙求』①⑤も「陳思王」、「世俗諺文」も「陳思王」とする。○蘭菊ノ契 心を許しあった者同士の親密で固い交わり。その美しさを蘭や菊の香りにたとえていう。後述の「厚断金兄弟ノ昵ヲ成ケリ」についての注解でも述べるとおり、『易経』繫辞上伝に「二人同心、其利断金、同力之言、其臭如蘭」、つまり、君子二人が心を同じくすれば、その堅固さは金石をも断ち切り、心を同じくした者の言葉は、蘭のようにかぐわしい、とある。ここから、心を許しあった友、心を許しあった者同士の交わり・契りなどの意として、「蘭交」「金蘭契」「蘭契」等の語が生まれている。例えば、唐・盧照鄰の「五悲・悲今日」〔全唐文〕巻一百六十八に「蘭交永合、松契長并」、唐・李白の「江上寄元六林宗」詩〔李太白集〕卷十三。統国訳漢文大成『李太白全詩集』中一四六三頁に「蘭交空懷思、瓊樹詎解渴」、劉孝標「広絶交論」〔文選〕卷五十五。全釈漢文大系『文選』七一一七〇頁に「自昔把臂之英、金蘭之友、曾無羊舌下泣之仁」〔唐・呂延濟は「金蘭、喻交道、其堅如金、其芳如蘭」と注している〕、唐・白居易の「代書詩一百韻寄微之」に「身名同日授、心事一言知、肺腑都無隔、……分定金蘭契」〔新釈漢文大系・白氏文集三一頁〕、宋・喻良能的「贈樓尉」詩〔香山集〕卷十一に「元亮紙思三逕樂、子雲何事九衢塵。襟期蘭契如君少、未可匆匆動去輪」、宋・陳起の「適安有湖山之招病不果赴」詩〔江湖小集〕卷二に「蘭契簡以詩、金鐙而玉夏。招邀訪逋仙、劇飲擬投轄」、菅原文時の「為右丞相贈大唐吳越公書狀」〔本朝文粹〕卷七に、「受之則雖忘玉案、辭之恐謂嫌蘭契」とある。さらに、『讀仏乘鈔』第三之七〔安居院唱導集上巻〕四〇七頁には、「当初結

(五四)

芳契、……其芳蘭菊、其契堅金石」との文があり（「其芳蘭菊、其契堅金石」は上記の『文選』呂延濟注の「其堅如金、其芳如蘭」と意が同じであり、かつ似た表現となっている）、契りが「蘭菊」のように芳しい（そして金石のように堅い）、という表現もあり、心を許しあった者同士の親密で固い交わりの美しさを「蘭や菊」の香りにたとえる例も存在している。なお、『宝物集』の軽大臣説話に「経年流涙蓬蒿宿、逐日馳思蘭菊親」とある（新大系一九頁。《盛》巻十「有王渡疏黄島」では「経年流涙宿蓬蒿、逐日馳思親蘭菊」〔二一三六頁〕となっている。《延・長》にもあり）。この「蘭菊親」は、蘭と菊のように親しい関係という意味ではなく、蘭や菊（の咲く故郷）が慕わしいという意味なので、「蘭菊ノ契」とは無関係である。○兄ノ文帝、陳思王ヲ惡テ殺サント思ツ、『三国志』などによると、父曹操が曹植を寵愛し太子にしようとしたが、兄曹丕が即位して後は、曹植は不遇のうちに亡くなった。『世説新語』劉孝標注も「魏志曰」としてこれを引く。しかし、文帝が陳思王を殺そうとまでしたという話は正史である『三国志』やその裴松之注には書かれていない。『世説新語』（文学篇「七歩の才」の逸話の他、尤悔篇にも文帝が曹植を殺そうとした話が書かれている）によって広まった俗説であろう。

○汝七歩之間二詩ヲ造。不然者速二汝ヲ可殺。『世説新語』文帝嘗令東阿王七步中作詩。不成者行大法。〔新釈漢文大系上―三〇七頁〕。『文選』李善注「魏文帝令陳思王七步成詩」（四庫全書）。『初学記』魏文帝令東阿王七步成詩。不成者行大法。〔四庫全書〕。『蒙求』古注①⑤「魏文帝嘗令陳思王七步作詩。如不成者行法。同新注」魏文帝嘗令東阿王七步作詩。作不成者行法。『太平御覽』「魏文帝



使「東阿王七步作詩。不成<sub>レ</sub>當行<sub>二</sub>大法<sub>一</sub>」(中華書局影印)、『古今事文類聚』『魏文帝令「東阿王七步中作詩。不成者<sub>レ</sub>應<sub>二</sub>大法<sub>一</sub>」(四庫全書)。「大法」は死罪のこと。』『世俗諺文』も同様に「魏文帝令陳思王七步作詩。不成行<sub>二</sub>大法<sub>一</sub>」(『世俗諺文全注釈』四五七頁)。「盛」はこれ意識している。○煮豆燃豆其。豆在釜中泣。本是同根生。相煎何太急 其(まめがら)も豆も同じ根から生まれたのに、なぜそのように煎りつけるのか。兄弟であるのに憎むことを豆に喩えて嘆いた。『世説新語』には「煮<sub>二</sub>豆持作羹<sub>一</sub>、漉<sub>レ</sub>豉以為<sub>二</sub>汁<sub>一</sub>、其在<sub>二</sub>釜下<sub>一</sub>燃、豆在<sub>二</sub>釜中<sub>一</sub>泣、本自<sub>二</sub>同根<sub>一</sub>生、相煎何太急」(上―三〇七頁)とある。『蒙求』新注は「其在<sub>二</sub>釜下<sub>一</sub>然、豆在<sub>二</sub>釜中<sub>一</sub>泣、本自<sub>二</sub>同根<sub>一</sub>生、相煎何太急」とし、『文選』李善注「其在<sub>二</sub>釜下<sub>一</sub>然、豆居<sub>二</sub>釜中<sub>一</sub>泣、本是同根生、相煎何太急」、『太平御覽』卷八四一「箕在<sub>二</sub>釜下<sub>一</sub>燃、豆在<sub>二</sub>釜中<sub>一</sub>泣、本自<sub>二</sub>同根<sub>一</sub>生、相煎何乃急」もほとんど同じ形をとっている。一方、『初學記』、『蒙求』古注①⑤、『太平御覽』卷六〇〇、『古今事文類聚』は「煮<sub>二</sub>豆燃<sub>二</sub>豆其<sub>一</sub>、豆在<sub>二</sub>釜中<sub>一</sub>泣、本是同根生、相煎何太急」とし、「盛」に同じである(ただし、『蒙求』古注は、正確には④のみ、「煮」が「煎」に、「在」が「有」になっており、③のみ「燃」が「燒」になっている)。「世俗諺文」も「煮<sub>二</sub>豆燃<sub>二</sub>豆其<sub>一</sub>、豆在<sub>二</sub>釜中<sub>一</sub>泣、本自<sub>二</sub>同根<sub>一</sub>生、相煎何火急」として、それとほぼ同じ。「火急」は「太急」の誤写であろう。『十訓抄』『鑑囊抄』などもほぼ同形の詩を引くので、中世にはこの形のもが流布していたと思われる。なお、明・陸深撰『儼山集』卷二十五にも、「陳思王七步詩、世所伝誦云、『煮豆燃豆其、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急』。『世説』所載微殊、又余三言云『煮豆持作羹、漉豉以為汁、其在釜下燃、豆在釜中泣、本自同根生、相煎

何太急」(四庫全書)とあり、中国で明代においても、「盛」や『蒙求』古注と全く同じ形の「七步詩」が広く知られていたことがわかる。『世俗諺文』の拠った漢籍について、濱田寛は、『蒙求』新注が曹植を「東阿王」とし、「東阿王」が「陳思王」であることを追記する形を採っているのに対し、『蒙求』古注は曹植を「陳思王」としていることから、『世俗諺文』は『蒙求』古注に拠っていることが疑われる、と指摘する(四六一頁)。さらに右のとおり『世説諺文』の詩句が『蒙求』古注に非常に近いことを考えても、『世俗諺文』の注文は、『蒙求』古注所引『世説新語』に拠る可能性が高いと考えられる。「盛」本文についても同様に、『蒙求』古注に拠る可能性が高いと言えよう。○厚断金兄弟ノ昵ヲ成ケリ 『易経』繫辞上伝に「二人同心、其利断金、同心之言、其臭如蘭」(新釈漢文大系下―一四五一頁)とあり、君子が二人心を同じくすれば、その堅固さは金石をも断ち切ると説く。そこから断金は厚い友情、親密な交際を指した。遠藤光正が指摘(一七頁)するように、『明文抄』人倫部に「二人同心、其利断金、同心之言、其臭如蘭(周易)」(山内洋一郎二七六頁)とあり、このような金言集により知られた慣用語であったろう。『十訓抄』五ノ七「友につきて、断金、伐木の契りなりなどいふことあれども」(新編日本古典文学全集一九一頁)。○七步ノオトイヘリ 『日国大』「詩才がすぐれ、詩作の早いことをいう。『澄憲作文集』「而<sub>レ</sub>則保<sub>二</sub>万歳<sub>一</sub>寿算<sub>二</sub>、弥誇<sub>二</sub>七步<sub>一</sub>才<sub>二</sub>」(大曾根章介四〇九頁)。○三千ノ恥 前節末尾の「三千一山ノ憤ヲ平ゲツ、」を受ける。卷四・山門御興振「但三千ノ衆徒神興ヲ先立奉リ」(二四四頁)など、山門の衆徒を三千人することによる。○誠ニ時ノ災ヲマヌカル、事、芸能ニ過タルハナカリケリ 『世

説新語』の七歩の才の故事については、曹植の優れた詩才をいったもの、また即興的才能をいったもの、あるいは兄弟間の愛憎をいったものとする解釈ができる。森真理子は特に江戸時代の『世説新語』蒙求』の享受において、これらの解釈の変容を論じる。〈盛〉では、危機を即興で回避した才芸の譬えとして引いている。〈盛〉が即興の才芸を評価するのは、ここまでも本巻の「豪雲叢議」における法皇と豪雲

の問答、また「頼政歌」における源頼政の当座御会での詠歌、また巻三で「澄憲祈雨三百人舞」での澄憲の逸話など、度々取り上げられている。なお、『十訓抄』六ノ十五では、七歩の才の故事が実の兄弟間の不仲を題材とする中に位置づけられ（新編日本古典文学全集 三三二頁）、その取り上げ方は〈盛〉とは大きく異なる。

## 【引用研究文献】

- \* 牛尾久美子 「源平盛衰記」の中国故事説話について（国文目白一〇号、一九七一・三）
- \* 遠藤光正 「源平盛衰記」に引用の漢籍の典拠（二）（東洋研究七七号、一九八六・一）
- \* 大曾根章介 「翻刻 澄憲作文集」（『中世文学の研究』東京大学出版会一九七二・七）
- \* 濱田寛 『世俗諺文全注釈』（新典社二〇一五・10）
- \* 森真理子 「曹植「七歩の才」考」（『説話論集 第四集』和泉書院一九九五・1）
- \* 山内洋一郎 「本邦類書 玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究」（汲古書院二〇一二・5）

## 京中焼失

<sup>1</sup> 四月廿八日亥刻ニ、<sup>2</sup> 樋口富少路ヨリ焼亡アリ。是ハ神輿ヲ<sup>3</sup> 奉<sup>レ</sup> 禦トテ<sup>4</sup> 狼藉ニ及<sup>ル</sup> 武士七人禁獄之内、十禪師ノ御輿ニ矢ヲ射立進セケル<sup>5</sup> 成田兵衛為成ト云者ハ、小松殿ノ<sup>6</sup> 乳人子也。コトニ重科ノ者也。衆徒ノ<sup>7</sup> コニハ手ニ<sup>8</sup> 給テ、<sup>9</sup> 唐崎ニハ付ニセン、<sup>10</sup> 寐ニセンナド<sup>11</sup> 訴申ケレバ、小松殿ヨリトカク山門ヲ被<sup>レ</sup> 有テ、禁獄ヲモ<sup>12</sup> 乞免シ、伊賀国ヘ<sup>13</sup> 流セトテ所領ヘ下遣ケルガ、<sup>14</sup> 今日ノ晩程ニ、<sup>15</sup> 遺惜マントテ、<sup>16</sup> 同僚共ガ<sup>17</sup> 樋口富少路ナル所ニ<sup>18</sup> 寄合テ酒盛シケリ。酒ハ<sup>19</sup> 飲バ<sup>20</sup> 醉習ナレ共、<sup>21</sup> 各<sup>22</sup> 物狂シキ心地出来テ、成田ガ前ニ<sup>23</sup> 盃ノ有ケル時、或者ガ申ケルハ、「<sup>24</sup> 兵衛殿田舎ヘ御下向ニ、御有ニ進ベキ物ナシ。便宜能<sup>25</sup> コソ候ヘ」トテ、<sup>26</sup> モトヅリ<sup>27</sup> 切テ抛出タリ。又或者ガ「穴面白ヤ。アレニ<sup>28</sup> 劣ベキカ」トテ、耳ヲ<sup>29</sup> 切テ抛出ス。又或<sup>30</sup> 仁「思中ニハ、大事ノ<sup>31</sup> 財惜カラズ。大事財ニハ命ニ過タル者有マジ。是ヲ<sup>32</sup> 肴ニ」トテ、腹<sup>33</sup> 搔切テ<sup>34</sup> 臥ヌ。成田兵衛ガ「穴ユ、シノ肴共ヤ。<sup>35</sup> 帰<sup>36</sup> 上テ又酒飲事モ難<sup>37</sup> 有。為成モ肴出サン」トテ、自害シテ臥<sup>38</sup> 家主ノ男思ケルハ、「此<sup>39</sup> 者共カ、ランニハ、我身<sup>40</sup> 残タリ共、六波羅ヘ<sup>41</sup> 被<sup>42</sup> 召出、安穩ナルマジ」トテ、家ニ火サシテ、炎ノ中ニ飛入テ焼ニケリ。

【校異】 1 〈近〉合点あり。行の冒頭に「京中焼失ノコト」と傍書。2 〈近〉「ひぐちとみのこうちより」、〈蓬〉「樋口富小路より」、〈静〉「樋口富小路より」。底本「樋口富小路ヨリ」を改める。3 〈近〉「ふせきたてまつらんとて」、〈蓬〉「禦奉るとて」、〈静〉「禦たてまつるとて」。4 〈蓬・静〉「狼籍に」。5 〈近〉「なりたのひやうゑ」、〈蓬〉「成田兵衛」、〈静〉「成田兵衛」。6 〈近〉「めのとこ也」、〈蓬〉「乳人子也」、〈静〉「乳人子也」。7 〈近〉「たまはて」。8 〈近〉「唐崎ニ」なし。9 〈近〉「ひつはりきりに」、〈蓬・静〉「霖に」。10 〈近〉「うつたへければ」、〈蓬〉「訴詔申ければ」。11 〈近〉「こひゆるし」、〈蓬〉「乞免」、〈静〉「乞免」。12 〈蓬・静〉「流罪とて」。13 〈近〉「けふの」、〈蓬〉「今日の」。14 〈近・静〉「なこりおしまんとて」、〈蓬〉「名残おしまんとて」。15 〈近〉「とうれとものが」。16 〈蓬〉「火口富小路なる」、〈静〉「火口富小路なる」。17 〈近〉「のめは」、〈蓬〉「飲は」、〈静〉「飲は」。18 〈近〉「ものくるはしき」、〈蓬〉「物狂しき」、〈静〉「物狂しき」。19 〈近〉「ひやうゑとの」、〈蓬〉「兵衛殿の」、〈静〉「兵衛殿の」。20 〈蓬・静〉「髻」。21 〈近〉「きつて」、〈蓬〉「切て」、〈静〉「きりて」。22 〈近〉「まくへきか」とて、〈蓬・静〉「劣へきか」とて。23 〈近〉「きつて」、〈蓬〉「切て」。24 〈近〉「じん」、〈蓬〉「仁か」、〈静〉「仁か」。25 〈近〉「たから」、〈蓬・静〉「財」。26 〈近〉「大じのたからには」、〈蓬・静〉「大事のたからには」。27 〈近〉「かききつて」、〈蓬・静〉「掻切て」。28 〈蓬〉「臥す」、〈静〉「臥す」。29 〈近〉「なりだひやうゑか」、〈蓬〉「成田兵衛か」、〈静〉「成田兵衛か」。30 〈近〉「かへりのほつて」、〈蓬〉「返り上て」、〈静〉「返り上て」。31 〈近〉「ためなりも」とし、「な」を縦線で消す。右に「ふ」を傍記。32 〈近〉「いへあるしの」、〈蓬〉「家主の」、〈静〉「家主の」。33 〈蓬〉「者ともか」、〈静〉「者其か」。34 〈近〉「のこたりとも」、〈静〉「残たりとも」。35 〈近〉「めしいたされ」、〈蓬・静〉「めし出されて」。

【注解】 ○四月廿八日亥刻ニ、樋口富小路ヨリ焼亡アリ 底本「樋口富小路ヨリ」を改める（校異2参照）。安元三年四月二十八日に起こった、左京の三分の一が焼失したとされる安元の大火、いわゆる太郎焼亡についての記事。樋口富小路より出火し、風に煽られて北西部に延焼が拡大し、大内裏にまで及んだ。『方丈記』が五大災厄の一つとして記すことで知られ、諸書に都の廃退を象徵する出来事として記録された。『平家物語』も同様であるが、さらに後述のとおり「山王の御とがめ」（『覚』上二六二頁）として、御輿振りの一件と関わらせているのが特徴である。樋口小路は五条大路より一筋南、富小路は東京極より一筋西で都の西端近く、鴨川を挟んで六波羅がある。平家諸本の記述には異同が大きい。〈四・闕・延・長・覚・中〉は「廿八日亥時

計ニ樋口富小路ヨリ火出来ル」（『延』卷一〇六オ）として、次節に移る（成田為成による出火原因の逸話を語るのは〈盛〉のみ）。ただし日付を〈長〉は「廿四日」（一〇一二頁）、〈屋〉は「廿七日」（八五頁）とする。『玉葉』安元三年四月二十八日条「亥刻、上方有火、樋口富小路辺云々」。『愚昧記』同日条「亥刻許、下方有炎上事、六条云々。又云、四条富小路、異風也。仍三条殿有恐歟。仍騎馬馳參之後、追将来牛等、樋口富小路云々」。『顕広王記』同日条裏書「火起於五条富小路二及八省、自亥時寅刻炎煙散」。他に『仲資王記』同日条、『百練抄』同日条にも同様の記述あり。『方丈記』「去安元三年四月廿八日カトヨ。風ハゲシク吹キテシヅカナラザリシ夜、戌ノ時許、都ノ東南ヨリ火出デ来テ西北ニイタル」（新大系四頁）。この火災記事にお

ける『方丈記』と『平家物語』との関係については、山下宏明・佐伯真一など多くの専論がある。〈盛〉については、直接的な影響はないと見てよいだろう。○是ハ神輿ヲ奉禦トテ狼藉ニ及武士七人禁獄之内……

以下、火事の要因を語る本段の記事は〈盛〉の独自異文。ここに描かれるような要因は諸記録にも見られない。史実ではない可能性が高い。『方丈記』は「火本ハ、樋口富ノ小路トカヤ。舞人ヲヤドセル飯屋ヨリ出デ来リケルトナン」（新大系五頁）とする。結局出火の原因は分からなかったことから憶測を呼び、〈盛〉の語るような説も語られるところとなったのではないか。〈盛〉は先の御輿振から話を一転させるのではなく、神輿に矢を射立てた人物が内裏焼亡を引き起こしたとして、二つの事件を直接的に結び付けるのである。後に焼亡の記事の後、〈盛〉のみが「神輿ニ矢立、神人宮司被射殺」タリケレバ、山王噴ヲ成給、角亡シ給ケルニコソ」と強調することと呼応するだろう。美濃部重克は、「日吉社の神輿に矢を射たてるという未曾有の事件が大内裏でおこり、日吉社の神の祟りによって未曾有の大火が京中を焼き大内裏が焼亡したというわけである。覚一本と『源平盛衰記』はそうした因果関係を設定することで、神々と人との関係における「罪と罰」の主題を際立たせるテキストとなっているのである」（九四頁）とする。〈盛〉は、神輿に矢が立った事件を陽明門を守る重盛配下との攻防においてとするので（本全釈二二七〇頁参照）、神輿が果たせなかった大内裏侵入を神火が果たしたという、美濃部の指摘する構図が成立する。ただしそれは物語上の構図であり、史実では事件発生時の内裏は閑院で（本全釈二二五九頁参照）、実際には矢が放たれ神輿が放棄されたのは閑院内裏の陣口にあたる二条北西洞院東

（五）

であり、合致しない。○成田兵衛為成 成田為成は、前段の宣旨で、十禅師の神輿に矢を射立てた「官兵七人禁獄事者」とあった七名（実名が記載されるのは六名）には名前がないものの、追書に追加して名前の挙げられていた人物。他の諸本にも古記録にもその名前は確認できず、小松殿（重盛）の乳母子であることなども未詳。〈盛〉は本節に見る為成の出火の逸話を後補したことで、併せて前段の追書にもその名を加えたか。○唐崎二八付ニセン 唐崎は、「平安末期頃からは日吉祭の際に神輿が向かう旅所」（角川地名・滋賀県）二四八頁）となっていたし、「祓所および日吉社所縁の地として常に清浄に保たれていなければなら」（平凡社地名・滋賀県 二二八頁）ない地であったが、そこが礫の場所とされる理由は不明。〈近〉「八ッつけ」、〈蓬〉「八付」。<sup>ハツツケ</sup>「はりつけ」の促音便化したもの。『古活字本平治物語』「長田父子をからめとり、八付にこそせられけれ」（旧大系四六五頁）。『今昔物語集』巻十八の二六話や、巻二十九の九話には、張付の用例として、身動きできないように固定して、弓で射殺す場面がある。○寐 〈近〉「ひつはりきりに」、〈蓬・静〉「寐に」。<sup>フシツケ</sup>「ふしづけ」は体を簀巻きにして水中に投げ入れる処刑法。七歳以下の子供の処刑法として見られる（〈闘全釈〉二二一八頁の注解参照）。次の例のように、成人に対して行うには、極めて残酷な処刑法といえる。〈盛〉巻十八・文覚頼朝勧進謀叛「伊豆ノマツカハノヨク、白滝ノ底ニフシツケニセヨト云ケレバ」（三一九一頁）。幸若舞曲・しづか物語「後には此の女、かつら河のふかき所を尋ねて、ふしづけにしたりけり」（『幸若舞曲研究』五一—三三五頁）。「引つ張り切り」は手足を引っ張って切るか、裂いて殺す処刑法。〈日国大〉等には『信長記』や『室町殿日記』を用



例に挙げており、近世の処刑法か。○樋口富小路ナル所ニ「樋口」

を〈蓬・静〉は「火口」とする。この後の「盲ト」には、「火口トイへバ、燃広ガラン」ともある。火元が樋口富小路であったことからの言葉遊びがあるろう。

○物狂シキ 〈近・静〉は「ものぐるはしき」〈蓬〉は「ものぐるをしき」とする。いずれも正気を失う様子。酒宴が異常事態を引き起こしたのは、酩酊したからだけでなく、山王の祟りも影響しているのだろう。次段の「盲ト」では「天狗ノシハザ」、次々段の「大極殿焼失」では、比叡山より猿共が火を持って火を付けたとの夢を人が見たとの解釈もなされるように、不穏な空気が彼らを自害、さらに出火へと導いていく。なお、内裏炎上事件については、諸本に共通する山王権現の神威という文脈に加えて、〈盛〉は妖異の関与という文脈を読み取ったのではないか。それが、後段の盲トで市中の焼亡に天狗の関与が語られるという、一字下げの記事増補につながっているのであり、そのきっかけとなったのが成田為成のエピソードではないか。酒宴における怪異な事件としては、『太平記』巻五「相摸入道弄田楽并闘犬事」がよく知られるが、そこで北条高時を惑乱させるのも、「背勾テ鶏ノ如クナル」、あるいは「身ニ翅在テ其形山伏ノ如クナル」姿の天狗とされている。〈盛〉の本節や後段には、こうした『太

# 【引用研究文献】

- \* 佐伯真一「『平家物語』の『方丈記』依拠」（帝塚山学院大学研究論集 二二号、一九八六・12、『平家物語遡源』若草書房一九九六・9再録）
- \* 田村睦美「〈自焼（じやき）考〉——武士が自邸を焼いた心理——」（軍記と語り物四五号、二〇〇九・3）
- \* 広川二郎「服飾と中世社会——武士と烏帽子——」（藤原良章・五味文彦編『絵巻に中世を読む』吉川弘文館一九九五・12）
- \* 美濃部重克「『平家物語』における〈換喩的文学〉〈隱喩的文学〉の二つの表情——ことに〈隱喩的文学〉」巻二「御興振」から「内裏炎上」への展開——（年報中世史研究三〇号、二〇〇五・5、『回想 平家物語』三弥井書店二〇一二・8再録。但し、引用箇所は、収録場所（二二九頁）を異にし、

平記』的世界に近いものがある。○モトバリ切テ抛出タリ 髻を切

るとは、出家行為を意味し、献上することは恭順の意を示すのだが（広川二郎七五頁）、ここでは、この後に、「大事ノ財」とあるように、各人の大事なものの一つとして、ここでは髻が投げ出されたのである。また、耳を切る行為としては、仏道への志を固めるために自分の耳を切った明恵が想起されるが、この場合も髻の行為と同様に考えられる。もちろん、モノに憑かれたかのような狂氣的な行為であることは言うまでもない。田舎へと流されていく成田為成を慰める為に、献じられる自己犠牲は、髻・耳・命とエスカレートしてゆき、最後は献じられた本人までもが自害をしてしまう。それらは、結果的に誰の役にも立たず、行為としては全く意味を持たない。○家ニ火サシテ、炎ノ中ニ飛入テ焼ニケリ 自邸に火を懸ける「自焼」行為の理由として、田村睦美は、①敵方の利用を防ぐための実利的効果と、②恥を隠す心理や、野心や反抗・拒否の意を含む心理という精神的な理由を考え、さらにその他の理由の例として、〈盛〉の当該記事を挙げる。ここでは、罪に問われることを恐れての行為であり、その根底には「物狂い」があるといえる。

\* 山下宏明「個の文学と集の文学―方丈記と平家物語―」(軍記と語り物二四号、一九八八・3。『平家物語の成立』名古屋大学出版会一九九三・6再録)

「北野天神」紅梅殿、〈静〉「北野天神」紅梅殿。31〈近〉「むめその」蓬「梅苑」。32蓬・静「桃園」。33蓬「中務宮」千草殿、〈静〉中務宮千草殿。34〈近〉「きやうこく」とし、「く」に斜め二重線。右に「く」を傍記。35〈近〉「あまの■したてに」とし、「■」を消す。右に「は」を傍記（■は難読）。36〈近〉「ほかの」。37〈近〉「大内に」蓬「大内に」。38〈近〉「しゆしやくゐん」蓬「朱雀門」静「朱雀門」。39〈近〉「ゑしやうもん」蓬「会昌門」静「会昌門」。40〈近〉「ゆうばうもん」蓬「郁芳門」静「郁芳門」。41蓬・静「紫震」。42〈近〉「大ごくてん」蓬「大極殿」静「大極殿」。43〈近〉「あまのすいかい」蓬・静「天透垣」。44蓬・静「龍小路」。45蓬「庭上小庭」静「庭上小庭」。46蓬「延喜荒海」。47蓬「見参立板」。48〈近〉「うごきはし」蓬・静「動橋」。49〈近〉「をろかなり」蓬・静「疎也」。

【注】○折節巽ノ風ハゲシク吹テ、乾ヲ指テ燃ヒロゴル 〈四・闕・延・

長・南・屋・覚・中〉「折節辰巳ノ風ハゲシク吹テ、京中多ク焼ニケリ」

（延）卷一——〇六オ。『玉葉』「余騒起見之、火勢弥盛、其焰靡乾方、閑院有危歟」（治承元年四月二十八日条）。以下の焼亡記事の叙述は諸本によってかなり前後している。いま、〈盛〉の叙述を整理する。（一）は〈盛〉の独自異文。【名所焼亡】は焼亡した名所の列挙、【大内裏焼亡】は焼亡した大内裏の列挙を指す（ただし後述のとおり、実際の焼亡箇所を正しく示すものではない）。

〈盛〉二十八日出火↓（出火の原因）↓辰巳の風により広がる↓河原院焼亡↓名所三十余箇所、公卿家十七箇所焼ける↓【名所焼亡】↓その他家々は数を知らず↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓（卜者の予言）↓車輪のごとき炎筋違えに内裏へ飛び行く↓叡山の猿が京を焼く夢あり

これに対して、諸本の叙述は次のようになっている。細部の異同については各項目で述べる。このうち「日記・文書・資財など灰燼となる」は〈盛〉にない記事。

〈四〉二十八日出火↓辰巳の風により広がる↓【名所焼亡】↓その数

を知らず↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓車輪のごとき炎筋違えに乾の方へ飛び行く↓日記・文書・資財など灰燼となる↓叡山の猿が京を焼く夢あり

〈闕〉二十八日出火↓辰巳の風により広がる↓名所三十余箇所、公卿家十六箇所焼ける↓殿上人、諸大夫の家は数を知らず↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓車輪のごとき炎筋違えに乾の方へ飛び行く↓【名所焼亡】↓日記・文書・資財など灰燼となる↓叡山の猿が京を焼く夢あり

〈延〉二十八日出火↓辰巳の風により広がる↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓【名所焼亡】↓名所三十余箇所、公卿家十六箇所焼ける↓殿上人、諸大夫の家は数を知らず↓車輪のごとき炎筋違えに乾の方へ飛び行く↓叡山の猿が京を焼く夢あり

〈長〉二十四日出火↓辰巳の風により広がる↓【名所焼亡】↓名所二十一箇所、公卿家十七箇所焼ける↓殿上人、諸大夫の家は数を知らず↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓日記・文書・資財など灰燼となる↓車輪のごとき炎筋違えに乾の方へ飛び行く↓叡山の猿が京を焼く夢あり

〈南〉二十七日出火↓辰巳の風により広がる↓車輪のごとき炎筋違えに乾の方へ飛び行く↓【名所焼亡】↓名所二十余箇所、公卿家十六箇所焼ける↓殿上人、諸大夫の家は数を知らず↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓日記・文書・資財など灰燼となる↓叡山の猿が京を焼く夢あり

〈屋〉二十七日出火↓辰巳の風により広がる↓車輪のごとき炎筋違えに乾の方へ飛び行く↓【名所焼亡】↓名所二十余箇所、公卿家十六箇所焼ける↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓日記・文書・資財など灰燼となる↓叡山の猿が京を焼く夢あり

〈覺〉二十八日出火↓辰巳の風により広がる↓車輪のごとき炎筋違えに乾の方へ飛び行く↓【名所焼亡】↓名所三十余箇所、公卿家十六箇所焼ける↓殿上人、諸大夫の家は数を知らず↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓日記・文書・資財など灰燼となる↓叡山の猿が京を焼く夢あり

〈中〉二十八日出火↓辰巳の風により広がる↓【名所焼亡】↓名所二十余箇所、公卿家十七箇所焼ける↓殿上人、諸大夫の家は数を知らず↓車輪のごとき炎乾の方へ飛び行く↓内裏に吹き付く↓【大内裏焼亡】↓日記・文書・資財など灰燼となる↓叡山の猿が京を焼く夢あり

以上を大きく見ると、【名所焼亡】と【大内裏焼亡】の列挙が前後していることが分かる。すなわち、【名所焼亡】↓【大内裏焼亡】の順で記するのが〈盛〉の他〈四・長・南・屋・覺・中〉。一方で【内裏焼亡】↓【名所焼亡】の順で記するのが〈關・延〉である。〈延全注釈〉は、

『玉葉』『愚昧記』『顯広王記』『清辨眼抄』『百練抄』などは、いずれも大内裏周辺の被害を先に記し、その後で公卿の邸宅などを記す」とから、「この大火の与えた衝撃として内裏の焼亡は特に大きな要素であり、記録類はまずその点の確認に努めている」（三八〇頁）とする。

一方、〈四・長・盛・南・屋・覺・中〉は、火元辺りの叙述から始めて、〈盛〉「ハテハ大内ニ吹付タリケレバ」とするように、終には大内まで灰燼と帰した状況を描こうとするのであろう。これらの記事の前後関係については、以下の注では必要に応じて触れるのみとする。○融大臣塩釜や川原院ヨリ焼ソメテ…以下、焼じた名所の列挙。諸本による異同が激しい。三木紀人が指摘するように、諸本いずれもこれらの名所には実際の焼亡については疑問が持たれるものが多い。焼亡域から外れるものもあれば、焼亡域内であっても諸本があげる千種殿のように「名所」としての実質はすでになく、それ以前に「千種殿」の称もなかば死語化していたかと思われる」（二三〇頁）場所もある。『平家物語』は「多くの虚偽または誤認を含みながら「名所」にふれているのであり、「作者の、王朝の文化伝統に向けるはるかなる視線は明らかである」（一三二頁）。〈四評釈〉では、「三十前後を列挙する〈延・盛〉に至っては、ほとんど焼亡範囲に顧慮することなく名所尽くしに努めたかにさえ見える」（三一—二二頁）とする。次に、〈盛〉のあげる名所に対する、諸本の有無、異同を表にする。掲出順に番号を振り、呼称が〈盛〉と異なるものについては併せて記した。また、諸本によっては名所の並列関係に混乱があり、例えば〈中〉に「さい三でうのそめどの」とあるようなものは、「西三条」「染殿」に分離した。



⑬大炊殿	⑫鷹司殿	⑪永頼三位ノ山井殿	⑩寛平法皇ノ亭子院	⑨中御門ノ高陽院	⑧大炊御門冷泉院	⑦照宣公ノ堀河殿	⑥三条宮ノ御子左ノ小蔵宮	⑤小一条款冬殿ト申ハ二条東洞院也	④染殿ノ南ニハ清和院	③小一条殿ト申ハ貞仁公ノ家トカヤ近衛東洞院	②染殿ト申ハ忠仁公ノ家也正親町京極	①融大臣塩釜ヤ川原院	〈盛〉
		⑨				④		⑫款冬殿				①融大臣の河原の院	〈四〉
										⑫貞仁公の小一条	⑪忠仁公の染殿	⑦円融大臣の河原院	〈關〉
		⑭	⑬	⑭高陽院		⑮		⑭山吹サキシ故二条院	⑫清和院	⑬貞仁公故一条院	⑪忠仁公の染殿	②融ノ大	〈延〉
			⑥高明親王(寛平法皇)の亭子院			①					③冬嗣太臣の染殿		〈長〉
												③融ノ大	〈南〉
													〈屋〉
						⑧							〈寛〉
						⑨				⑧ていじんこうの 小一でう	⑥そめどの		〈中〉

③⑩冬嗣大臣ノ閑院殿	②⑨小野宮	②⑧本院	②⑦滋野井	②⑥近衛院	②⑤東三条	②④穀蔵院	②③奨学院	②②勸学院	②①神泉苑	②①二条朱雀院	②①西三条	②①西三条	②①公任大納言ノ四条殿	②①小松殿	②①六条院	②①押小路町ノ鴨井殿
⑤冬嗣大臣の閑院殿	①①小野の宮	①①能有大臣の本			⑥	⑮		⑭勸学院	⑦		⑩西三条	⑮西三条	⑬			⑨鴨居殿
②	③維高の宮の御子小野殿	②			⑭											
③	④惟喬の宮の御子小野殿				②②	②	①	②①神泉園	⑧				②①紫雲立シ公任ノ大納言ノ四条ノ宮			②⑤鳩井殿
③※の閑院殿	②忠仁公										④					⑨鴨居殿
											①					
											①					
⑦					⑥											⑤鴨居殿
⑦ふゆつぎのおとぎのかん院殿					③						⑤さい三でう					④かもゐどの

- ※1 忠仁公（良房）と冬嗣を混同している。
- ※2 能有大臣の邸宅は「近院」。「近院」と「本院」を混同している
- ※3 忠仁公（良房）と冬嗣を混同している。
- ※4 橘逸勢の邸宅は「這松殿」、「高松殿」と混同している。

(ただし後述するように、疑問のあるものも多い)。実際に焼亡したかどうかよりも、名所を列挙することで、焼亡による王朝の衰滅を印象づけることを目的としていると言えよう。また、名所の順序についても法則があるとは考えにくい。〈盛〉について言えば、出火地点のすぐ近く、①河原院に始まり⑦までは左京の名所を東西南北関係なく列挙する。⑮西三条で朱雀大路の西に移り、②④まで朱雀大路周辺の諸院が挙げられる。⑤以降は再び左京区域の名所に戻る。諸本の中で〈盛〉の挙げる名所が最も多く、⑥・⑧・⑫・⑬・⑮・⑯・⑰・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙は〈盛〉のみに見られる。一方で他本があげる「鬼殿」「橘逸勢の這松殿」などは取り上げていない。これらの配列や名所の取捨選択の理由については明らかにしないが、〈盛〉が語呂、リズムを重視して配列しているとは言えるだろう。

○融大臣塩釜ヤ川原院

源融(八二一〜八九五)が築いた邸宅で河原院と呼ばれ、後に宇多上皇の御所となった。(四・闕・延・南)にも見えるが、「塩釜ヤ」とするのは〈盛〉のみ。融は築庭の際に風流を尽くし、庭園は歌枕で有名な陸奥国塩竈の浦を摸したこと知られる。『今昔物語集』二四―四六「此ノ院ハ陸奥國ノ塩竈ノ様ヲ造テ、潮ノ水ヲ湛ヘ汲ミ入レタリケレバ」(新大系四―四六六頁)。その風景は荒廃後も人々の記憶に刻まれた。『古今集』八五二・紀貫之「きみまさで煙たえにし塩金のうらさびしくも見えわたる哉」(新大系二五六頁)。「盛」は公卿邸宅の冒頭に歌枕と併せて河原院をあげてから、「名所卅余箇所、公卿家十七箇所焼ニケリ」とする点が特徴的であり、「名所尽くし」の趣を一層強めていると言える。以下の名所については、『簾中抄』『二中歴』

『拾芥抄』を参照しつつ述べる。基本的には平安時代末期成立の『簾中抄』（冷泉家時雨亭叢書）の「名所」（一一六〇―一一七ウ）と鎌倉時代初期成立の『二中歴』（尊経閣貴重書叢刊）の「名家歴」（二二一六―二二九頁）の記述を併記する。『拾芥抄』の諸名所部（尊経閣貴重書叢刊一四二―一四五頁）は、特記しない限りほとんどの名所が取り上げられ、他の二書よりも記述が詳しいこともあるが、必要に応じてのみ取り上げることとする。また適宜『平安京提要』『平安時代史事典』も参照した。河原院は『簾中抄』に「六条のぼうもん、万里のこうぢ、とほるの大臣のいゑ」、「二中歴」に「元六条院、六条北、京極東、融大臣家」、「拾芥抄」に「六条ノ坊門南万里小路東八町云云」とある。『清辨眼抄』が記す焼亡範囲からはわずかに外れるか。河原院の南の地域は、鴨川に近いどころか流路や河原自体が平安京城に食い込んでいたため、河原院は、平安京の事実上の東南端であった（桃崎有一郎一一六―一一七頁）。○名所卅余箇所、公卿家十七箇所焼ニケリ 類似した記述は諸本に見られるが、この一節の挿入される箇所は諸本によって異なる（「折節異ノ風ハゲシク吹テ、乾ヲ指テ燃ヒロゴル」項参照）。〈盛〉は公卿邸宅焼亡を列挙し始めたところで、「融大臣塩釜ヤ川原院ヨリ焼ソメテ」の後に入るが、諸本は焼亡各所を挙げる前か後にあげるかで異なる。〈四〉は右の焼亡箇所に続けて、「……穀藏院天階立不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其<sub>一</sub>の数<sub>二</sub>」(六四左―六五右)とするのみ。〈長〉「名所廿一ヶ所、公卿の家十七ヶ所、焼にけり。殿上人、諸大夫の家は数を知らず」(一一―一二頁)。〈闘・延・南・屋・寛〉「加様ノ名所三十余ヶ所、公卿ノ家ダニモ十六ヶ所焼ニケリ。マシテ殿上人諸大夫ノ家ハ数ヲ不知、地ヲ私テ焼ニケリ」(〈延〉巻一一一〇六ウ―一〇七オ)。

ただし、〈南・屋〉は前半を「名所共廿余ヶ所」(〈南〉一四四頁)、〈中〉は「めい所廿よか所、くぎやうの宿所だに十七か所」(上―六五頁)で、〈屋〉は後半(「マシテ殿上人」以下)なし。〈盛〉はこれに沿って、以下三十箇所以上の名所をあげる。「名所」は、『簾中抄』に「名所」、「二中歴」に「名家歴」、「拾芥抄」に「諸名所部」として挙げられる、古来より知られた邸宅を指す。「公卿家」はそれに対して、焼亡当時の公卿の邸宅を指す。ここに列挙されるのは名所のみで、公卿家は見えない。その名所の中でも、特に歴代の天皇の御所となったものが多く取り上げられていることが注意される。それらが灰燼と帰したことを記し、世の衰亡を慨嘆するのであろう。〈四評釈〉も指摘するように、「山王の怒りによって平安文化の粹を集めた数々の名所が焼失、果ては内裏が炎上する」というところに末世的現実を確認するのがこの章段のテーマであり「誰がどのような被害をこうむったか等という同時代的な関心は、平家物語にはもともと無いようだ」(三二―三三頁)。『玉葉』では、「公卿家 関白〈錦小路大宮〉、内大臣、源大納言(中略) 已上公卿十四人云々」とする。『顕広王記』二十八日条裏書に「公卿・王臣家多以為灰燼」、「清辨眼抄」に「惣遭火災公卿侍臣等。関白殿御所(中略)已上十三家也」(群書七―六一九頁)、『方丈記』に「其ノタビ、公卿ノ家十六焼ケタリ」(新大系五頁)。〈長・盛・中〉の「十七箇所」も根拠のない数字ではないだろう。○染殿ト申ハ忠仁公ノ家也〈正親町京極〉 藤原良房(忠仁公)の邸宅。『簾中抄』に「京ごくおほぎまち、忠仁公のいゑ」、「二中歴」に「正親町南、富小路東、清和皇居清和院北、或本京極西」。場所まで示すのは〈盛〉のみ。焼亡域からは大きく外れる。○小一条殿ト申ハ貞仁公ノ家トカヤ〈近衛東洞

院」藤原良房から基経、忠平（貞信公）へと伝領された。『簾中抄』「このゑひんがしのとうゐん、又むなかつたといふ、貞信公のいゑ」、「『二中歴』」「二条北、東洞院西、一云款冬殿、師尹公家、或抄云、小一条（宗形）神鳴小路北、東洞院西、室町東、近衛南、貞信公宅、師尹大臣給之、及師季云々。」「『二中歴』の前半は、次々項の「小二条院」との混乱であろう。場所まで示すのは〈盛〉のみ。これも焼亡域からは大きく外れる。○染殿ノ南ニ八清和院 染殿の南半分を清和天皇の後院としたもの。『簾中抄』「そめどのゝみなみ」、「『二中歴』」「土御門北、京極西、染殿南、兼通伝領之」。〈延〉のように、染殿の次に記されるのが良い。焼亡域から大きく外れる。○小二條款冬殿ト申ハ二条東洞院也」もと源俊賢の邸宅、後に藤原道長が新造している。『簾中抄』「二条ひんがしのとうゐん、又やまぶきどのといふ」、「『二中歴』」「二条北、東洞院西、簾中抄云、又号山吹殿云々、俊賢卿家」。焼亡域からは北東域に位置し外れる。○三条宮ノ御子左ノ小蔵宮トゾ申ケル〈盛〉のみに見える名所。御子左家のこと。兼明親王の邸宅、後に俊成・定家の祖藤原長家が居住。『三条宮』は「三条大宮」の誤り。『簾中抄』「御子左」の項「三条大宮、おぐらの宮のいゑ」、「『二中歴』」「三条北、大宮東、二町、兼明親王家、小倉宮」。焼亡域内に位置する。○照宣公ノ堀河殿 藤原基経（昭宣公）の邸宅、堀河天皇の里内裏となった。『簾中抄』「三条はりかは、昭宣公のいゑ」、「『二中歴』」「二条南、堀川東、昭宣公家、或云大炊御門堀川」。三条ではなく二条が正しい。『拾芥抄』を含めいずれも「堀川院」とする。焼亡域内に位置する。○大炊御門冷泉院 「大炊御門の冷泉院」の意であろう。早く嵯峨天皇の後院とされ、後に里内裏としても使用された。〈盛〉

のみに見える。『簾中抄』「おほろのみかどほりかは」、「『二中歴』」「二条北、大宮東四町、簾中云、大炊御門堀川、嵯峨上皇御所、元冷然院、依「火事」改泉。『清解眼抄』の図には示されないが、大内裏の東南端脇に位置することからも、焼亡域内に位置するか。なお、『今昔物語集』巻二十七第五「冷泉院水精、成人形被捕語」によれば、平安末期には、冷泉院は、水の精が住む荒れ果てた地になっていたようである。○中御門ノ高陽院 もと賀陽親王、後に藤原頼通の邸宅。〈延〉「高陽院」。『簾中抄』「中のみかどほりかは、かやのみこのいゑ」、「『二中歴』」「中御門南、堀川東、二町、賀陽院親王家」。高陽院は、天永三年（一一二二）に焼失し、元久二年（一一〇五）十二月に再建（『仙洞御移徙部類記』）されるまで、再建されなかったようである。焼亡域からはやや外れるか。○寛平法皇ノ亭子院 宇多法皇の御所として知られる。『簾中抄』「七条のぼうもん、にしのとうゐん、寛平法皇御所」、「『二中歴』」「寛平法皇御所、七条坊門南、油小路東」。火元からは、西南に位置し、焼亡域からは大きく外れる。○永頼三位ノ山井殿 藤原永頼の邸宅、後に道長の手に渡っている。『簾中抄』「三条のぼうもん京極、永頼三位家」、「『二中歴』」「京極西、三条坊門北、永頼三位家、抄云山城国調所悪所」。焼亡域からは外れる。○鷹司殿、大炊殿 とともに〈盛〉のみに見える。鷹司殿は『簾中抄』「つちみかど万里のこうぢ」、「『二中歴』」「土御門南、富小路西、抄云土御門町小路、従一位倫子家宅、宇治殿母儀」。焼亡域からは大きく外れる。大炊殿は『簾中抄』「『二中歴』」「拾芥抄」に見えない。戸田秀典（一三九八—一三九九頁）によれば、大炊殿と呼称された建物としては、『九条家本延喜式所載平安京図』に載る二つが注目される。一つは、大炊御門



北東洞院東の大炊殿、この御所では白河上皇が摂政藤原師実の大炊御門第を始めて仙洞御所に用い、その後、堀河・鳥羽天皇の里内裏となる。近衛天皇皇后多子も御所としたが仁平二年（一一五二）に焼亡している。今一つは、大炊御門南西洞院東の大炊殿。藤原師実第で、堀河天皇が行幸している。これ以外にも、保元の乱の折に崇徳院方の御所となった白河北殿も、〈延・長〉や半井本『保元物語』によれば、大炊殿と呼称されている。いずれを指すのか判断したいが、いずれも安元当時に存在していたか不明であると同時に、焼亡域からは外れる。○押小路町ノ鴨井殿『拾芥抄』『鴨院』によれば、「或昔在古井鴨常居云々」という。鴨井殿は鴨院とも言う。〈四・長・寛・中〉「鴨居殿」。〈延〉「鳩井殿」は誤り。『簾中抄』は「鴨院」として「をしこうちむろまち」、「二中歴」も「鴨院」として「室町西、押〈或作鴛〉小路南堀川院生所上皇御誕生所（後略）」。『拾芥抄』も「鴨院」とするが、注には「或非院字、鴨井也云々」とも記される。『清辨眼抄』は、「鴨居殿御倉」と記し、焼亡域からわずかに外れる。○六条院〈盛〉のみに見える。六条院に該当する邸宅としては、白河天皇の御所となった六条内裏（六条北東洞院東、古くは釣殿院と称した）、白河上皇御所の六条院（六条坊門南高倉東）、宇多上皇の御所となった中六条院（六条北東洞院西）、鳥羽・近衛天皇の御所となった小六条院（楊梅北鳥丸西）、源顕房の邸宅であった六条殿（六条北室町西、通称六条池亭）、後白河法皇御所であった六条殿（六条北西洞院西）、大中臣輔親の邸宅であった六条院（九条家本延喜式所載平安京図。六条南鳥丸西、通称海橋立）が考えられる。このうち六条内裏は『簾中抄』『つりどの院』に「いまの六条の院也」、「二中歴」「釣殿

院」に「今六条院也」、「拾芥抄」「釣殿院」に「六条北東洞院東、号六条院」（後略）、同「六条内裏」に「北六条坊門、南六条二丁、東洞院東高倉二丁（後略）」とあり、中六条院は『拾芥抄』『中六条院』に「六条北東洞院西、寛平御所（後略）」、小六条院は『二中歴』『北院』に「小六条殿、小一条院伝領」、「拾芥抄」「北院」に「楊梅北鳥丸西、又号小六条（後略）」とあり、輔親の六条邸は『拾芥抄』『六条院』に「六条南、室町東、号海橋立、有連理樹、祭主輔親家」とある。なお、河原院も六条院と称されることがあり『二中歴』『河原院』に「元六条院、六条北、京極東、融大臣家」、また同じ屋敷を「六条院」「東六条院」「中六条院」「河原院」などと称することもあり、複雑である（増田繁夫）。〈盛〉がいずれを想定しているかは不明だが、右掲の『簾中抄』『二中歴』『拾芥抄』に「六条院」と明記されるのは、六条内裏と輔親の六条邸。なお、輔親の六条邸は、引用のとおり『拾芥抄』に別称「海橋立」とされていて、〈盛〉はこの後<sup>39</sup>で「天ノ橋立」をあげているので重複する。いずれにしても焼亡域から外れる。○小松殿〈盛〉のみに見える。『簾中抄』「おほろのみかどまち」、「二中歴」「大炊御門北、町東、光孝天皇御誕生所」。『平安時代史事典』によれば、光孝天皇の誕生所とするのは誤伝。焼亡域からは外れる。○公任大納言ノ四条殿 藤原公任の邸宅、後冷泉天皇などが里内裏とした。『簾中抄』に「四条の宮」として「公任大納言のいゝ、紫雲たつところ」、「拾芥抄」も同様。『二中歴』には見えない。焼亡域内に入る。○良相公ノ西三条 藤原良相の邸宅。『簾中抄』『良相大臣家』、『二中歴』『朱雀西、三条北、良相公家』。『清辨眼抄』では焼亡域内に入っているように見えるが、朱雀大路に隔てられていることから不明。○高明御

子ノ西宮 源高明の邸宅。他に〈四〉のみに見える。「西宮」は『簾中抄』「たかあきらのみこのいゑ」、「二中歴」「四条北、大宮東、高明公家、一本云、錦小路南、朱雀西」。『拾芥抄』は「四条北、朱雀西」。朱雀西とした場合、次項の朱雀院と場所が重なる。「右京四条一坊十一・十二町は、醍醐天皇第十皇子である源高明（九一四〜九八二年）の西宮、西宮殿とも呼ばれた2町分を占有する第宅があったとされる場所」（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告）である。『今昔物語集』（巻二十一・第十三）によれば、（右京四条一坊）十一町はもともと湿地で人が住めなかった土地であったが「上綾ノ主」といわれた兵衛佐某が安価で購入し、難波の葦を敷いて土を盛り、家を建てられるようにした。その後、十二町に住んでいた源定が買い取って二町分の敷地としたのが、今の西宮であるとする。右京四条一坊十一・十二町は、四条北・皇嘉間西となる。○三条朱雀二朱雀院 〈盛〉のみに見える。『朱雀院』は朱雀大路に面して造られた累代の後院。『簾中抄』「三条朱雀四丁、後院と云」、「二中歴」「三条朱雀、又云後院」。朱雀院は大内裏の外であるが、『拾芥抄』では「宮城部」の「諸院」にあげられる。『清辨眼抄』は、朱雀院の南に面する俊盛卿倉まで焼失したように記す。○神泉苑 大内裏の南に接する庭園。『簾中抄』「一条大宮八町」「二中歴」も同じ。『朱雀院』と同様、『拾芥抄』では「諸院」にあげられる。焼亡域内に入っているが詳細は不明。○勸学院 藤原氏の学生のための教育機関。『簾中抄』「二条ばうじやう」、「二中歴」「三条坊上」。『朱雀院』と同様、『拾芥抄』では「諸院」にあげられる。『清辨眼抄』に、「勸学院大学寮（但廟堂并門許所残也）同時焼亡」とある。○奨学院 勸学院に倣ってその西に作られた皇室子孫の教育機関。〈盛〉

のみに見える。『簾中抄』「勸学院のにし」、「二中歴」も同じ。『朱雀院』と同様、『拾芥抄』では「諸院」にあげられ、「二条南、朱雀西」とし、一方で「或云朱雀門前」とする。朱雀の東が良い。焼亡域内に含まれる。○穀藏院 非常用の穀倉を管理する。『簾中抄』朱雀門のまへ、「二中歴」「朱雀院門前」とする。『拾芥抄』は「二条南朱雀西、在大学西」とし、「或云朱雀門前云云」ともする。『朱雀院』と同様、『拾芥抄』では「諸院」にあげられる。焼亡域内に含まれるが詳細は不明。○東三条 藤原良房により創建、この後摂関家嫡流に伝領された。『簾中抄』「二条まち」、「二中歴」「二条町」「二条南西北二丁敷」、良房公家、又兼家公家、或説重明親王家、又白河、又染殿。『清辨眼抄』の焼失図によれば、東三条の西南端を焼失したように記す。○近衛院 〈盛〉のみに見える。藤原忠通の邸宅を近衛殿と称したが、これ以外に、戸田秀典によれば、『九条家本延喜式所載平安京図』に載る近衛殿（近衛天皇がこの皇居で崩じている。近衛北室町東）もある。近衛院や近衛殿といった名所は、『簾中抄』「二中歴」「拾芥抄」いずれにも見られない。あるいは近院を誤写したもののか。『近院』<sup>こんいん</sup>はもと源能有の邸宅、後に藤原基房の邸宅となり松殿と呼ばれた。『簾中抄』「能有大臣のいゑ、かすがからすまろ、いまのまつ殿」、「二中歴」「春日北、烏丸東、未申角四分之一、能有大臣家、今云松殿也」。「近院」を記載するのも〈盛〉のみ。なお、〈闕〉「能有大臣本院殿」（巻一上―三八ウ）は、「近院」と「本院」を混同していることになる。近院とすれば焼亡域外。○滋野井 「滋野院」とも。平安初期の文人滋野貞主の邸宅。〈盛〉のみに見える。『簾中抄』「しげの院」「貞主がいゑ」、「二中歴」「滋野院」「貞主卿家 イ中御門北、西洞院西イ東」。

『拾芥抄』は「滋野井」とする。高陽院の東北端に面する。焼亡域からはやや外れるか。○本院 藤原時平の邸宅。『簾中抄』「時平大臣のいゝ、中御門ほりかは」、『二中歴』「中御門北、堀川東、時平大臣家」。滋野井の西隣に位置する。焼亡域内かは微妙な位置。○小野宮 もと惟高親王の邸宅、小野宮家に伝領された。『簾中抄』「これたかのみこのいゝ、おほるのみかどからすまろ」、『二中歴』「大炊御門南、烏丸東、惟喬親王家」。焼亡域からは外れる。○冬嗣大臣ノ閑院殿 冬嗣創設の邸宅。里内裏としてしばしば使用され、安元の大火の時には御所であった。『簾中抄』「冬嗣大臣のいゝ、二条にしのとゝるん」、『二中歴』「二条南、西洞院西、冬嗣大臣家（後略）」、『玉葉』に「於閑院者免了」、『愚昧記』に「人々云、閑院通了云々」とあるように、焼亡からは免れている。但し、『清解眼抄』の焼亡図では、南端が焼失したかのように記す。大部分は焼失を免れたのであろう。○北野天神紅梅殿 菅原道真の邸宅。『簾中抄』「きたのゝ御いゝ、五条のばうもんまち」、『二中歴』「町尻西、五条坊門北町西、菅家（北野）御家」。焼亡域内に位置する。○梅苑 大江朝綱の邸宅。『簾中抄』「二条京極」、『二中歴』「二条南、京極東、朝綱卿家」。『兼邦百首哥抄』「梅園（二条までのこうじ）」（統群書三下―七〇二頁）。いずれの地としても、焼亡域から外れる。○桃苑 大内裏北東部に位置した園。『簾中抄』「二条大宮」、『二中歴』「二条大宮、園池東并北、保光卿家（後略）」、『拾芥抄』には記載なし。『兼邦百首哥抄』「桃園（二条京極）」（統群書三下―七〇二頁）。なお、桃園の伝領についての考察としては、高橋康夫に詳しい。焼亡域からは外れる。○高松殿 源高明の邸宅で女子明子（道長妻）が伝領。後白河天皇が里内裏とし、保元の乱では天皇

方の拠点となった。平治元年（一一五九）に焼亡している。『簾中抄』「あねのこうぢ、にしのとゝるん」、『二中歴』「三条坊門南、西洞院東、或云、姉小路北、高明左大臣家」。焼亡域内だが、『清解眼抄』の焼亡図には、「高松殿空地」とある。○中務ノ宮ノ千種殿 村上天皇皇子、具平親王の邸宅。『簾中抄』「六条のばうもん、にしのとゝるん、中務宮のいゝ」、『二中歴』「六条坊門北、西洞院東、中務卿具平親王家（後略）」。焼亡域からは外れる。○枇杷殿 藤原仲平が伝領し、枇杷大臣と称された。一条天皇や三条天皇が里内裏とした。『簾中抄』「このゑむろまち」、『二中歴』「近衛南、室町東、仲平公家」。〈盛〉のみに見える。焼亡域からは外れる。○一院 「一条院」のことか。「一条院」は藤原為光の邸宅、後に一条天皇がしばしば里内裏とした。『簾中抄』「二条大宮」、『二中歴』「一条南、大宮東、為光公家」。〈盛〉のみに見える。一条院であれば焼亡域から外れる。○京極殿 藤原道長の邸宅。『簾中抄』「つちみかど京ごく、大入道殿のいゝ」、『二中歴』「土御門南、京極西、大入道（道長公）家、其後南町被加入、抄云、後一後朱後冷三代宮生給云々」。焼亡域からは外れる。○天ノ橋立 二至マデ、一宇モ残ラズ焼ニケリ。マシテ其外家々ハ数ヲ知ズ（四）『天階立』（六五右）。前掲「六条院」項で示したように、『拾芥抄』に「六条南、室町東、号海橋立、有連理樹、祭主輔親家」とあり、輔親の邸宅を海橋立と称した。〈校注盛〉も頭注でこれを引く。しかしこのみ「天ノ橋立」という通称を用いるのも違和感がある。おそらく〈盛〉作者は天橋立を具体的にどここの邸宅を指すのかまで意識することなく、風流な呼称「融大臣塩釜や川原院」に始まり「天の橋立」で終えるという、名所尽くしの趣向に基づいた配置であろう。同じく

河原院に始まり天橋立で終わるのが〈四〉であり、両書は収載する名所の数に大きな隔たりがあるものの、共通した型に基づくと思われる。

○ハテハ大内ニ吹付タリケレバ 〈四・闘・延・長・南・屋・覚・中〉同じ。この時の大内裏は、信西の指揮の下、保元の乱の処理が終わった保元二年（一一五七）三月に着手、復興したものであり（五味文彦）、同十月には後白河法皇が七十五年ぶりに新造内裏に遷御したのであった。しかし、平治の乱で二条天皇が脱出して以来再び里内裏の時代となり、「内裏は、その生命を完全に奪われてしまう平安末期・鎌倉初期の大火に見舞われるまでに、すでに御在所としての役割を失なっていた」（村井康彦一八九頁）。その大内裏の焼亡は、人々に王政の衰微を決定的衝撃的に印象づけることになったであろう。以下、大内裏の焼亡箇所の列挙について、〈盛〉のあげる箇所に対する、諸本の有無、異同を表にする。掲出順に番号を振り、呼称が〈盛〉と異なるものについては併せて記した。

〈盛〉	〈四〉	〈闘・延・長〉	〈南〉	〈屋〉	〈覚〉	〈中〉
朱雀門 応天門 会昌門 陽明 待賢 郁芳門 清涼 紫宸 大極殿 豊樂院 天透垣	① ② ③	① ② ③	① ② ④ ③	① ② ③ ④	① ② ③ ④ ⑤	① ② ③ ④ ⑤

龍ノ少路 殿上ノ小 庭 延喜ノ荒 海 見参ノ立 板 動ノ橋 諸司八省	⑥ ⑦朝所 ⑧官庁	⑥ ⑦大学寮 ⑧真言院	⑥ ⑦朝所	⑤ ⑥アイタ ム所	⑥ ⑦朝所	⑥ ⑦あひた ん所 のちやう く大がく れう
--	-----------------	-------------------	----------	-----------------	----------	---------------------------------------

※前述のとおり、〈延〉は先に内裏の焼亡箇所をあげるため、⑧真言院の後、前表①勸学院に移る。〈闘・延・長・中〉の大学寮は、正確には大内裏の外、朱雀門の南東に位置する。

諸本に共通してあげられるのは、朱雀門・応天門・会昌門・豊樂院・諸司八省である。大極殿・朝所をあげるものも多いが、〈盛〉は朝所をあげない。古記録類では〈盛〉と一致するものには傍線を付す）、『玉葉』『大極殿已下八省院一切不残、会昌門、応天門、朱雀門、神祇官（八神御正体焼失、民部省（図帳倉不焼亡）云々、主計寮、主税寮、式部省、真言院（両界曼陀羅、同以焼亡）、主水司、大膳職、大学寮（孔子御影奉取出之、勸学院等云々）、『愚昧記』『人々云、閑院通了云々。大極殿・小安殿・廻廊悉以焼了。并応天・朱雀門・大学寮（廟蔵不焼云々）・神祇官（八神殿并蔵物不焼云々）・真言院（弘地）為灰燼云々。民部省・大膳職・式部省南門・兵部省門・二寮・主水司、出五条富小路及大極殿、実是天之令然也』『仲資



王記」「及大内」、八省、大極殿、大学寮、勸学院、神祇官、真言院、大膳職炎上了。民部、式部、兵部省、主計、主税寮等併以朱雀門、応天門、会昌門同焼了。主水司同焼了。『顕広王記』「余炎遂及禁中、真言院、大学寮、勸学院・大膳職<sup>マク</sup>地焼、神祇官八神殿、柏殿、御倉焼了。韋鑿門、朱雀門、応天門、会昌門等、并八省大極殿<sup>マク</sup>地了。而楼廻廊併以焼了。式部省・民部省・主計・主税・水主司・真言院・諸卿文書・史長者家文書、各皆悉焼失了。『百練抄』「八省、大極殿、小安殿、青龍白虎楼、応天・会昌・朱雀門、大学寮、神祇官、八神殿、真言院、民部省、式部省、南門、大膳職、勸学院等<sup>マク</sup>地焼亡。大内免其難。『清解眼抄』「先大学寮、次応天門并東西楼。此間真言院焼亡、自応天門移会昌門、次移大極殿。其間東西廊焼亡、大極殿焼亡、神祇官大膳職共焼亡。此間又式部省又民部省焼亡。又右兵衛府、典藥寮門等四足焼亡。此後朱雀門焼亡。勸学院、大学寮（但廟堂并門許所<sup>レ</sup>残也）同時焼亡。この他『方丈記』にも「果テニハ、朱雀門・大極殿・大学寮・民部省ナドマデ移リテ、一夜ノウチニ塵灰トナリニキ」（新大系四〇五頁）とある。これらの記述を見るに、火は朱雀門の南、神泉苑の西に位置した大学寮から大内裏に延焼し、朱雀門、応天門、会昌門、大極殿と焼きながら北上し、さらに東西に位置するいくつかの省庁にも広がりつつ、大内裏のほぼ中心に位置する真言院を焼失させるに至ったようである。したがって諸本があげる、朱雀門・応天門・会昌門・大極殿・豊楽院・諸司八省はほぼ史実に基づくようであるが、豊楽院のみ古記録には確認できない。豊楽院は焼失した大極殿・八省院のすぐ西に位置する。しかし、豊楽院は、康平六年（一〇六三）の焼亡後は再興されず、平安末期には「無其跡」（『玉葉』寿永二年九月

十九日条）という状態であった（野口孝子二〇頁）。十二世紀半ばの時点では、朱雀門を入れて応天門の後に広がる朝堂院と豊楽院の北部は既に「野」化し、それが内野と称されるのもあり得たという。つまり、当時の内野は、おおよそ大極殿のみ残る狭義朝堂院とその隣の豊楽院跡一帯を指し、なかならずそこは「通り」として意識され、そのように利用される場であったとする（菅野扶美三〇五頁）。〈延全注釈〉も「記録類に豊楽院の焼亡が記されないのは、既に実態が存在しなかったためか」（二八〇三頁）とする。けれども、『平家物語』は原態からこれを記したのである。また八省のうち、式部省、民部省、兵部省は焼亡したようであるが、その他の大蔵省、刑部省などはいずれの記録にも見られない。平家物語諸本の「諸司八省」は、諸記録に見える八省院（朝堂院。大極殿の南、その正門が応天門、会昌門）を誤認したのかもしれない（後掲「諸司八省」項参照）。逆に諸記録があげる真言院を記すのは〈闕・延・長〉のみ。『玉葉』では三十日条に兼美が大極殿・真言院・八神殿焼亡の先例を尋ねていて、その結果「真言院・大学寮・勸学院、此三ヶ所未<sup>レ</sup>遭此災<sup>一</sup>歟」としている。今回の焼亡が、貴族達にとっても、俄に記憶・記録で先例を確認できない大惨事であったことが窺える。このように平家物語諸本が比較的忠実に史実を反映しているのに対して、〈盛〉は独自の記載が多い。ここでも史実を離れ「大内裏名所<sup>レ</sup>尽くし」の趣を持たせているかに見える。ところで、〈四・闕・長・南・屋・覚・中〉はこの後、「家々の日記、代々の文書、しざいざうぐ、七ちんまんぼう、さながら灰塵となりぬ。人の焼しぬる事、数百人、牛馬犬の類、かずを<sup>レ</sup>知ず。そうじて都、三分「は焼にけり」（〈長〉1—11—113頁）といった被害の状況を

総括した一節が入る（〈南・屋・覚〉は傍線部分なし）。「家々の日記、代々の文書」がまずあげられるのは、「家」の「文書」の焼失が、「家」自体の消滅と同様のものと理解され、さらに「家」のもつ「文書」がまったくの私的な所有物ではなく、一面では国家のものと認識されていた」からであり、『玉葉』でも文書の焼失を「我朝衰滅」と記している（松蘭斎三五頁。また貴族の家の火災ではまず文書が持ち出されたことは大村拓生も詳説する。一〇八—一四頁）。この『平家物語』の叙述は早くから指摘されているように、『方丈記』『或ハ煙ニムセビテ倒レ臥シ、或ハ焰ニ眩レテタチマチニ死ヌ。或ハ身ヒトツ辛ウシテ通ル、モ、資財ヲ取出ルニ及バズ。七珍万宝サナガラ灰燼トナリニキ。其ノ費エイクソバクゾ。其ノタビ、公卿ノ家十六焼ケタリ。マシテ、其外カゾヘ知ルニ及バズ。惣テ、都ノウチ三分ガ一二及ベリトゾ。男女死ヌルモノ数十人。馬牛ノタグヒ辺際ヲ不知』（新大系五、六頁）の影響によるものである。『愚昧記』に「家二万余家云々。町数二百余町焼云々。希代之災也」、『顯広王記』に「凡百三十余町之中、所在民家及貴家等、皆悉焼亡了」、『百練抄』に「凡百八十余町、此中人家不知幾万家」とする。これらに対して、〈盛〉にはこれに類する記述が無く「マシテ其外家々ハ数ヲ知ズ」とするのみ。ここでの目線が京に住む人々やその資産に向けられていないことはもちろん、貴族の現実的な感覚にも触れていないのは明らかである。○朱雀門、応天門、会昌門 火は朱雀門から大内裏に延焼し、朱雀門の北にある応天門、さらにその北の会昌門へと移った。『玉葉』及び諸記録にこれらの門が焼亡したことが記されるのは、前項に見たとおり。○陽明、待賢、郁芳門 いずれも大内裏東面の門。〈南〉が待賢門を記す

他は、〈四・闕・延・長・屋・覚・中〉いずれにも記されない。この時、待賢門のすぐ傍にある大膳職が焼亡したことは『玉葉』『愚昧記』などに記されるが、これら三門のことはいずれにも記されない。おそらく焼亡することはなかったのだろう。○清涼、紫宸、大極殿、豊

楽院 「ハテハ大内ニ吹付タリケレバ」項で示したように、大極殿が焼亡したことは諸記録から確認できるが、清涼殿、紫宸殿を含む内裏にまで延焼したことは確認されない。清涼殿、紫宸殿をあげるのは〈盛〉のみ。〈盛〉が独自に付加したものであろう。三年後の治承四年（一一八二）四月二十二日には安徳天皇が紫宸殿で即位の義を執り行っている。『玉葉』「此日天皇即位於紫宸殿」〈春秋三歳〉、大極殿火災以降、未企土木之故也。紫宸殿での即位の先例はあまり芳しいものではなかったが、大極殿が焼失していたために、便宜の措置が取られたという（元本泰雄一五一頁）。○天透垣、龍ノ少路、殿上ノ小庭、延喜ノ荒海、見参ノ立板、動ノ橋 いずれも〈盛〉のみに見える。「殿上ノ小庭」は、清涼殿の殿上との間の南側の小庭。卷一・五節夜闇打「家貞ハ布衣下ニ萌黄ノ腹巻衛府ノ太刀佩、烏帽子引入袖纈テ殿上ノ小庭ニアリ」（一—一四—一五頁）。「延喜ノ荒海」は清涼殿東孫廂北にある荒海の障子。卷二・二代后「金岡ガ書ケル荒海ノ障子ノ北ナル御障子ニハ、遠山ノ有明ノ月ヲゾ書レタル」（一—八九頁）。「見参ノ立板」は同じく清涼殿東孫廂南にある参上を予告するために踏み鳴らす板。天透垣（〈近〉「あまのすいかい」、〈逢・静〉「天透垣」、龍ノ少路（〈逢・静〉「龍小路」、動ノ橋（〈近〉「うごきはし」、〈逢・静〉「動橋」）は不明だが、この配列からして清涼殿周辺の場所であろう。前項のとおり、清涼殿、紫宸殿は焼亡していないため、これらも焼けたとは考

えられず、内裏の名所、名物を並べようとしたのだろう。○諸司八

省〈四・闕・延・長・南・屋・覺・中〉も同じ。諸記録に焼亡が記されるのは八省のうち、民部省、式部省、兵部省で、その他の焼亡は確認されない。『百練抄』に「火焰如飛、八省、大極殿、小安殿、(中略)民部省、式部省、南門、大膳職、勸学院等、地焼亡」とあるうちの八省、あるいは『仲資主記』に「及大内、八省、大極殿、大学寮、勸学院、神祇官、真言院、大膳職、上上了。民部、式部、兵部省、主計、主税寮等」とあるうちの八省は、八省院(朝堂院)を指す。『平家物語』に見える「諸司八省」という用語は古記録には使用例がない。広義の「諸

# 【引用研究文献】

\* 大村拓生「一〇〜一三世紀における火災と公家社会」(日本史研究四二二号、一九九六・12。『中世京都首都論』吉川弘文館二〇〇六・1再録。引用は後者による)

\* 五味文彦『平家物語、史と説話』Ⅱ第一章「信西政権の構造」(平凡社一九八七・11)

\* 菅野扶美「内野通りの西の京」論(国語国文八九四号、二〇〇九・2)

\* 高橋康夫「桃園・世尊寺」(『平安京の邸第』望稜舎一九八七・5)

\* 戸田秀典「平安後期における京内権者の第宅」(『末永先生米壽記念獻呈論文集』坤、奈良明新社一九八五・6)

\* 野口孝子「平安宮内の道・馳道・置路・壇倭」(『古代文化五五巻七号、二〇〇三・7』)

\* 増田繁夫「河原院哀史」(『論集平安文学』1『文学空間としての平安京』勉誠社一九九四・10)

\* 松蘭斎『日記の家―中世国家の記録組織―』(吉川弘文館一九九七・8)

\* 三木紀人「転形期の文学精神―火の記憶と形象、そのさまざま―」(『国文学解釈と鑑賞別冊『平家物語上』一九七八・3)

\* 村井康彦『宮城図』解説(『陽明叢書』宮城図一九九六・12)

\* 元木泰雄『平清盛の闘い―幻の中世国家―』(角川書店二〇〇一・2)

\* 桃崎有一郎『平安京はいらなかった 古代の夢を喰らう中世』(吉川弘文館二〇一六・12)

司」は八省も含む諸官庁という意味になるので、さらに「八省」をあえて付け加える意味はない。狭義の「諸司」は八省より規模の小さい諸官庁を意味し、八省と狭義の諸司を併記するのであれば「八省・諸司」という順序でなければならない。二官八省などという律令制官司をさす「八省」という語は、少なくとも院政期の貴族日記にその用例はない。逆に八省院を「八省」と省略することは古記録では日常的な用語である。『平家物語』の「諸司八省」は八省院から離れ、諸官庁すべてという意味合いを持たせているか。

めくらのなひ  
盲ト

1 大炊御門堀川ニ、<sup>2</sup>盲ノ占スル入道アリ。<sup>3</sup>占云言、<sup>4</sup>時日ヲ<sup>5</sup>違ズ。人皆サスノミコト思ヘリ。「<sup>7</sup>焼亡」ト<sup>8</sup>旬ケレバ、此<sup>9</sup>盲目「<sup>9</sup>何ク候ゾ」ト問。<sup>10</sup>火本ハ<sup>11</sup>樋口富小路トコソ聞「ト云。盲シバシ打案ジテ、<sup>12</sup>戯呼、一定此火ハ是様ヘ<sup>13</sup>可来焼亡也。ユ、シキ<sup>14</sup>大焼亡カナ。在地ノ人々モ、家々<sup>15</sup>壊儲、<sup>16</sup>物共シタ、メ置ベキゾ」ト云。聞者皆ヲカシト<sup>17</sup>思テ、「<sup>18</sup>樋口ハ遙ノ下、<sup>19</sup>富少路ハ<sup>20</sup>東ノ端、サシモヤハ有ベキ。<sup>21</sup>イカニト意得テカクハ云ゾ」ト問ケレバ、「<sup>22</sup>占ハ推条<sup>23</sup>口占トテ、火口トイヘバ、<sup>24</sup>富少路トイヘバ、<sup>25</sup>熈ハ<sup>26</sup>天狗ノ乗物也、<sup>27</sup>少路ハ<sup>28</sup>歩道也。<sup>29</sup>天狗ハ<sup>30</sup>愛宕山ニ住<sup>31</sup>ニバ、天狗ノシハザニテ、<sup>32</sup>巽ノ樋口ヨリ<sup>33</sup>乾ノ<sup>34</sup>愛右ヲ指テ、<sup>35</sup>筋違サマニ焼ヌト覚ユ」トテ、<sup>36</sup>妻子引具シ、<sup>37</sup>資財取運テ逃ニケリ。人<sup>38</sup>嗚呼ガマシク思ケレ共、<sup>39</sup>焼テ後ニゾ思合ケル。

【校異】1 底・近・静 以下「焼テ後ニゾ思合ケル」まで一字下げ。なお、〈近〉合点あり。行の冒頭に「盲トコト」と傍書。2 〈近〉「めくらの」、〈蓬〉「亡目の」、〈静〉「盲の」。3 〈近〉「うらなひ」、〈蓬〉「占」、〈静〉「占」。4 〈近〉「ことば」、〈蓬〉「事」、〈静〉「こと」。5 〈近〉「じじつを」、〈蓬〉「時日を」。6 〈近〉「かへず」、〈蓬・静〉「たかへず」。7 〈近〉「ぜうまうと」、〈蓬〉「焼亡と」、〈静〉「焼亡と」。8 〈近〉「まうもく」、〈蓬〉「めくら」、〈静〉「盲は」。9 〈蓬〉「何ク候ゾ」ト問。「火本ハ樋口富小路トコソ聞」ト云。盲なし。「盲（めくら）」の目移りによる脱落であろう。なお、〈近〉「いつく」、〈静〉「どこ」。10 〈近〉「もとは」。11 〈静〉「樋口富小路とこそ」。12 〈近〉「おかしや」、〈蓬・静〉「戯呼」。13 〈近〉「きたるへきぜうまうなり」、〈蓬〉「きたりやきうしなふへき也」、〈静〉「きたり焼亡へき也」。14 〈蓬〉「大焼亡かな」。15 〈近〉「こほまふけ」、〈蓬・静〉「壊儲」。16 〈蓬〉「物とも」、〈静〉「ものとも」。17 〈近〉「おもひ」とし、<sup>18</sup>「の右に「て」を傍記。「<sup>19</sup>」は難読。あるいは「く」か。18 〈静〉「思ひて」。19 〈静〉「富小路は」。20 〈近〉「ひんかしの」、〈蓬・静〉「ひかしの」。21 〈近〉「いかに」、〈蓬・静〉「何と」。22 〈近〉「こゝろえて」、〈蓬〉「こゝろへて」、〈静〉「心えて」。23 〈近〉「くてんとて」、〈蓬・静〉「口占とて」。24 〈蓬〉「もえひろからんす」、〈静〉「燃広す」。25 〈近〉「とびのこちと」、〈蓬・静〉「富小路と」。26 〈近〉「どひは」、〈蓬・静〉「熈は」。27 〈蓬・静〉「小路は」。28 〈近〉「あゆむ」、〈蓬〉「歩の」、〈静〉「歩の」。29 〈蓬〉以下、「焼テ後ニゾ思合ケル」まで一字下げ。一字下げ開始箇所、頁替わりによる誤りか。30 〈近〉「あたごに」、〈蓬〉「あたこの山に」、〈静〉「愛宕山ニ」。31 〈蓬・静〉「辰巳の」。32 〈蓬・静〉「戌亥の」。33 〈近〉「あたごさんを」。34 〈近〉「すちかへさまに」、〈蓬・静〉「すちかへさまに」。35 〈近〉「さいし」、〈蓬〉「妻子」、〈静〉「妻子」。36 〈近〉「おこかましく」、〈蓬・静〉「嗚呼かましく」。

【注解】○大炊御門堀川ニ… この段、盲目のト者が、出火の報を聞いて焼亡の拡大を予言する話、〈盛〉の独自異文。なお、大炊御門堀川は大内裏の東部。大炊御門堀川の西南には前掲焼亡箇所<sup>8</sup>の冷泉院が、北東には<sup>9</sup>高陽院がある。また北西には、神祇官庁がある。『清

に、呪術などを生業としていたように、盲人には特殊な神秘的な能力があるとされた。時には霊界との交渉をも持つことのできる人として遇されたりしたと考えられる。この入道にも、そうした側面を見て良いであろう。○占云言、時日ヲ違ズ「占云言」は、「占ひ云ふ言」と読むか。占い言う言葉は、日時をびたりと言い当てるの意。

○サスノミコ 『平家物語』では安部泰親について、卷十・中宮御産「陰陽頭安部泰親バカリゾ御産唯今ノ時、皇子ニテ渡セ給ベシト申ケル。其詞ノ未終ケルニ皇子御誕生、指神子ト申モ理也」(二一八七頁)、卷十二・二院鳥羽籠居「彼泰親ハ晴明六代ノ跡ヲ伝テ天文ノ淵源ヲ尽シ、占文ノ秘枢ヲ極メタリ。推条ハ掌ヲサスガ如ク、卜巫ハ眼ニ見ニ似タリ。一事モ違事ナケレバ、異名ニハ指神子トゾ云ケル」(二一三六七頁)のように「指御子」と称されたとする。前者は〈四・延・長〉にも見え、後者は地震を占う場面で、諸本に見られる。「サス」は「掌ヲサス」の「指」で、物事をよく指し示すの意か。〈日国大〉に「指神」(天一神の俗称。万事にさし出て邪魔をする神の意)とする語源説をあげ、〈新定盛〉もこの説を採るが、特に泰親の占いが指神と結び付くとも思われない。また『平家物語』では「サスノミコ」はあくまでも泰親の異称であり、〈盛〉は本段の占者に泰親の「サスノミコ」像をそのまま拝借していると言えるだろう。○推条口占「推条」は〈日国大〉「易占の結果をすじみちをたてて説明すること」。前項のように安部泰親は「推条ハ掌ヲサスガ如」しとされた。「口占」は〈日国大〉「人の言葉の様子から吉凶を占うこと」。〈蓬・静〉「口占とて」。〈近〉「くてんとて」は「口占」を「くぜん」と読み転訛したものか、あるいは「口点」と読み誤ったためか。卷二十七・奉幣使定隆死去「源氏

追討ノ宣命ニ、源繁昌ノ口占有トゾ私語ケル」(四一九〇頁)。〈新定盛〉は「推条口占」を「その時とつきに出る言葉によって推理し占う事」(一一三三三頁)とするが、熟語ではなく推条と口占を並列したものである。○火口トイヘバ、燃広ガラン 出火場所の「樋口」を「火口」を読み替える。火口と言う以上、そこから燃え広がるはずだとする。「口占」であるから、人々の口の上る出火場所の通り名から占うのである。○富小路トイヘバ、鶯ハ天狗ノ乗物也「富小路」を〈近〉「とびのこうぢ」、〈蓬・静〉「富小路」とする(校異24参照)。古本節用集類では、「富小路」の読みについて「トミ」「トビ」両様が見られる。例えば、饅頭屋本『節用集』「富小路」(一八二)、易林本『節用集』「富小路」(二四五)に対して、永禄二年本『節用集』「富小路」(二六六)、黒本本『節用集』「富小路」(二二〇)となっている。遠藤邦基は、「中世から近世にかけての多種の辞書類をみると、その間の「ゆれ」の多いのに驚かされる」とし、「節用集類にも、ヒモーヒボ、ムチーブチ、トモシミートモシビ、トミノコウヂートビノコウヂ、シキミーシキビ等の「ゆれ」がみられる」(三頁)とする。遠藤が指摘するように、『日葡辞書』[Catubuge, ru. カタブケ、クル]の項に「B字を用いて [Catubuge, ru と] 書かれるけれども、話し言葉では Mを以て [Catamuge, ru と] 発音される」(『邦訳日葡辞書』一〇五頁)とあり、表記のゆれが音韻の「ゆれ」に直結したわけではないが、「富小路」から「鳶」を連想することは自然であったと言える。また『校注盛』は、『雅言集覧』「とみのを」に「鴟尾」とびをとみといへるは、なだらからにいへる音使也(増補『雅言集覧』上四六三頁)を引く。『天狗草紙』や『是害坊絵』に見られるように、天狗は嘴・



羽など鳶の姿で描かれる。『今昔物語集』巻二十第十一話「近江ノ国、比良ノ山ニ住ケル天狗、鵠ノ形トシテ其池ノ上ヲ飛廻ルニ」（新大系四—二四八頁）、『太平記』巻二十六「怨子嶽比叡山ノ方ヨリ、四方興ニ乗タル物、虚空ヨリ来集テ、此六本杉ノ梢ニジ並居タリケル。……座中ノ人々ヲ見レバ、上座ニ先帝ノ御外戚峯ノ僧正春〔雅〕香ノ衣ニ袈裟懸テ、眼ハ日月ノ如ク光リワタリ、嘴長シテ鳶ノ如クナルガ」（元玖本四—九—一〇頁）、巻二十七「御坐ヲ二帖布タルニ、大ナル金ノ鵠、翅ヲ刷ヒテ著座シタリ。……上座ナル金ノ鵠コソ崇徳院ニテ渡セ給ヘ」（旧大系三—一六〇頁）。また一方で、鳶は天狗の乗り物でもあった。『比良山古人霊託』「頭ならびに身は人のごとくして、その足は鳥に似たり。翅有り。尾は短し。鵠は我等が乗物なり。またただ鵠ばかり飛び行く事もあり」（新大系四七〇頁）。根津本『天狗草紙』三井寺巻には「但知「一切鵠皆是天狗」之文者「仏説鞍馬毘沙門経」乃説歟。（中略）但会申此文「鵠是天狗の所乗也。例如「神明託巫」。非直天狗也」。或又此国の人、「天狗は鵠なり」と思習はせり」（『続日本絵巻』26—七一頁）とあり、鳶を天狗とするか、また天狗の乗り物とするか、解釈が分かれていたようである。なお、〈延・盛〉には、鵠の姿とは微妙に異なる天狗の姿が描かれる。「法皇御灌頂事」に記される松尾明神と後白河院との対話では、天狗の正体を「モロくノ智者、学生ノ、無道心ニシテ、憍慢甚シ。其無道心ノ智者ノ死レバ、必ズ天魔ト申鬼ニナリ候也。其ノ形類ハ狗（盛）は「天狗」、身ハ人ニテ、左右ノ手ニ羽生タリ」（延）巻二—八〇）。本段の天狗像は、これとはやや異なっている。○少路ハ歩道也「歩道」は「あゆむのみち」「ありきのみち」などと読むのだろう（校異28）。ここでは「天

狗の通り道」といった意か。○天狗ハ愛宕山ニ住バ 愛宕山が天狗の住処であることは、巻九・山門堂塔「北京ニハ愛宕、高雄ノ山モ、昔ハ堂塔軒ヲ礪、行学功ヲ積ケレ共、一夜ノ中ニ荒シカバ、今ハ天狗ノ栖ト成ニケリ」（2—二四頁）にも見られる。『是害房絵』「唐ヨリ是害房ト申大天狗ノ首頂、日本へ来レリ。愛宕護山ノ日羅坊ト云、大天狗ニ会テ云」（『室町時代物語大成』八一—九五頁）など、天狗の住処を代表する山であった。天狗と愛宕山の結びつきは早くは『台記』久寿二年（一一五五）八月二十七日条に「唯知愛宕護山天公飛行、未知愛宕護山有「天公像」なる記述が見られ、『明月記』寛喜三年（一二三二）七月二十七日条に「愛宕護山脚天狗之所集歟」とあり、この頃には確実に結びついていたようである（久留島元）。ただ『今昔物語集』では専ら持経者の修行の場として登場し、天狗の住処としては描かれない。また、特に真済が愛宕山の天狗となつて太郎坊と称されたことは有名。〈盛〉巻八・法皇三井灌頂「中比我朝ニ柿本ノ紀僧正ト聞エシハ、弘法大師ノ入室灑瓶ノ弟子、瑜伽灌頂ノ補処、智徳秀一ニシテ験徳無双ノ聖タリキ。大法慢ヲ起シテ日本第一ノ大天狗ト成テ候キ。此ヲ愛宕山ノ太郎坊ト申也」（1—五三〇頁）。あるいは「太郎焼亡」というこの大火の通称もこれと関わるか。この呼称は、『清辨眼抄』に「後清録記云、治承二年戊戌四月廿四日戊子、夜半計、七条北東洞院東中許洞院南焼亡……世人号次郎焼亡之。太郎、去年四月廿八日至于大極殿焼亡云々」（群書七—六三二—六三三頁）と見えるのが初出。これが〈盛〉編纂時に、愛宕山太郎坊、比良山次郎坊と結びつけられ、このような噂を生んでいたか。もちろん、延焼した戌亥の方角に愛宕山が位置することがその連想の背景にあるだろう。

〈盛〉の本段はおそらく後世に作られたものであり、安元の大火当時、愛宕山と天狗の結びつきがどの程度一般的に認識されていたのかは検討を要するだろう。

○天狗ノシハザ 火元の樋口富小路から内裏にまで火災が広がったのは天狗の仕業であるとする。天狗と火災を結び付けるのは、『看聞御記』応永二十三年正月九日条「北山大塔へ七重、為雷火炎上云々。雷三度落懸。僧俗番匠等捨身命雖打消、遂以焼失。併天魔所為勿論也。(中略)又聞、九日大塔上ニ喝食二三女房等徘徊。入夜蠟燭二三十廷バカリトボシテ見ヘケリ。不<sub>レ</sub>経<sub>二</sub>幾程<sub>一</sub>炎上云々。天狗所行歟云々」(統群書補遺二上―二頁)など散見する。『太平記』卷二十一「法勝寺塔炎上之事」にも「康永元年三月廿日、岡崎ノ在家ヨリ俄ニ失火出来テ廳テ焼静リケルガ、纔ナル細<sub>ホ</sub>嫺<sub>ツ</sub>一ツ遥二十

# 【引用研究文献】

\*遠藤邦基「類推―マ行音とバ行音の交替を中心に―」(『研究紀要(光華女子短期大学)』六号、一九六九・一)

\*久留島元「天狗説話の展開―「愛宕」と「是害房」」(国際日本文化研究センター「国際シンポジウム四五号(二〇一三)、二〇一五・一)

## 大極殿焼失

<sup>1</sup>樋口富小路ヨリスヂカヘニ<sup>2</sup>乾ヲ差テ、車ノ輪程也ケル炎、内裏ノ方ヘゾ飛行ケル。コレ直事ニ非ズ。<sup>3</sup>比叡山ヨリ猿其ガ松ニ火ヲ<sup>4</sup>付<sup>5</sup>持下ツ、京中ヲ焼<sup>6</sup>松トゾ<sup>6</sup>人ノ夢ニハ見タリケル。神輿ニ矢立<sup>7</sup>神人<sup>8</sup>宮司被<sup>9</sup>射殺<sup>9</sup>タリケレバ、山王<sup>10</sup>嚙<sup>10</sup>ヲ成給<sup>10</sup>角<sup>10</sup>亡シ給ケルニコソ。人恨<sup>11</sup>神<sup>11</sup>嚙<sup>11</sup>、必<sup>12</sup>災害成<sup>12</sup>トイヘリ、誠<sup>13</sup>哉<sup>13</sup>此<sup>14</sup>事<sup>14</sup>。大極殿<sup>15</sup>清和帝ノ御時、貞観十八年四月九日焼<sup>16</sup>タリケルヲ、同十九年<sup>17</sup>正月三日、<sup>18</sup>陽成院ノ御即位ハ豊樂院ニテゾ有ケル。<sup>19</sup>元慶元年四月九日事始<sup>20</sup>有テ、同三年<sup>21</sup>十月八日ゾ被<sup>22</sup>造出<sup>22</sup>タリケル。

<sup>17</sup>後冷泉院御宇、天喜五年二月廿一日ニ又焼ニケリ。治暦四年八月二日事始有テ、同年十月十日棟上有ケレ共、不<sup>23</sup>被<sup>24</sup>造出<sup>24</sup>、<sup>25</sup>後冷泉院ハ隠レサセ給ニケリ。<sup>26</sup>後三条院ノ御時、延久四年十月五日被<sup>27</sup>造出<sup>27</sup>、<sup>28</sup>行幸<sup>28</sup>有テ宴会<sup>29</sup>被<sup>29</sup>行<sup>29</sup>、<sup>30</sup>文人詩ヲ奉リ、伶人<sup>31</sup>樂ヲ奏シケル。今ハ世末ニ成<sup>32</sup>、<sup>33</sup>国<sup>33</sup>ノ力衰テ、又造出サル、事難<sup>34</sup>モヤアラント、皆人歎<sup>35</sup>合給ケリ。<sup>36</sup>嵯峨帝ノ御時、空海僧都<sup>37</sup>勅ヲ奉テ、<sup>38</sup>大極殿ノ額ヲ<sup>39</sup>被<sup>39</sup>書タリ。<sup>40</sup>小野道風<sup>41</sup>見<sup>42</sup>之<sup>42</sup>、<sup>43</sup>大<sup>43</sup>極殿ニハ<sup>44</sup>非ズ、<sup>45</sup>火極殿トゾ見エタル。<sup>46</sup>火極トハ火ヲ<sup>47</sup>極ト読<sup>47</sup>リ。未来イカバ<sup>48</sup>有ベカルラン。筆勢過<sup>49</sup>タリ<sup>49</sup>トゾ笑ケル。去

余町ヲ飛去テ、法勝寺ノ塔ノ五重ノ上ニ落止ル。……焼ケル最中ニ外ヨリ見ケレバ、烟ノ上ニ或ハ鬼ノ形ナル者火ヲ諸堂ニ吹掛ケ、或ハ天狗ノ形ナル者松明ヲ振上テ、塔ニ火ヲ付ケルガ、金堂ノ棟木ノ落ルヲ見テ、一同ニ手ヲ打テドツト笑ヒ愛宕ノ大嶽・金峯山ヲ指テ去ト見ヘテ、暫ク有レバ花頂山ノ五重ノ塔、醍醐寺ノ七重ノ塔、同時ニ焼ケ、ル事コソ不思議ナレ」(元玖本三―三四八―三四九頁)とあり、このように天狗が火を付けて回ったとするのは、本段と共通する天狗のイメージによる。なお、〈盛〉は大火の原因を山王の祟りに求めつつも、ここで天狗の所為を描くことで、少し視点がずれてしまっている。本段が〈底・近・静〉いずれも一字下げであるように、後に発生した説をここに補入したことによるのであろう。

パニヤ、今カク亡ヌルコソ浅増ケレ。

(七)

【校異】1 〈近〉合点あり。行の冒頭に「大極殿焼失」と傍書。〈静〉「樋口富小路より」。2 〈蓬・静〉「戌亥を」。3 〈近〉「ひえのやまより」、〈蓬・比叡山より〉、〈静〉「比叡山より」。4 〈近〉「つけ」、〈蓬・静〉「つけて」。5 〈近〉「もてくたりつ」、〈蓬〉「もちくたりつ」、〈静〉「もち下りつ」。6 〈近〉「人ノ夢ニハ」なし。7 〈近〉「じんにな」、〈蓬〉「神人」、〈静〉「神人」。8 〈近〉「みやじ」、〈蓬〉「宮司」、〈静〉「宮司」。9 〈近〉「ほろほし給ふけるにこそ」。10 〈近〉「いかる」、〈蓬〉「いかり」、〈静〉「唄」。11 〈蓬〉「言」、〈静〉「言」。12 〈近〉「大ごくてんは」、〈蓬〉「大極殿は」、〈静〉「大極殿は」。13 〈近〉「せわていの」。〈蓬〉「清和帝の」とし、右に「文徳御子」を傍記。〈静〉「清和帝の」とし、右に「文徳御子」を傍記。14 〈蓬〉「陽成院の」とし、右に「清和太子」を傍記。〈静〉「陽成院の」とし、右に「清和太子」を傍記。15 〈近〉「げんきやう」、〈蓬〉「元慶」、〈静〉「元慶」。16 〈蓬・静〉「十月八日にそ」。17 〈近〉「これぜいゐんのぎよう」とし、「れぜ」の間に補入符あり。右に「い」を傍記。〈蓬〉「後冷泉院御宇」。なお、〈蓬・静〉右に「後朱雀院太子」を傍記。18 〈近〉「これいせいゐんは」、〈蓬〉「後冷泉院は」、〈静〉「後冷泉院は」。19 〈近〉改行あり。なお、「ご三でうのゐんの」。〈蓬〉「後三条院の」。20 〈近〉「十五日」。21 〈近〉「つくりいたされ」、〈蓬〉「造出されて」、〈静〉「造出されて」。22 〈近〉「ぎやうがう」。23 〈近〉「あつて」、〈蓬・静〉「ありて」。24 〈近〉「おこなはる」、〈蓬・静〉「おこなはれ」。25 〈近〉「ぶんじん」、〈蓬〉「文人」。26 〈蓬・静〉「ノ」なし。27 〈近〉「さかのみかどの」、〈蓬〉「嵯峨帝の」、〈静〉「嵯峨帝の」。28 〈近〉「うけたまはて」、〈蓬〉「うけて」。29 〈近〉「大ごくでんの」、〈蓬・静〉「大極殿の」。30 〈近〉「かゝれたり」、〈蓬〉「書せられたり」、〈静〉「書せられたり」。31 〈近〉「をのゝみちかぜ」、〈蓬・静〉「小野道風」。32 〈近〉「だいくてんには」、〈蓬〉「大極殿には」。33 〈近〉「あらすす」。34 〈近〉「くはごくでんとぞ」、〈蓬・静〉「火極殿とぞ」。35 〈近〉「くはごくとは」、〈蓬・静〉「火極とは」。36 〈近〉「きはむと」、〈蓬〉「極と」、〈静〉「極と」。37 〈近・蓬・静〉「あるへからん」。

【注解】○樋口富小路ヨリスチカヘニ乾ヲ差テ……コレ直事ニ非ズ

〈四・長〉ほぼ同。〈闕・延・南・屋・覚〉もほぼ同じだが「内裏ノ方ヘゾ」とは明記しない。〈中〉は「しやりんばかりなるはむらが、三ちやう五ちやうをへだてゝ、とびこえゝいぬををさしてやけゆけば、おそろしなどもをろかなり」（六五頁）として、「樋口富小路ヨリスチカヘニ」に当たる記述がない。また〈南・屋・覚〉はこの一文、大火記事の冒頭に、〈中〉は大内裏焼亡記事の前に、〈闕〉は名所焼亡箇所の前にあり。前々段「折節異ノ風ハゲシク吹テ、乾ヲ指テ燃ヒロゴル」項参照。「スチカヘ」は「筋違」で、通りを違えながら斜め

方向に進むこと。卷三十五・木曾惜貴女遺「五条ヲ東ヘ油小路ヲスチカヘニ六条川原ヘ出タレバ」（5—101頁）。『方丈記』も「都ノ東南ヨリ火出デ来テ西北ニイタル」（新大系四頁）と記すように、まさに火は「スチカヘ」に燃え広がったのである。○比叡山ヨリ猿共ガ松ニ火ヲ付持下ツ、……山王唄ヲ成給、角亡シ給ケルニコソ 〈延〉「偏ニ叡山ヨリ猿多ク松ニ火ヲ付テ京中ヲ焼トゾ、人ノ夢ニ見タリケル」（二〇七頁）。〈四・闕・長〉も〈延〉にほぼ同じ。〈南・屋・覚・中〉「山王の御とがめとて、比叡山より大なる猿どもが三千（南・屋・中）「二千」おりくだり、手々に松火をともして京中を焼くとぞ、人の

夢には見えたりける」(《覚》六二頁)。(《盛》は「神輿ニ矢立、神人宮司被<sub>レ</sub>射殺<sub>二</sub>タリケレバ、山王嘯<sub>レ</sub>成給、角亡シ給ケルニコソ」と御輿振の一件との関係を具体的に説明する一節がある。出火原因を、矢を射た当事者である成田為成らの酒盛に求めていることも対応するだろう。いずれにせよ、諸本いずれも安元の大火を山門による一連の事件との繋がりで把握している。このような理解は一般的なものであったのだろうか。平安末期写、お茶の水図書館成實堂文庫蔵『年号次第』には、「其後加賀守師高尾張国配流、射<sub>二</sub>神輿<sub>一</sub>下手人六人禁獄。然而猶依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>叶<sub>二</sub>神慮<sub>一</sub>、同月廿八日夜、大焼亡。大極殿、会昌門、応天門、朱雀門、東西楼、回廊、民部省、式部省、神祇官、大学寮、大膳職、真言院、勸学院、京中二百丁許焼失了。炎本樋口富小路也」(佐々木紀一、九七頁。牧野和夫は、傍線部を「猶不<sub>レ</sub>叶神慮」とする。また「廿八日」と「夜」の間に破損があるとする。五六頁)とある。佐々木紀一も指摘するように(九七頁)、傍線部のごとく、配流や禁獄では神慮に叶わず、大焼亡に発展したと解釈するのは、『平家物語』にも通じる。鎌倉時代の年代記『皇帝紀抄』には、谷口廣之や美濃部重克が指摘するように、「元年四月廿八日夜、自朱雀門北至于大極殿・小安殿・八省院及神祇官焼失。火起樋口富小路、京中三分之一灰燼。世人称「日吉神火」(群書三三七〇頁)とあり、『歴代皇紀』にも「大内裏焼亡事、去十三日山王神輿被<sub>レ</sub>射無<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>。弥(訴イ)付座主於檢非違使被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>山僧<sub>一</sub>。仍偏山王所為之由、京中風聞云々」(改訂史籍集覧二二三頁)とあるように、大火を日吉の神火とする噂もあったことが分かる。しかし、美濃部重克も指摘するように、古記録類には大火を天変によるものと理解されていたことが窺える。『玉葉』四

月二十八日条では、大火の記事に続いて、「凡余焰之為体非直也事歟。火災盜賊、大衆兵乱、上下騒動、縑素奔走、誠是乱世之至也。非人力之所及、天変雖頻呈、法令敢不改、致殃招禍、其不然哉。熒惑人太微、涉旬涉月。熒惑是火精也。太微即宮城也。華洛成灰燼、變異之驗、可謂揭焉歟。故殿常仰云、末代之天変、咎微速疾、是不施化不行德之所致也云々。先賢之語誠矣此言」とあり、火精たる熒惑星(火星)が宮城を意味する太微垣の領域に入る天変によって大火を理解していた(三十日条にも同様の記述がある)。「愚昧記」同日条にも、「自<sub>二</sub>去年十月<sub>一</sub>火星入<sub>二</sub>太微<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>今不出云々。已是彼変之所為也」とあり、これが当時の貴族の一般的な理解であったと言えようか。谷口廣之は、「熒惑が太微を犯すことの意味は、まさしく「群臣たちが天子に対して陰謀をたくらむ」点に」あり、これは「見えないところで成親などをはじめとする院の近臣たちの謀略がたくらまれているという進行が隠されている」(七〇頁)とする。ただ、実際には『平家物語』はこの天変説を採らずに、神威によるものとしている。美濃部重克は「天変が政治の悪を責め、安元の大火が天変の警告したところの凶事である」とすると、それは後白河院の治世に対する指弾である。大内裏は後白河院が保元の新制にかかわる一大事業として復興したもので、それが炎上したことは後白河院の政治の悪を天が厳しく責めたことを意味する」とし、それを回避することで「安元の大火は神輿に矢を射立てる不祥事にのみ関係づけられる。しかも不祥事は平重盛の警固する陣頭においてであった。その事実を書くことによって後白河院批判が回避され、また平家の瑕疵が印象づけられている」と言っている(九八・九九頁)と読み取る。○人恨神嘯、必



災害成トイヘリ（盛）の独自異文。「人恨み神嘖る、必ず災害成るといへり」と読むか。遠藤光正は、『貞観政要』巻一の君道編に、「夫事無可観、則人怨神怒。人怨神怒、則災害必生。災害既生、則禍乱必作」とあるものが典拠である。『貞観政要』の通行刊本では、「夫事無可観則人怨、人怨則神怒。神怒則災害必生」とあって、盛衰記の文とは合わない。盛衰記の本文は『貞観政要』の旧鈔本の文字を伝えているものである（原田種成博士の説に拠る）（一一一頁）と指摘する。先に神輿下洛の先例を挙げる段には、「人恨神怒レバ災害必成トイヘリ」（一一二六頁）とあった。また、白山衆徒からの返牒には、「人恨融于神、々嘖通于人」（人々の恨みが神に届き、神の怒りが人々に通じた。本全釈一一七四頁）と、類似した表現が見られる。○大極殿清和

帝ノ御時、貞観十八年四月九日焼タリケルヲ 以下、大極殿焼亡の前例記事は諸本にも見られる。大極殿が焼亡したことは前掲「ハテハ大内ニ吹付タリケレバ」項で見たように諸記録が取り上げるところであり、さらに『玉葉』は四月三十日条で大極殿等の焼亡の先例を尋ねている。「天皇が即位する儀礼空間としての大極殿の焼失は宮域の他の殿舎とは異なる重大な意味をも」（六二頁）ったからである（谷口廣之）。『平家物語』が前例を挙げるのもこの認識に従うものである。『玉葉』「今朝問大極殿・真言院・八神殿等焼亡之例於頼業之許。令申云、『貞観十八年四月十日、丁巳、子時、大極殿災（于時御内裏（中略）天喜六年二月廿六日、丁卯、亥刻、大極殿・新造内裏（白渡御一条院）、中院等焼亡（中略）已上大極殿炎上例ニケ度歟（後略）』。『百練抄』も「大極殿焼亡例」として「清和天皇 貞観十八年四月十日丁巳、後冷泉院 天喜六年二月廿六日丁卯（造畢之後、経百八十

年）、高倉院 治承元年四月廿八日（延久四年造畢之後、経百二十年）、此後無「造宮」とするようになり、『平家物語』が記すとおり、これ以前に二度の大極殿焼亡があった。一度目の清和天皇、貞観十八年（八六七）の折の大極殿焼亡については次のとおり。（四・闕・延・長・盛・南）「四月九日、（屋・覚・中）日付を欠く。先に引いた『玉葉』の記す四月十日が正しい。『三代実録』四月十日条「是夜子時、大極殿災、延焼小安殿、蒼竜白虎兩楼、延休堂及北門北東西三面廊百余間。火数日不滅」。○同十九年正月三日、陽成院ノ御即位ハ豊楽院ニテゾ有ケル 即位の日付、（四・長・盛・南・屋・覚・中）「正月三日、（延）「正月九日」、（闕）「四月三日」。『三代実録』貞観十九年正月三日条「天皇即位於豊楽殿（大極殿未作。故用豊楽殿ニ云々）。○元慶元年四月九日事始有テ、同三年十月八日ソ被造出タリケル

大極殿事始め、（四・闕・長・盛・南・屋・覚・中）「四月九日、（延）「四月廿一日」。元慶元年（八七七）は貞元十九年。四月九日が正しい。『三代実録』四月八日条「欲以今月九日、始作大極殿」。大極殿の完成は、（四・闕・延・盛）元慶三年十月八日、（長）元慶三年十月十日、（南・屋・覚）元慶二年十月八日、（中）元慶二年八月とするが、元慶三年十月八日が正しい。『三代実録』十月八日条「大極殿成。右大臣設宴於朝堂院含章堂」。○後冷泉院御宇、天喜五年二月廿一日ニ又焼ニケリ 二度目の後冷泉天皇、天喜五年（一一〇五七）の折の大極殿焼亡については次のとおり。（延）は天喜五年「四月廿一日」として、「二月」と傍記。（四・闕・長・盛）天喜五年二月二十一日、（南・屋・覚・中）天喜五年二月二十六日。（中）「後冷泉院御宇」なし。『玉葉』『百練抄』『扶桑略記』等に見るように、天喜六年二月二十六日が正しい。



『扶桑略記』天喜六年二月二十六日条「内裡并中和院、大極殿、東西樓、廻廊、朝集堂等皆悉焼亡」。○治暦四年八月二日事始有テ、同年十月十日棟上有ケレ共、不被造出、後冷泉院ハ隠レサセ給ニケリ。大極殿事始め、〈四・延・長・盛・南〉治暦四年（一〇六八）八月二日、〈闕〉治暦二年八月二日、〈屋・中〉治暦四年八月、〈覚〉治暦四年八月十四日。『扶桑略記』治暦四年八月十四日条に「造始大極殿」とあり、〈覚〉が正しいことになるが、『本朝世紀』では同八月二日条に「大極殿事始」とあり、〈四・延・長・盛・南〉が正しいことになる。大極殿上棟、〈四・延・盛〉治暦四年十月十日、〈闕〉治暦二年十月十日、〈長〉「同三年」（一——一三頁）とするが、その前に「治暦四年」としているから前後する。〈中〉治暦四年十月。〈南・屋・覚〉上棟の件記さず。『扶桑略記』治暦四年十月十日条に「太極殿堅柱上棟」とある。しかし後冷泉院はそれ以前、治暦四年四月十九日に崩御している。後冷泉天皇のもとで大極殿を再建する動きもあったが、頼通が父道長創建の法成寺再建、あるいは平等院造営を優先させたために実現しなかったと考えられる（美川圭四〇頁）。大極殿で即位式を挙行できない屈辱を味わった後三条天皇は、すぐさま大極殿の再建に取りかかった。○後三条院ノ御時、延久四年十月五日被造出、行幸有テ宴会被行、文人詩ヲ奉リ、伶人楽ヲ奏シケル。後三条天皇の折大極殿が再建されたのは、〈四・闕〉延久四年（一〇七二）十月十五日、〈延〉「延久四年十月十日」〈長・盛〉延久四年十月五日、〈南・屋・覚・中〉延久四年四月十五日。〈覚〉は「行幸有テ宴会被行」なし。『扶桑略記』によれば、四月三日条に「大極殿并蒼龍白虎両樓諸門等、各打題額。内匠頭源兼行書之」とあり、十五日条に「行幸大極殿、被行宴会」。王公以下文人以上献

詩、雅楽奏歌舞」。秉燭講詩。高御座東、文人等祇候。賜禄有差。式部大輔藤原実綱作序并講御製。殊有感賞。被聴昇殿」とある。後三条天皇にとって念願の大極殿が再建され、盛大に祝宴が催されたことが窺える。○今ハ世末二成、国ノ力衰テ、又造出サル、事難モヤアラント、皆人歎合給ケリ。焼失の度毎に、二度にわたって再建された大極殿ではあったが、今回は世も末となり、国の力も衰えて、再建はさすがにむずかしいであろうと人々は歎き合ったとする。〈四・闕・延・長・南・屋・覚・中〉にもほぼ同文あり。但し〈延〉はこの前に「此内裏ハ四位少納言入道信西……」と、焼じた内裏が信西の尽力によりなされたものであったことを記す一文あり。〈延全注釈〉（巻一——六一八頁）が指摘するように、これまでの大極殿焼亡の歴史を述べてきた文脈からは屈折しているが、今回焼失した大極殿が、信西の大内裏造営によって立派に整備されたものであることを述べようとするのであろう。一方、〈闕〉は、再建はさすがにむずかしいと人々が歎いたとする記事に続けて、「雖然○小納言通憲入道貞潔人<sup>ニテ</sup>遂ニ造立<sup>ニケリ</sup>」（巻一上——三九才）とする。安元の大火後に、信西が見事に大極殿の再建を果たしたかのように記す。しかし、これは間違いで、〈延〉の本文の誤読による改変の結果と見て良からう。○嵯峨帝ノ御時、空海僧都勅ヲ奉テ、大極殿ノ額ヲ被書タリ……未来イカダ有ベカルラン。筆勢過タリトゾ笑ケル。大極殿の額をめぐる逸話、〈盛〉の独自異文。『本朝神仙伝』第十六などによると、空海は大内裏の南面三門（朱雀門・美福門・皇嘉門）また応天門の額を揮毫したとされる。しかし大極殿の額については、『江談抄』第一（二七）に大内裏の門について「南面は弘法大師、東面は嵯峨帝、北面は橘逸勢なり」と云々。（中略）また、大

極殿の額は敏行中將の手跡なり。ただし火災以前は誰人の書なりや（新大系一六頁）とあり、こうした伝承が実際にあったことは『弘法大師御伝』や『大内裏抄』にも確認できるが（江談抄研究会三四五頁）、大極殿の額が空海の筆跡という伝承はなかったようである。〈盛〉以前にこの逸話は確認できない。『太平記』巻十二では、大内裏焼亡の理由を述べる中で次のように〈盛〉と同様の説話を引く（森田貴之）。「高野ノ大師是ヲ驢テ、門々ノ額ヲ書セ給ケルニ、大極殿ノ大ノ字ノ中ヲ引切テ、火ノ字ニ成レ、朱雀門ノ朱ノ字ノ上ヲ書替テ、米ノ字ニソ遊ケル。於時ニ小野道風是ヲ見テ、『大極殿ハ火極殿、朱雀門ハ朱雀門』トゾ難

## 【引用研究文献】

- \* 遠藤光正『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠（八）（東洋研究一〇四号、一九九二・9）
- \* 江談抄研究会『古本系 江談抄注解（補訂版）』（武蔵野書院一九九三・5）
- \* 佐々木紀一「語られなかった歴史―『平家物語』「山門強訴」から「西光被斬」まで」（『文学三巻四号、二〇〇二・7）
- \* 谷口廣之「平家物語内裏炎上の深層―日吉神火と熒惑入太微―」（『同志社国文学三八号、一九九三・3）
- \* 牧野和夫「成實堂文庫蔵『年号次第』一冊とその周辺―『平家物語』の生成の一齣―」（『実践国文学五六号、一九九9・10。『延慶本『平家物語』の説話と字問』思文閣出版二〇〇五・10再録。引用は後者による）
- \* 美川圭『後三条天皇』（山川出版社二〇二六・9）
- \* 美濃部重克『平家物語』における〈換喩的文学〉〈隱喩的文学〉の二つの表情―ことに〈隱喩的文学〉 卷二「御輿振」から「内裏炎上」への展開―（『年報中世史研究三〇号、二〇〇五・5。『観想 平家物語』三弥井書店二〇二二・8再録。引用は前者による）
- \* 森田貴之『『太平記』と弘法大師説話―引用説話の射程―』（『太平記をとらえる 第二巻』笠間書院二〇一五・10）

本稿の分担は次のとおりである。

村井が本文・校異の礎稿を作成、早川・志立・橋本が注解の礎稿を作成した上で、特に国語学的事項については村井が、歴史学的事項については曾我が、中国文学的事項については近藤が中心となって、共著者六名で相互に検討を加えた。

ジケル。（中略）遂貞観元年ニ大極殿ヨリ火出デ、諸司八省悉ク焼ニケリ（元玖本二一三〇—三三一頁）。この原拠というべき話として、『本朝神仙伝』『弘法大師』に見える、小野道風が空海が書いた「朱雀門」を「朱雀門」と難じた逸話（日本古典全書三六〇頁）、また『古今著聞集』巻七・二八七「弘法大師等大内十二門の額を書す事並びに行成美福門の額修飾の事」に見える、小野道風が空海の筆に対して「美福門は田広し、朱雀門は朱雀門」（旧大系三三三頁）と難じたとする逸話がある。このように道風が空海の筆を難じる説話が展開する中で大極殿の逸話も創り出され、それを〈盛〉や『太平記』は引いているのだろう。